

(中学校編)

今、求められる力を高める 総合的な学習の時間の展開

未来社会を切り拓く確かな資質・能力の育成に向けた
探究的な学習の充実とカリキュラム・マネジメントの実現

令和4年3月



文部科学省

まえがき

近年、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、さらには、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大など、まさに予測困難な時代を迎えようとしています。

このような時代にあつて、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められています。

総合的な学習の時間は、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目標にしていることから、これからの時代においてますます重要な役割を果たすものです。

平成29年3月の学習指導要領の改訂においては、探究的な学習の過程を一層重視し、各教科等で育成する資質・能力を相互に関連付け、実社会・実生活において活用できるものとするとともに、各教科等を越えた学習の基盤となる資質・能力を育成することを基本的な考え方としており、その実現に向けて、探究的な学習における4つのプロセス（課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現）の質的充実が求められています。

また、令和3年1月の中央教育審議会の答申では、多様な課題が生じている今日においては、これまでの文系・理系といった枠にとらわれずに各教科等の学びを基盤としつつ、様々な情報を活用しながらそれを統合し、課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結びつけていく資質・能力の育成が求められるとして、総合的な学習の時間における教科等横断的な学習や探究的な学習の充実を図るとともに、STEAM教育に取り組むことが期待されています。

本書は、学習指導要領の改訂等を踏まえ、総合的な学習の時間に係る計画の基本的な考え方や具体例、学習指導及び総合的な学習の時間を推進するための体制づくりなどについて、わかりやすく解説するとともに、優れた実践事例を取り上げました。

各教育委員会及び各学校において、本書が積極的に活用され、総合的な学習の時間の一層の充実が図られることを期待しています。

最後に、本書の作成に当たり、多大な御協力をいただいた協力者や関係の方々に、心から感謝申し上げます。

令和4年3月

目次

はじめに	4
◎今, 求められる資質・能力	4
◎総合的な学習の時間で 生徒, 教師, 地域が変わる!	9
◎「主体的・対話的で深い学び」を実現する総合的な学習の時間	13

第1編 総合的な学習の時間において求められる授業改善 15

第1章 総合的な学習の時間の成果と探究的な学習の過程の充実	16
-------------------------------	----

第2章 充実した総合的な学習の時間を実現するための学習指導	19
-------------------------------	----

第1節 学習指導の基本的な考え方	19
1. 学習過程を探究的にすること	19
2. 他者と協働して主体的に取り組む学習活動にすること	20
第2節 探究的な学習の指導のポイント	24
1. 課題の設定	24
[コラム] 課題の設定の視点	29
2. 情報の収集	30
3. 整理・分析	39
4. まとめ・表現	50
[コラム] ICT端末の活用	58
[コラム] 教育・学習におけるICT活用の特性・強み	60
[コラム] 総合的な学習の時間における「考えるための技法」の活用	61

第2編 総合的な学習の時間とカリキュラム・マネジメント 65

第1章 カリキュラム・マネジメントの充実	66
----------------------	----

第2章 全体計画の作成	67
-------------	----

第1節 全体計画の基本的な考え方	67
1. 全体計画の概要	67
2. 全体計画の中心となる三要素	69
3. 三要素を明確にすることの価値	69
第2節 全体計画作成の進め方	70
1. 学校教育目標を確認する	70
2. 各学校において定める目標を設定する	71
3. 目標を実現するにふさわしい探究課題	72
4. 探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力	74
[コラム] SDGsの視点を取り入れる	82
第3節 全体計画の具体例	84

第3章 年間指導計画の作成	86
---------------	----

第1節 年間指導計画の基本的な考え方	86
1. 年間指導計画とその構成要素	86
2. 年間指導計画における時数配当の考え方	86

3. 年間指導計画における単元配列の考え方	87
第2節 年間指導計画作成上の留意点と具体例	90
1. 生徒の学習経験に配慮すること	91
2. 季節や行事など適切な活動時期を生かすこと	92
3. 各教科等の関連を明らかにすること	92
4. 外部の教育資源の活用及び異校種の連携や交流を意識すること	95
第4章 単元計画の作成	97
第1節 単元計画の基本的な考え方	97
1. 単元計画作成の手順	97
2. 単元計画としての学習指導案	100
第2節 単元計画作成の具体的手順	101
1. 全体計画・年間指導計画を踏まえる	101
2. 三つの視点から生徒の姿を思い描く	103
3. 探究的な学習として単元が展開するイメージを思い描く	105
4. 単元計画を具体的に書き表す	106
第5章 総合的な学習の時間の評価	114
第1節 生徒の学習状況の評価	114
1. 学習評価の基本的な考え方	114
2. 全体計画に示した「学習の評価」の具体化	116
3. 評価の観点の設定	116
4. 学習状況の評価の手順	116
5. 多様な評価の方法	118
第2節 教育課程の評価	121
1. 教育課程の評価の基本的な考え方	121
2. 教育課程の評価項目・指標等の検討	121
3. 教育課程の改善と外部への説明	122
第6章 総合的な学習の時間を支えるための体制づくり	123
第1節 体制整備の視点と校長のリーダーシップ	123
1. 求められる校長のリーダーシップ	123
2. 体制整備の4つの視点	124
第2節 組織整備の実践事例	125
1. 指導体制と運営体制の整備	125
2. 校内研修等の充実	133
[コラム]総合的な学習の時間を進める中で教師が育つ—OJTの中で高められる教師としての専門性—	135
第3節 授業時数の確保と弾力的な運用の実践例	136
[コラム]休業日等における総合的な学習の時間の学校外の学習活動の取扱いについて	138
第4節 学習環境の整備の実践事例	139
1. 学習空間の確保	139
2. 教室内の学習環境の整備	140
3. 学校図書館の整備	142
第5節 外部との連携の構築の実践事例	144
(参考資料) STEAM教育等の教科等横断的な学習の推進による資質・能力の育成	147

はじめに

今、求められる資質・能力

【未来を切り拓き、よりよい社会を創造する】

平成28年12月21日中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」では、「人間は感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え出すこと」や、「答えのない課題に対して、多様な他者と協働しながら目的に応じた納得解を見いだしたりすること」など、人間本来がもち合わせている価値や強みについて言及されており、「予測困難な時代に、一人一人が未来の創り手となる」ことが示されている。この文言からは、情報化やグローバル化といった加速度的に進展する社会的な変化、あるいは、誰も予測できなかった未曾有の感染症に対峙していくような、たくましく未来を生きる子供たちを育成することが、これからの学校教育に求められていると考えることができる。

たくましく未来を生きる子供たちを育成するためには、生涯にわたる学びの基盤となる資質・能力をしっかりと発揮できるようにしていくことが重要となる。子供たち一人一人が、社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を發揮し多様な他者と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、未来の創り手となるために必要な力を育むことが求められているのである。

急激な環境の変化の中、子供たちは決して暗く沈んでいるわけではない。例えば、東北の人々が東日本大震災から立ち直るのに、教育活動における取組が復興に向かう引き金になったことが数多く報告されているように、子供たちは常に前を向き、明るい未来を夢見ている。

予測困難な時代だからこそ、一人一人の子供のよさや可能性に大いに期待をしたい。未来を生きる子供たちが時代を創っていくということを、教育に携わる我々は今一度認識する必要があるだろう。



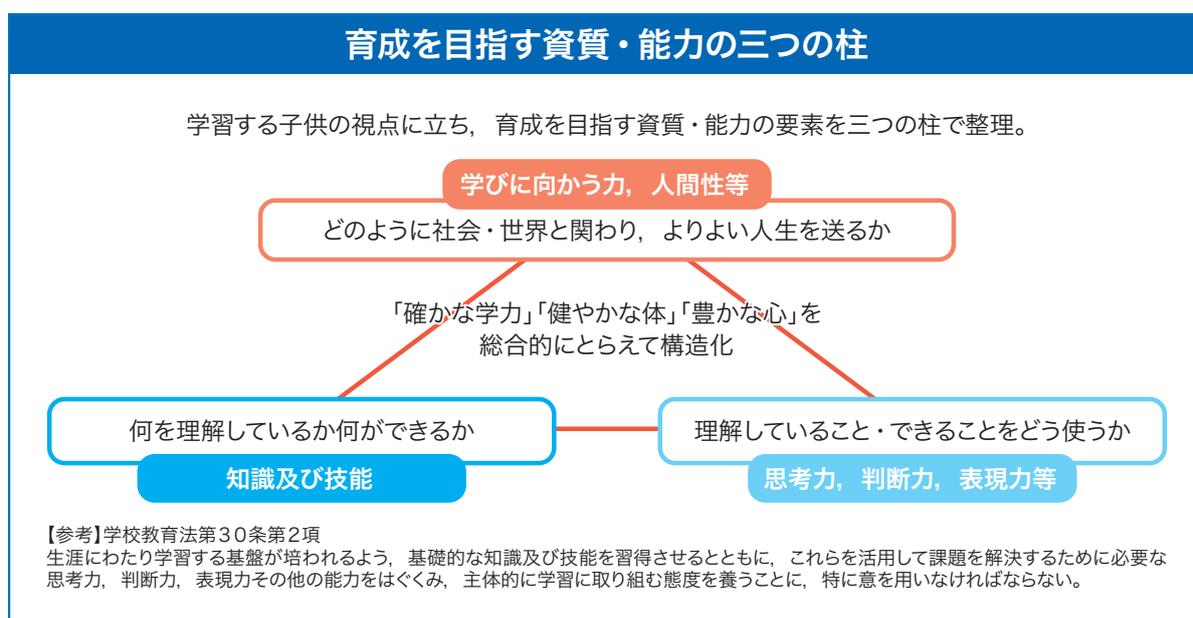
【育成を目指す資質・能力】

中央教育審議会答申においては、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要であること、こうした力は全く新しい力ということではなく学校教育が長年その育成を目指してきた「生きる力」であることを改めて捉え直し、学校教育がしっかりとその強みを発揮できるようにしていくことが必要とされた。また、汎用的な能力の育成を重視する世界的な潮流を踏まえつつ、知識及び技能と思考力、判断力、表現力等をバランスよく育成してきた我が国の学校教育の蓄積を生かしていくことが重要とされた。

このため「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を、ア「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」、イ「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」、ウ「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」の三つの柱に整理するとともに、各教科等の目標や内容についても、この三つの柱に基づく再整理を図るよう提言がなされた。

今回の改訂では、知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育むために「何のために学ぶのか」という各教科等を学ぶ意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していくことができるようにするため、全ての教科等の目標及び内容を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で再整理している。

総合的な学習の時間で育成することを目指す資質・能力についても、他教科等と同様に、総則に示された「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」という三つの柱から明示された。



○資質・能力の三つの柱のバランスのとれた育成

これらの資質・能力の三つの柱は、個別に育成されるものではない。それゆえ、資質・能力の三つの柱がバランスよく育成されるようにしたい。そのためには、資質・能力の三つの柱の関係性について理解しておく必要がある。

子供たちは学ぶことに興味を向けて取り組んでいく中で、新しい知識や技能を得る。資質・能力の育成は、知識及び技能の質や量に支えられており、知識や技能なしに、思考や判断、表現等を深めることや、社会や世界と自己との多様な関わり方を見いだしていくことは難しい。一方で、社会や世界との関わりの中で学ぶことへの興味を高めたり、思考や判断、表現等を伴う学習活動を行ったりすることなしに、生徒が新たな知識や技能を得ようとしたり、知識や技能を確かなものとして習得したりしていくことも難しい。

そして、子供たちはそれらの知識や技能を、社会や生活の中で直面するような未知の状況の中で活用して思考することを通して、知識や技能をより確かなものとして習得するとともに、思考力、判断力、表現力等を発揮することを通して、深い理解を伴う知識が習得され、それにより更に思考力、判断力、表現力等も高まる。

学びに向かう力、人間性等は、他の二つの柱をどのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素である。習得した知識や技能、育成された思考力、判断力、表現力等を、新たな学びに向かったり、学びを人生や社会に生かそうとしたりする力として育てていくことが求められる。

このように、資質・能力の三つの柱は、相互に関係し合いながら育成されるものである。以下では、総合的な学習の時間において育成を目指す資質・能力とそれぞれの関係性について解説する。

○「知識及び技能」～何を理解しているか、何ができるか～

探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。【第1の目標の(1)】

総合的な学習の時間における探究の過程では、生徒は、教科等の枠組みを超えて、長時間じっくり課題に取り組む中で、様々な事柄を知り、様々な人の考えに出会う。その中で、具体的・個別的な事実だけでなく、それらが複雑に絡み合っている状況についても理解できるようになる。その知識は、教科書や資料集に整然と整理されているものを取り込んで獲得するものではなく、探究の過程を通して、自分自身で取捨・選択し、整理し、既にもっている知識や体験と結び付けなが



ら、構造化し、身に付けていくものである。こうした過程を経ることにより、獲得された知識は、実社会・実生活における様々な課題の解決に活用可能な生きて働く知識、すなわち概念が形成される。総合的な学習の時間では、各教科等で習得した概念を実生活の課題解決に活用することを通して、それらが統合され、より一般化されることにより、汎用的に活用できる概念を形成することができる。

技能についても同様である。課題の解決に必要な技能は、例えば、インタビューのときには、聞くべきことを場合分けしながら計画する技能、資料を読み取るときには、大事なことを読み取ってまとめる技能、稲刈りなどの体験をするときには、安全に気を付けて体を動かす技能などが考えられる。こうした技能は、各教科等の学習を通して、事前にある程度は習得されていることを前提として行われつつ、探究を進める中でより高度な技能が求められるようになる。このような必要感の中で、注意深く体験を積んで、徐々に自らの力でできるようになり身体化されていく。技能と技能が関連付けられて構造化され、統合的に活用されるようになる。

○「思考力、判断力、表現力等」～理解していることやできることをどう使うか～

実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。【第1の目標の(2)】

育成を目指す資質・能力の三つの柱のうち、主に「思考力、判断力、表現力等」に対応するものとしては、実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現するという、探究的な学習の過程において発揮される力を示している。

具体的には、身に付けた「知識及び技能」の中から、当面する課題の解決に必要なものを選択し、状況に応じて適用したり、複数の「知識及び技能」を組み合わせたりして、適切に活用できるようになっていくことと考えることができる。なお、教科等横断的な情報活用能力や問題発見・解決能力を構成している個別の「知識及び技能」や、各種の「考えるための技法」も、単にそれらを習得している段階から更に一歩進んで、課題や状況に応じて選択したり、適用したり、組み合わせたりして活用できるようになっていくことが、「思考力、判断力、表現力等」の具体と考えることができる。こうしたことを通して、知識や技能は、既知の限られた状況においてのみならず、未知の状況においても課題に応じて自在に駆使できるものとなっていく。

このように、「思考力、判断力、表現力等」は、「知識及び技能」とは別に存在していたり、「知識及び技能」を抜きにして育成したりできるものではない。いかなる課題や状況に対しても、「知識及び技能」が自在に駆使できるものとなるよう指導を工夫するこ



とこそが「思考力、判断力、表現力等」の育成の具体にほかならない。

○「学びに向かう力、人間性等」 ～どのように社会や世界と関わり、よりよい人生を送るか～

探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。【第1の目標の(3)】

課題の解決においては、主体的に取り組むこと、協働的に取り組むことが重要である。なぜなら、それがよりよい課題の解決につながるからである。総合的な学習の時間で育成することを目指す資質・能力は、よりよく課題を解決し、自分の生き方を考えるための資質・能力である。こうした資質・能力を育むためには、自ら問いを見いだし、課題を立て、よりよい解決に向けて主体的に取り組むことが重要である。

他方、複雑な現代社会においては、いかなる問題についても、一人だけの力で何かを成し遂げることが困難である。これが協働的に探究を進めることが求められる理由である。例えば、他の生徒と協働的に取り組むことで、学習活動が発展したり課題への意識が高まったりする。異なる見方があることで解決への糸口もつかみやすくなる。また、他者と協働的に学習する態度を育てることが、求められているからでもある。このように、探究的な学習においては、他者と協働的に取り組み、異なる意見を生かして新たな知を創造しようとする態度が欠かせない。

この「学びに向かう力、人間性等」については、よりよい生活や社会の創造に向けて、自他を尊重すること、自ら取り組んだり異なる他者と力を合わせたりすること、社会に寄与し貢献することなどの適正かつ好ましい態度として「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」を活用・発揮しようとする事と考えることができる。

このように、育成を目指す資質・能力の三つの柱は、探究的な学習において、よりよい課題の解決に取り組む中で、相互に関わり合いながら高められていくものとして捉えておくことが大切である。



総合的な学習の時間で 生徒、教師、地域が変わる!

総合的な学習の時間は、平成10年の学習指導要領改訂で創設された新しい学習の時間である。この時間では、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていく生徒の姿を目指している。よりよく課題を解決するために、生徒は地域に出かけたり、様々な体験活動を行ったり、多くの人と出会ったりして学んでいく。

その過程で生徒は、実際の社会や日常生活の中で活用できる資質・能力を身に付けていく。また、環境に関する問題や福祉に関する問題など、解決が困難な現代社会の課題について真剣に考えていく。そして、自らの生活や行動などを振り返り、一人一人が自分の生き方を考えていく。この先の社会は、進化した人工知能（AI）が様々な判断を行ったり、身近な物の働きがインターネット経由で最適化されたりするIoT が広がるなど、Society5.0 とも呼ばれる新たな時代の到来が、社会や生活を大きく変えていくとの予測もなされている。情報化やグローバル化が進展する社会においては、多様な事象が複雑さを増し、変化の先行きを見通すことが一層難しくなると考えられており、生徒が探究的に学ぶ総合的な学習の時間がますます重要なのである。

また、総合的な学習の時間では、生徒の成長とともに、学校や教師、地域も変容する。「生徒」「教師・学校」「地域」の姿から改めて総合的な学習の時間の意味を考えてみる。

生徒が育つ

以下は、総合的な学習の時間での生徒の言葉である。

「自分はもともと積極的に行動する性格ではなかったけど、総合的な学習の時間を通して、少しずつ積極的に行動できるようになったと思います。学校近隣の空き家問題について取り組んだことをきっかけにして、自分の住んでいる地域の問題に目が向くようになり、その問題に対してどのような取組がされているのか、自分にできることはないかなど、日頃から関心をもって過ごすようになりました。」

「いつも自分の周りにいる友達と真剣に探究活動に取り組んでいくうちに、自分にできないことを友達に助けてもらい、友達が困っていると自分が友達を手伝う、そんな当たり前のことが改めて大事だと感じました。一人の力だけではできないこと





でも、みんなで力を合わせればできるかもしれない。これからもたくさんの方の困難にぶつかるとは思いますが、力を合わせて乗り越えていきたいと思っています。」

物事の本質を探り始めようとする中学生は、実際の社会での出来事や問題を真剣に考えることで、大きく成長することが分かる。様々な出来事の背景にある目に見えない価値や意味を真剣

に問い掛けながら、その本質を自分なりにとらえようとしている姿が見て取れる。こうした表面的ではない、事象の背景を見抜き、考え抜こうとする姿に中学生にとっての総合的な学習の時間の醍醐味がある。

このように総合的な学習の時間では、自分自身のよさや可能性を実感し、これからの人生での道標を明らかにしていく生徒の姿、一人一人の考え方を確かなものとしていく生徒の姿を目にすることができる。それだけでなく、各教科等を学ぶ意味、学習することの意義を見いだす生徒の姿を見ることができる。

「総合的な学習の時間でSDGsに取り組みましたが、自分の知識が足りないことに気付かされました。これまでの私は、自分にとって必要だと思う知識を得ることだけに力を入れてきましたが、物事を考えるときには、幅広い知識と多面的な視野が必要だと考えられるようになりました。これは、私が総合的な学習の時間を通じて一番学んだことです。また、知識を組み合わせることを意識するようになりました。例えば、水資源の課題について考えるときには、社会科や理科の知識を組み合わせることで、よりよい解決策の提案に繋がることになりました。」

こうして総合的な学習の時間は、今、求められる力や確かな生徒の学力を育成していくことにつながる。

教師が変わる

以下は、総合的な学習の時間に取り組む教師の言葉である。

「教師が探究課題に対する十分な専門知識をもっていなかったために、生徒は教師を頼ることができませんでした。だからこそ、生徒は地域の方々に話を聞きに行ったり、インターネットを活用して遠く離れた地域にいる専門家から情報を得たりするなど積極的に活動に取り組むことができました。教師の役割は教えることだけではないのだと気付かされました。」

「総合的な学習の時間をきっかけに今までの教育観や生徒観が大きく変わったと思います。他の教科等の学習も含めて探究学習にいきいきと取り組む生徒を見て、学びとは何かを考えるようになりました。また、地域の課題やグローバルの課題に果敢に取り組む生徒に大きな可能性を感じています。」



総合的な学習の時間は、各学校で目標や内容を設定する。もちろん教科書もない。このことは、一見難しさや大変さを感じさせる。しかし、地域や学校、生徒の実態、特色に応じた各学校独自の学習活動を展開することができる。カリキュラムを編成し、実施する。そして、それを見直し、改善していく。まさにカリキュラム・マネジメントの力が必要になってくる。総合的な学習の時間に取り組む教師は、自らの足で教材を開発し、自らの手と頭で指導計画を作成し、授業を生み出していくのである。これからの時代に求められる教師の姿が、そこにはある。また、総合的な学習の時間によって、教師は社会に関わっていくようになる。地域の人や企業の人との関わりを深めていく教師が増えている。地域の町内会や生徒会を通して知り合った人、趣味のサークルを通じて紹介してもらった講師、ボランティアを通してつくった仲間等々、それらの教師の幅広いネットワークが活動のよきヒントやアドバイスを得ることにつながっていく。生徒と共に教師も地域から学ぶ姿勢が身に付いていくのである。

さらに、校内では複数の教師がチームを組んで指導に当たる姿も多く見られるようになった。活動が多岐に渡る場合もあり、各活動に対応し適切な支援をしていくために、学年や全校での指導体制を整えたり、ティーム・ティーチングでの指導を行ったりするようになり、共に創造する教育風土が学校内に溢れるようになっていく。



地域に広がる

以下は、総合的な学習の時間のゲストティーチャーの言葉である。

「自分たちが中学生だった頃には、地域貢献の意識なんてなかったと思います。地域をフィールドにした探究活動で、生徒は地域に関心を持ち、地域にできることを考えています。私たち住民も一緒に楽しく学ぶこと

ができました。今では、生徒たちの発表を聞くのが楽しみになっています。」

「生徒たちが『わたしたちにできることはないですか？』と訪ねて来てくれたときはびっくりしました。最初はこちらもみんな生徒たちに遠慮していましたが、『この子たちは本気で言っているんだ』と分かって本当にうれしかったです。道の駅の特産品コーナーは生徒さんの手作りなんです。これはもう、地域の自慢です。」



本気になったときの中学生は、想像を超える力を発揮する。困難に出会っても簡単にやめようとはせず、何とか実現に向けて立ち向かう。総合的な学習の時間の学習活動によって、そんな生徒の姿を地域で共有することができる。生徒が地域のことを真剣に考え地域の活動に参画したり貢献したりすることが増えてきた。

平成10年に創設された総合的な学習の時間は、学校を地域や社会に開いた。そこでは、これまでにない豊かな学習活動が行われてきた。生徒の学びは学校を超え、地域全体に広がりを見せている。また、生徒の学びを支えようと、多くの大人が力を合わせる姿もたくさん見られるようになってきた。

「中学生は地域の担い手」と話す人がいる。生徒たちの姿はいきいきとし、その声は明るくはつらつとしている。そんな姿や声が溢れる地域には活気がある。総合的な学習の時間は、生徒を育て、教師を変える。そして、その姿が地域へと大きく広がっていくことが期待できる。

「主体的・対話的で深い学び」を実現する総合的な学習の時間

本書は学習指導要領改訂の趣旨を踏まえ、これからの総合的な学習の時間において求められる資質・能力の育成に向け、前書である平成22年版『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』の内容を「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善、「主体的・対話的で深い学び」の実現のためのカリキュラム・マネジメントの充実、という二つの柱で再構成したものである。

今回の学習指導要領の改訂では、「生きる力」の育成という教育の目標が各学校の特色を生かした教育課程の編成により具体化され、教育課程に基づく個々の教育活動が、生徒一人一人に、社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を發揮し多様な他者と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、未来の創り手となるために必要な力を育むことに効果的につながっていくようにすることを目指している。

生徒が、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める必要がある。そのための授業改善の視点として示されたのが「主体的・対話的で深い学び」である。

総合的な学習の時間の本質は「探究的な学習の過程」にあり、今回の学習指導要領の改訂においても、探究的な学習の過程を一層重視することが求められている。これまでも、探究的な学習の過程の中で、実社会や実生活と関わりのある学びに主体的に取り組んだり、異なる多様な他者との対話を通じて考えを広げたり深めたりする学びを実現することが大切にされてきた。したがって、総合的な学習の時間において「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を重視することは、探究的な学習の過程をより一層質的に高めていくことにほかならない。そこで、本書第1編「総合的な学習の時間において求められる授業改善」では、探究的な学習の過程に即した授業改善の事例を紹介している。

また、「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、カリキュラム・マネジメントの充実に努めることも重要である。なぜなら、学校全体として、生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育内容や時間の配分、必要な人的・物的体制の確保、教育課程の実施状況に基づく改善などを通して、教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図る必要があるからである。そこで、第2編「総合的な学習の時間とカリキュラム・マネジメント」では、総合的な学習の時間におけるカリキュラム・マネジメントの充実のためのポイントを解説している。

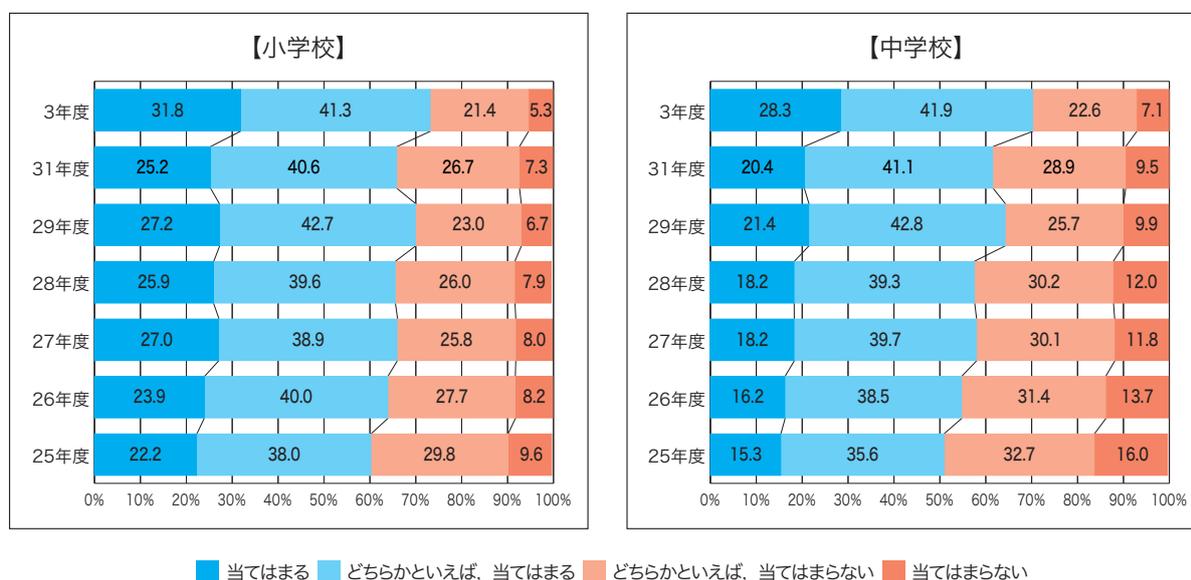
第
1
編

総合的な学習の時間において
求められる授業改善

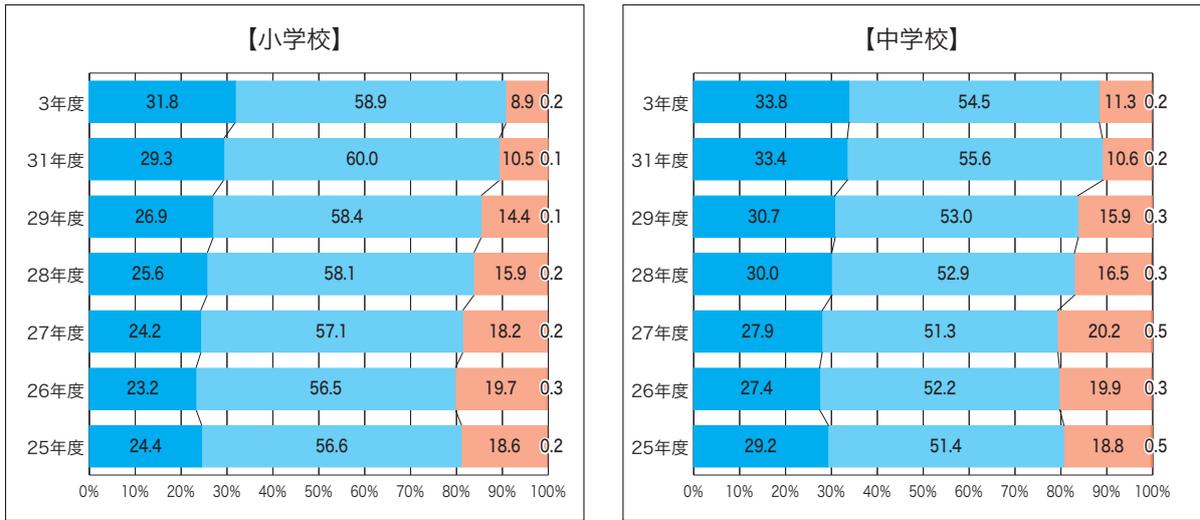
第1章

総合的な学習の時間の成果と 探究的な学習の過程の充実

令和3年度に実施された全国学力・学習状況調査では、「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」という質問に対して、「当てはまる」、「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的な回答をした児童生徒は、小学校、中学校ともに7割を超えている。同じ質問に対する回答について経年で見ても、小学校、中学校ともに肯定的に回答する児童生徒が増えていることがわかる。

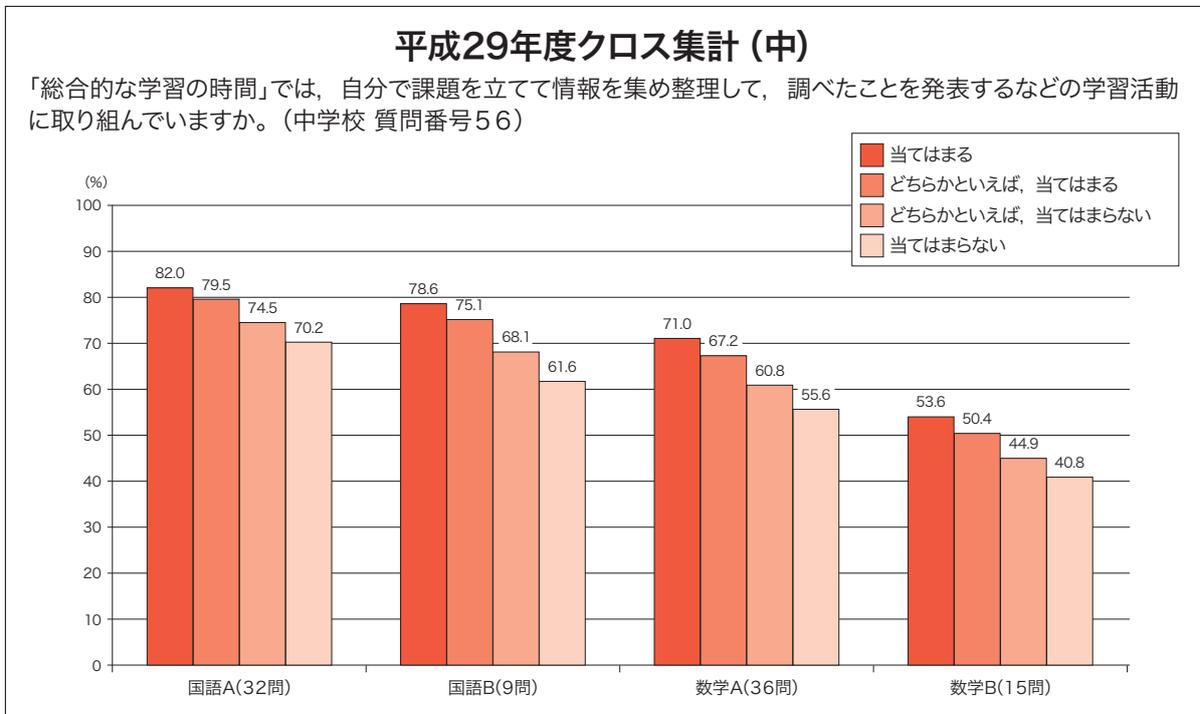


同調査の学校質問紙では、「調査対象学年の児童生徒に対して、総合的な学習の時間において、課題の設定からまとめ・表現に至る探究の過程を意識した指導をしていますか」という質問に対して、「よくしている」、「どちらかといえば、している」と肯定的な回答をしている割合は、小学校、中学校ともに9割近くに達している。こちらも、同じ質問に対する回答について経年で見ると、小学校、中学校ともに肯定的に回答する割合が増えている。

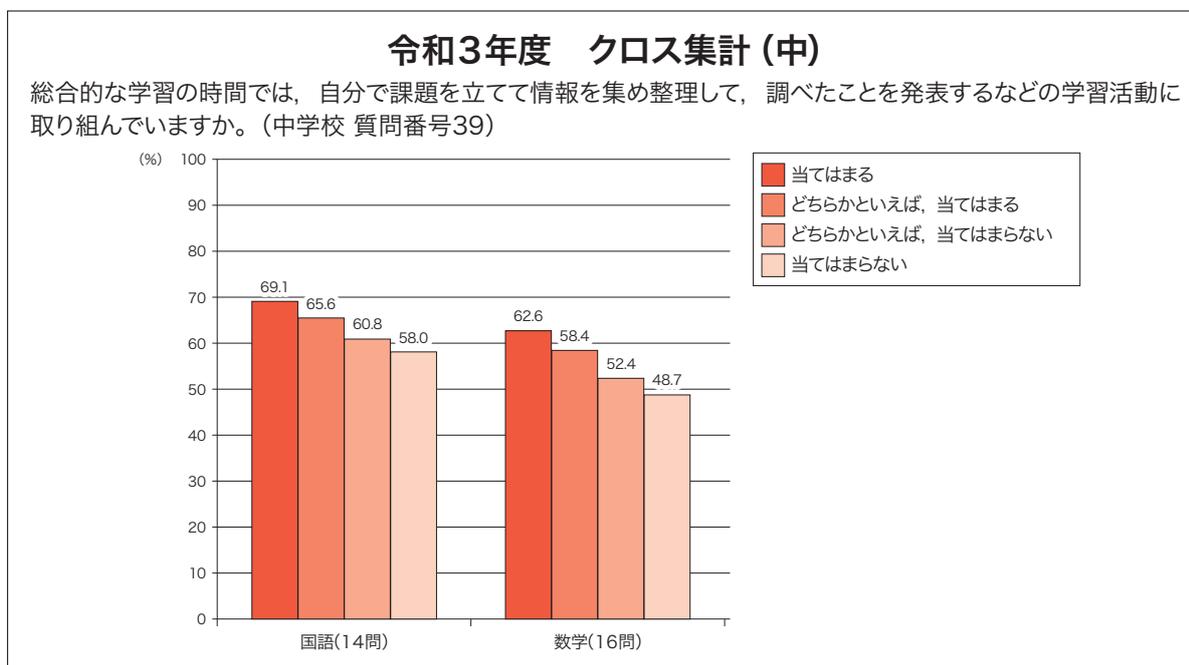


よく行った どちらかといえば、行った あまり行わなかった 全く行わなかった

また、「はじめに」で述べた生徒・教師・地域の変容に見られるように、これまでの総合的な学習の時間で大きな成果を上げている学校は少なくない。例えば、平成29年度に実施された全国学力・学習状況調査の結果を分析すると、総合的な学習の時間では自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいると回答した生徒については、いずれの教科も平均正答率が高い。その傾向は、とりわけ当時のB問題（活用）において顕著であった。



令和3年度に実施された全国学力・学習状況調査の結果からも、同様の傾向を見て取ることができる。



さらに平成28年の中央教育審議会答申にもあるように、総合的な学習の時間の役割はOECDが実施する生徒の学習到達度調査（PISA）における好成績につながったことのみならず、学習の姿勢の改善に大きく貢献するものとしてOECDをはじめ国際的に高く評価されている。

その上で、回答申では、総合的な学習の時間について以下の課題が指摘されている。

- ・総合的な学習の時間を通してどのような資質・能力を育成するのかということや、総合的な学習の時間と各教科等との関連を明らかにするという点については学校により差がある。これまで以上に総合的な学習の時間と各教科等の相互の関わりを意識しながら、学校全体で育てたい資質・能力に対応したカリキュラム・マネジメントが行われるようにすることが求められている。
- ・探究のプロセスの中でも「整理・分析」、「まとめ・表現」に対する取組が十分ではないという課題がある。探究のプロセスを通じた一人一人の資質・能力の向上をより一層意識することが求められる。

これらの課題を踏まえ、今回の学習指導要領の改訂の基本的な考え方として、総合的な学習の時間においては、探究的な学習の過程を一層重視し、各教科等で育成する資質・能力を相互に関連付け、実社会・実生活において活用できるものとするとともに、各教科等を越えた学習の基盤となる資質・能力を育成することが示された。

第1編では、この改訂の基本的な考え方を踏まえ、探究的な学習の過程に即した授業改善の具体的な視点について解説する。

第2章

充実した総合的な学習の時間を実現するための学習指導

第1節 学習指導の基本的な考え方

今回の改訂においては、「横断的・総合的な学習」を、「探究的な見方・考え方」を働かせて行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための「資質・能力」を育成することを目指している。この「探究的な見方・考え方」とは、各教科等における見方・考え方を総合的に活用するとともに、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究し、自己の生き方を問い続けることであると言える。この探究的な見方・考え方は、各教科等の見方・考え方を活用することに加えて、「俯瞰して対象を捉え、探究しながら自己の生き方を問い続ける」という、総合的な学習の時間に特有の物事を捉える視点や考え方である。つまり、探究的な見方・考え方を働かせるということは、これまでの総合的な学習の時間において大切にしてきた「探究的な学習」の一層の充実が求められていると考えることができる。

本節においては、今回の改訂の趣旨を実現するための具体的な学習指導のポイントを、次の二つに分けて示していく。一つは、「学習過程を探究的にすること」とし、探究的な学習の過程のイメージを明らかにしていく。もう一つは、「他者と協働して主体的に取り組む学習活動にすること」とし、「探究的な学習」の更なる充実に向けた方向性を明らかにしていく。

1. 学習過程を探究的にすること

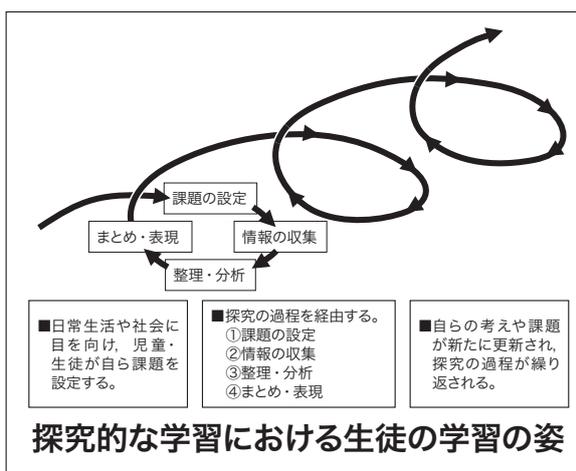
探究的な学習とするためには、学習過程が以下のようなことが重要である。

- ①【課題の設定】体験活動などを通して、課題を設定し課題意識をもつ
- ②【情報の収集】必要な情報を取り出したり収集したりする
- ③【整理・分析】収集した情報を、整理したり分析したりして思考する
- ④【まとめ・表現】気づきや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する

なお、ここでいう情報とは、判断や意思決定、行動を左右する全ての事柄を指し、広く捉えている。言語や数字など記号化されたもの、映像や写真など視覚化されたものによって情報を得ることもできるし、具体物との関わりや体験活動など、事象と直接関わることによって情報を得ることもできる。

もちろん、こうした探究の過程は、いつも①～④が順序よく繰り返されるわけではなく、順番が前後することもあるし、一つの活動の中に複数のプロセスが一体化して同時に行われる場合もある。およその流れのイメージであるが、このイメージを教師がもつことによって、探究的な学習を具現する

ために必要な教師の指導性を発揮することにつながる。また、この探究の過程は何度も繰り返され、高まっていく。



2. 他者と協働して主体的に取り組む学習活動にすること

総合的な学習の時間においては、目標にも明示されているように、特に、異なる多様な他者と協働して主体的に課題を解決しようとする学習活動を重視する必要がある。それは、多様な考え方もつ他者と適切に関わり合ったり、社会に積極的に参画したり貢献したりする資質・能力の育成につながるからである。また、協働的に学ぶことにより、探究的な学習として、生徒の学習の質を高めることにつながるからである。そしてその前提として、何のために学ぶのか、どのように学ぶのかということを生徒自身が考え、主体的に学ぶ学習が基盤にあることが重要である。

協働的に学ぶことの意義の一つ目は、多様な情報に触れることである。同じ課題を追究する学習活動を行っていても、収集する情報は協働的な学習の方が多様であり、その量も多い。情報の多様さと多さは、その後の整理や分析を質的に高めるために欠くことのできない重要な要件である。二つ目は、異なる視点から検討ができることである。整理したり分析したりする際には、異なる視点や異なる考え方があることの方が、深まりが出てくる。一面的な考え方や同じ思考の傾向の中では、情報の整理や分析も画一的になりやすい。三つ目は、地域の人と交流したり友達と一緒に学習したりすることが、相手意識を生み出したり、学習活動のパートナーとしての仲間意識を生み出したりすることである。共に学ぶことが個人の学習の質を高め、同時に集団の学習の質も高めていく。

このように協働的に取り組む学習活動を行うことが、生徒の学習の質を高め、探究的な学習を実現することにもつながる。具体的には、以下のような場面での生徒の姿が想定できる。

(1) 多様な情報を活用して協働的に学ぶ

体験活動では、それぞれの生徒が様々な体験を行い多様な情報を手に入れる。それらを出し合い、情報交換しながら学級全体で考えたり話し合ったりして、課題が明確になっていく場面が考えられる。

例えば、町のバリアフリーについて調査した後に、発見したことを出し合い、それをホワイトボードに整理し、「みんなが見付けた発見の中で、共通点や相違点はないだろうか」などと発問する。このことで生徒は、町のバリアフリー調査で発見してきた情報を改めて見つめ直し、発見したことの共通点や相違点に気付いたり、発見したことの関連性を見付けたりする。「ここがもっと知りたくなっ

た、詳しく調べてみたいということはないだろうか」と更に問いかけることで、「また調査に出かけて詳しく調べてみたい」「今度は別の場所を調べてみたい」「様々なところでユニバーサルデザインの視点で、誰もが心地よく暮らすための工夫がされていることが分かったので、関わった方々からお話を伺いたい」などと新たに目的や課題を明確にしていくことができる。



学級という集団での協働的な学習を有効に機能させ、多様な情報を適切に活用することで、探究的な学習の質を高めることが可能となる。

(2) 異なる視点から考え協働的に学ぶ

物事の決断や判断を迫られるような話し合いや意見交換を行うことは、収集した情報を比較したり、分類したり、関連付けたりして考えることにつながる。そのような場面では、異なる視点からの意見交換が行われることで、互いの考えは深まる。

例えば、安全な食品をテーマにして、食品添加物について話し合う場面が考えられる。食品添加物の使用は、生産者にとって、食品の保存期間を延ばすとともに、食品を適切に加工する役目を果たす。一方で、食品添加物が入っていない自然食品を好んで選択する消費者もいる。実際に身の回りの食品について調査したり、添加物の含有量について実験したりして話し合いを行うと、生産者や消費者といった異なる視点からの意見が出され、互いの考えを深めることにつながっていく。このことにより、食品添加物の使用がどのような理由で行われているのか、そのことが生産や食糧事情と深く関わっていることなど、生徒の幅広い理解と思考の深まりを生む。

このように異なる視点を出し合い、検討していくことで、事象に対する認識が深まり、学習活動を更に探究的な学習へと高めていくことが考えられる。そのために、それぞれ異なる個性、興味・関心をもつ生徒同士で学ぶことには大きな意義がある。家業が農業であったり親戚に食品加工業従事者がいたりする生徒、食の安全性に関心がある生徒、食について深く考えたことはないがスポーツを通して健康に関心のある生徒、外国での生活経験がある生徒など、異なる興味・関心や経験がある生徒同士が学ぶことにより異なる視点からの考えを出し合いやすくなることが考えられる。またそうした学習を通して、互いのよさや可能性を尊重し合う態度の育成にもつながっていく。

(3) 力を合わせたり交流したりして協働的に学ぶ

一人でできないことも集団で実現できることは多い。生徒同士で解決できないことも地域の人や専門家などと





の交流を通じて学んだことを手掛かりにして解決しようとする。また、地域の人や専門家などとの交流は、生徒の社会参画の意識を喚起する。

例えば、自分たちの生活する地域のよさを学び、その地域のよさを特産品として開発する学習活動が考えられる。生徒は特産品を開発し、地域の人や専門家に提案しようとする。その際、学級の友達と力を合わせたり分担したりして特産品を作り、一人ではできな

かったことも、仲間がいることで成し遂げられることを実感する。また、そこでは、開発した特産品のよさや特徴を分かりやすく地域の方などに伝えようとして、真剣に活動に取り組む。

こうした探究的な学習に協働的に取り組むことを通して、生徒は協働的な学習のよさや意義を学ぶことができる。協働的に学ぶことは総合的な学習の時間だけでなく、学校教育全体で進めていくものであるが、あらかじめ一つの決まった答えのない探究的な学習だからこそ協働的な学習のよさが見えやすいという面がある。

(4) 主体的かつ協働的に学ぶ

協働的に取り組む学習活動においては、「なぜその課題を追究してきたのか（目的）」、「これを追究して何を明らかにしようとしているのか（内容）」、「どのような方法で追究すべきなのか（方法）」などの点が生徒の中で繰り返し問われることになる。このことは、生徒が自らの学習活動を振り返り、その価値を確認することにもつながる。協働して学習活動に取り組むことが、生徒の探究的な学習を持続させ発展させるとともに、一人一人の生徒の考えを深め、自らの学習に対する自信と自らの考えに対する確信をもたせることにもつながる。学級集団や学年集団を生かすことで、個の学習と集団の学習が互いに響き合うことに十分配慮し、質の高い学習を成立させることが求められる。

生徒が社会に出たときに直面する様々な問題のほとんどは、一人の力だけでは解決できないもの、協働することでよりよく解決できるものである。しかし、問題を自分のこととして受け止め、よりよく解決するために自分が取り組もうとする主体性がなければ、協働は成り立たない。

総合的な学習の時間は、協働的な学習を基盤とする。しかし、その目指すところは、目標に明示されたように一人一人がよりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育むことにある。指導計画の作成の段階、学習活動を行う段階、学習評価を行う段階のいずれにおいても、このことを意識しておきたい。

協働的に学ぶということはそれぞれの個性を生かすということでもある。学級の中では、全ての生徒が社交的、開放的であるとは考えられないし、内省を好む生徒もいれば、他者との関わりに困難さを感じる生徒もいて当然である。全ての生徒を同じ方向に導くということではなく、それぞれの生徒なりに主体的に学ぶこと、協働的に学ぶことのよさを実感できるように工夫することが必要である。

そのためにも、主体性と協働性の両方をバランスよく意識したい。第1の目標の中に探究的な学習に主体的・協働的に取り組むことが明示されたこと、各学校が育成を目指す資質・能力を設定するに当たり「学びに向かう力、人間性等については、自分自身に関すること及び他者や社会との関わりに関することの両方の視点を踏まえること」とされた趣旨は、こうした主体的であることと協働的であることの両



方が重要であるとしたことによるものである。なお、従来「協同的」としてきたものを今回の改訂で「協働的」と改めた趣旨は、意図するところは同じであるが、ここまで述べたような、異なる個性をもつ者同士で問題の解決に向かうことの意義を強調するためのものである。

第2節 探究的な学習の指導のポイント

1. 課題の設定

総合的な学習の時間にあっては、生徒が実社会や実生活に向き合う中で、自ら課題意識をもち、その意識が連続発展することが欠かせない。しかし、生徒が自ら課題をもつことが大切だからといって、教師は何もしないでじっと待つのではなく、教師が意図的な働きかけをすることが重要である。例えば、人、社会、自然に直接関わる体験活動においても、学習対象との関わり方や出合わせ方などを、教師が工夫する必要がある。

課題の設定においては、次の点に配慮することが大切である。

- 人、社会、自然に直接関わる体験活動を重視し、学習対象との関わり方や出合わせ方などを工夫すること
- 事前に生徒の発達や興味・関心を適切に把握すること
- これまでの生徒の考えとの「ずれ」や「隔たり」、対象への「憧れ」や「可能性」を感じさせるように工夫すること

事例① 体験活動から課題を設定する

「上流と下流の水質調査」、「A町とB町のフィールドワーク」など、比べて考えるような体験活動を位置付けたり、体験活動後に感じたことを明らかにしたりすることで、「どうしてこのようになっているのか」、「どうして違うのか」などの問題に気づき、課題へと高めていくことが期待できます。

実践例 ○○川の水質調査活動



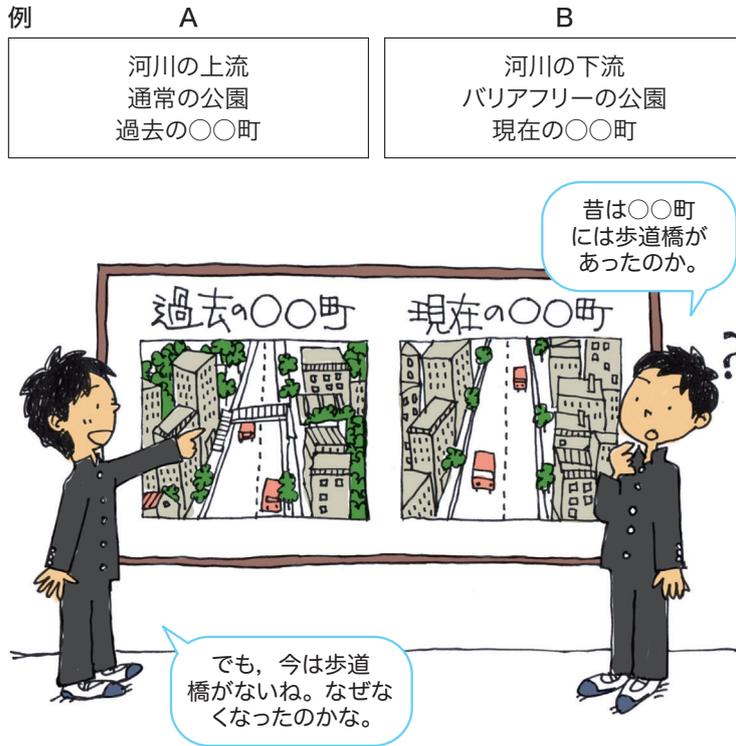
【ポイント】

- 事前の予想との比較
 - ・体験活動前に予想を書いておくことで、実際との「ずれ」に気づきやすくする。体験活動の際の視点にもなる。
- ノートやカードの活用
 - ・気づきや発見、疑問に思ったことをその場ですぐに記録できるノートやカードを用意する。
- ICTの活用
 - ・必要に応じてデジタルカメラやICT端末などを用いて、実際の様子を記録する。
- 教科等との関連
 - ・例えば、社会科における国土と産業に関する学習、理科における生物と環境に関する学習など。

事例② 資料を比較して課題を設定する

資料を提示するときにも、二つの資料を提示し比較することで生徒から疑問が生まれやすくなります。生徒は資料の違いからその原因を類推するなどして課題を明らかにしていきます。

実践例 対比する二つの写真資料の提示



【ポイント】

●対比する資料の準備

・対比する資料は、視覚的に捉えやすい写真や映像資料等を活用する。資料は、書籍や新聞、インターネットなどから選ぶほかに、実際の地域の様子の地図や写真などを提示することが考えられる。

●提示の工夫

・ICT端末を活用することで、資料を細部にわたって確認したり、他者と課題を共有したりすることができる。

●教科等との関連

・例えば、社会科における少子高齢社会に関する学習など。

事例③ シミュレーションを通して課題を設定する

実際の場面を想定したり、シミュレーションを行ったりすることで、起こり得る問題状況を明らかにし、課題を設定していきます。

実践例 地域をPRする活動に向けたシミュレーションからの課題の設定



【ポイント】

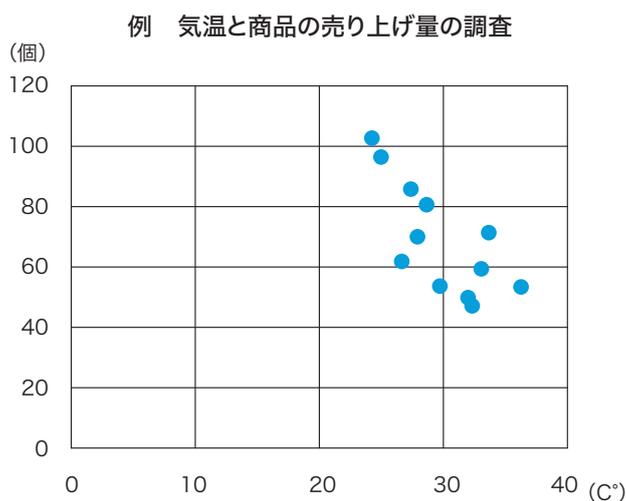
●実際に近い形でのシミュレーションの実施

- ・起こり得る状況を現実に即して幅広く想定する。
- ・グループ同士で体験し合い、意見を交流する。
- ・想定した状況の中から問題点を抽出する。
- ・ICT端末を活用し、役割分担や動線を録画したもから課題を見い出すことも考えられる。

事例④ グラフを読み解いて課題を設定する

グラフなどの統計資料の量の多寡や推移、構成比などに着目することで、生徒は調査対象の今後を予想したり、問題点を見いだしたりすることができます。統計資料を根拠に問題状況を明らかにし、課題を設定していきます。

実践例 提示したグラフからの課題の設定



気温と商品の売り上げ個数の関係を表した図

- 「気温が低いときは売り上げ量が多い。」
- 「気温が高いときは売り上げ量が少ない。」
- 「気温と売り上げ量の関連がありそうだ。」

【ポイント】

- 統計資料の準備
 - ・予想と実際のデータとの間に「ずれ」や「隔たり」が生じるような統計資料を工夫する。
- ワークシートの準備
 - ・グラフから分かることや疑問点、今後の対策について、自分の考えを書く。
- 教科等との関連
 - ・例えば、数学科におけるデータの活用に関する学習など。

課題：気温が変わると売り上げが変わる原因は何だろう。

事例⑤ ブレインストーミングで課題を設定する

テーマについて自由にアイデアを出し合いながら、新しい気付きを得ることができます。自由な意見交換を通して柔軟に発想を広げ、課題を設定していきます。

実践例 自分の住んでいる〇〇市についてのブレインストーミングを通じた課題の設定

- 「〇〇市は外国人留学生の数が多らしいよ。」
- 「〇〇大学ができたからかな。」
- 「でも、昔から外国人住民の数は多かったみたい。」
- 「外国とのつながりが深いのかな。」
- 「何かそれがわかる資料やデータはないかな。」
- 「〇〇市に詳しい関係者に聞いたら分かると思うよ。」
- 「自分が住んでいる所なのに知らないことが多いね。」

課題：自分が住んでいる〇〇市が外国との関わりが深い理由を調べよう。

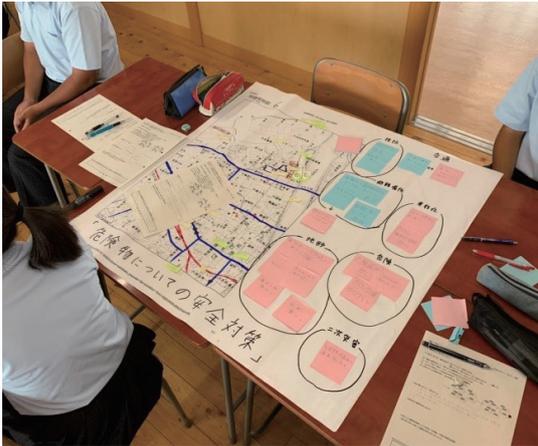
【ポイント】

- ブレインストーミングのルール
 - ・以下のルールを確認し、ディスカッションとの違いを明確にする。
 - ①批判禁止：他のメンバーのアイデアは批判しない。
 - ②自由奔放：アイデアは自由奔放であればあるほどよい。
 - ③質より量：アイデアの質を求めるのではなく、量を求める。
 - ④結合改善：アイデアの付け足しや発展を積極的に行う。

事例⑥ KJ法的な手法で課題を設定する

付せん（カード）を活用したKJ法的な手法を用いて、体験活動などを通して生まれた気付きや疑問を類型化することで、課題を設定していきます。

実践例 付せん（カード）を基にした話し合いからの課題の設定



【ポイント】

- 付せん（カード）の使い方の工夫
 - ・一枚に対して一つの気付きや疑問を書くようにする。
 - ・付せん（カード）の向きをそろえ、仲間分けをしやすくする。
- 少数意見の取扱い
 - ・どのグループにも属さなかった意見も、一つの意見として尊重する。
- 教科等との関連
 - ・例えば、国語科における話すこと・聞くことに関する学習など。

- 1 体験活動後に感じたこと、疑問に感じたことを付せん（カード）に書く。
- 2 性質などが共通する付せん（カード）をグループとしてまとめていく。
- 3 付せん（カード）のまとめごとにタイトルやキーワードを付ける。
- 4 タイトルやキーワードを基に話し合い、取り組むべき課題を設定する。

事例⑦ 対象への憧れから課題を設定する。

地域や社会のために仕事をしている人との出会いは、「自分もより深く関わりたい」、「その人に近づきたい」という対象への憧れを抱かせます。対象のよさや価値、現在の状況等を実感することを通して、課題を設定していきます。

実践例 地域を支える産業を対象とした課題の設定

- 1 地域を支える産業について知る。
- 2 実際に仕事を体験したり参加したりする。
- 3 携わる人の思いや願い、現状などを聞く。
- 4 よさや価値、現在の状況等から課題を見いだす。



「実際に仕事してみると、とても大変だったね。」
 「でも、感謝の言葉がとても嬉しかったです。」
 「〇〇さんは地域のためなら頑張れると言っていたよ。」
 「仕事に対しては色々な考え方があるね。私たちは大人になったとき、何のために働くべきかを考えよう。」

【ポイント】

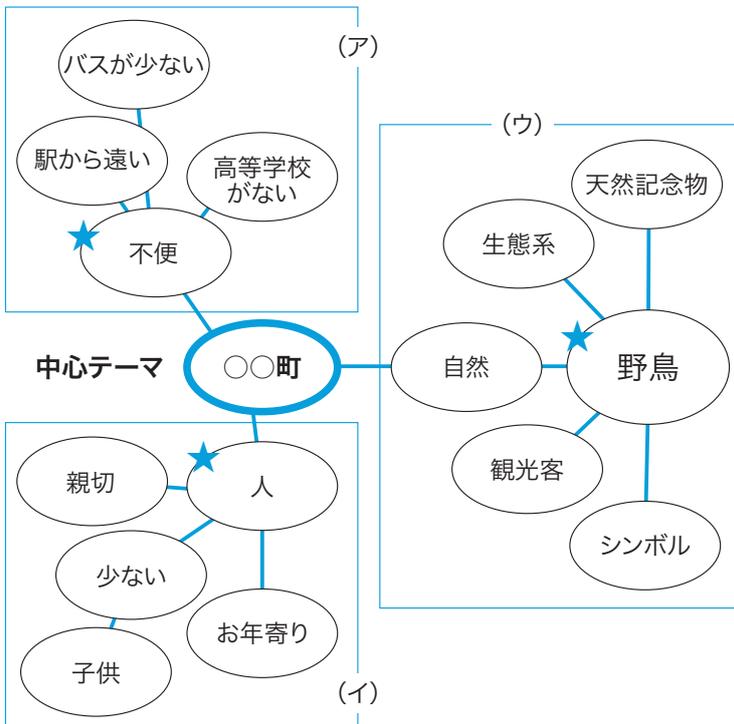
- 対象の吟味
 - ・対象を選定する際は、探究的な学習となり得る対象かどうか吟味する。
- キャリア教育・自己の生き方との関連
 - ・対象や社会との関わりの中で、自分らしい役割の果たし方や生き方を考える機会となるよう留意する。

事例⑧ ウェビングでイメージを広げて課題を設定する。

ウェビングを活用しイメージを広げることで、テーマを多面的に捉えたり、細分化して具体的に捉えたりしながら課題を設定していきます。

実践例 中心テーマからイメージを広げた課題の設定

- 1 中心テーマを決める。
- 2 ウェビングで自分の中のイメージを広げる。
- 3 完成したウェビング図を分析する。(例)・関連するキーワードを線でつなぐ
・同じ内容を線で囲む
・最も重要だと思うところに印を付ける など
- 4 友達の図と比較しながら課題を明らかにしていく。



【ポイント】

- イメージが広がる中心テーマの設定
 - ・学年テーマ
 - ・地域の特徴
 - ・きっかけとなる体験など
- ウェビング図の共有と分析
 - ・ウェビング図を基に話し合い、明らかになった包括的な問題から課題を設定する。
 - ・他者の考えと比較する中で問題が共有化され、課題意識が高まる。

- (ア) 「この町は不便だよ。」
 「どうして公共交通機関が少ないんだろう。」
 「もっとバスの本数が増えたら、もっと便利になって住みやすくなるんじゃないかな。」
- (イ) 「町の人親切だよ。」
 「みんな知り合いみたいで、学校にもよく来てくれるよね。」
 「でも、子供や若い人は少ないよね。」
 「このままだと、町は活性化しないよね。」
- (ウ) 「この町には自然がいっぱいあるよね。」
 「野鳥を見るために、バードウォッチングに来る人がたくさんいるよ。」
 「天然記念物に指定されている鳥もいるみたい。」
 「この町を訪れた人に、もっと町の魅力を知ってもらいたいよね。」
 「そのためには、もっと私たちがこの町の魅力を知る必要があるね。」

課題： どうやったらバスの本数を増やすことができるかな。

課題： どうやったら若者を町に呼ぶことができるかな。

課題： どうしたら町の魅力を多くの人に伝えることができるかな。

事例⑨ 問題を序列化して課題を設定する。

体験を通して明らかになった問題を序列化して整理することで、問題を焦点化し、課題を設定していきます。

実践例 序列化を取り入れた課題の設定

- 1 カードやフリップに問題(課題の候補)を取り出す。
- 2 序列化するための視点を決める。
- 3 視点に沿って序列化する。

「〇〇海岸をPRするためには何をしたらよいだらう。」
 「利用者の視点で優先順位を考えよう。」
 「ゴミが多くあるのは問題だと思う。」
 「PRするにも、ゴミが多かったら難しいね。」
 「利用者のために掃除をする取組は、私たちですぐにできると思う。」

課題：〇〇海岸を有名にするために掃除の内容を見直そう。

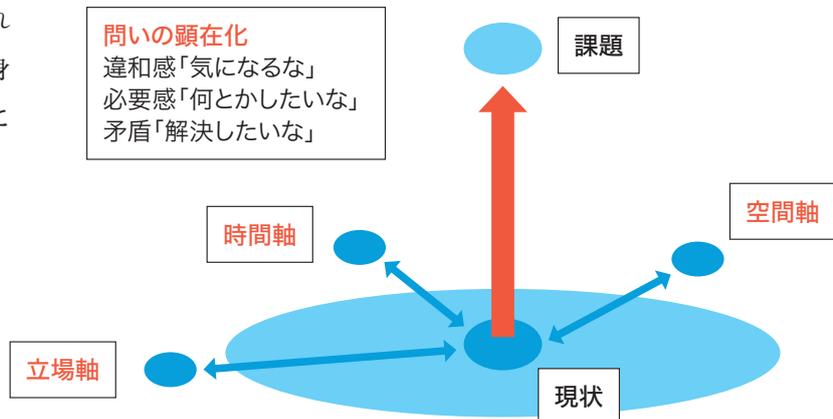
【ポイント】

- 課題の候補の選定
 - ・カードやフリップからキーワード化して課題の候補を取り出す。
- 序列化するための視点の例
 - ・実現可能かどうか。
 - ・社会的な価値があるか。
 - ・目標との整合性はとれているか。
 など
- 話合いの可視化
 - ・序列化する際には、考えが可視化できるようにカードや板書などを工夫する。

コラム 課題の設定の視点

課題は現在の状況を他と比較することで設定することができる。例えば、現状を時間軸で分析すると、過去はどうだったのか、未来はどうあるべきなのかといった思考が促され、問いが生じる。また、現状を空間軸で分析すると、他の地域や国ではどうなのか、といった思考が促され、さらに、問いが生じる現状を立場軸で分析し、自分以外の専門家の方々や地域の大人、友達の考え等と比較したりすることも考えられる。

教師は、このようにして生じた問いを、子供たちが自覚化できるように顕在化させることが大切である。問いが顕在化されることにより、子供たちは違和感(気になるな)や必要感(何とかしたいな)、矛盾(解決したいな)などを抱くようになる。そこで設定される課題は、子供たちにとって身に迫った、切実感のある課題になる。



2. 情報の収集

設定した課題を基に、生徒は、観察、実験、見学、調査、探索、追体験などを行う。こうした学習活動によって、生徒は課題の解決に必要な情報を収集する。情報を収集する活動は、そのことを生徒が自覚的に行う場合と無自覚に行っている場合とがある。目的を明確にして調査したりインタビューしたりするような活動では、自覚的に情報を収集していることになる。一方、体験活動に没頭したり、体験活動を繰り返したりしている時には、無自覚のうちに情報を収集していることが多い。そうした自覚的な場と無自覚的な場とは常に混在している。このように、情報を収集することにおいても、体験活動は重要である。

情報の収集では、次の点に配慮することが大切である。

- 学習活動によって「数値化した情報」、「言語化した情報」、「感覚的な情報」など、収集できる情報の違いがあることを意識すること
- 課題解決のための情報の収集を自覚的に行うこと
- 収集した情報を適切な方法で蓄積すること
- 各教科等で身に付けた資質・能力を発揮して情報を収集すること

事例① インターネットで情報を収集する

個々の多様な疑問に対して瞬時に情報を検索できます。検索の方法やWEBページの特徴を理解することで、膨大な情報源の中から目的に応じた情報を適切に取り出すことができます。

実践例 インターネットによる情報収集



【ポイント】

- 情報の信憑性の吟味
 - ・WEBページの情報が確かな情報であるかどうかを検討する。
- 情報モラルの育成
 - ・情報社会で適正な活動を行うための基となる考え方と態度を育成する。
- 実感を伴う指導の工夫
 - ・インターネットからの情報だけに偏ることなく、実感を伴う体験活動を取り入れるなどして、多様な情報収集を行う。

事例② 図書館や図書室で情報を収集する

探究的な学習において生じる多様な疑問の解決のために、図書館等を利用した情報収集を行うことは、有効な方法の一つです。目的に合った書籍等の検索方法を身に付けることで、図書館等をよりよく活用することができます。また、司書教諭からのアドバイスなどを聞くことで、より有益な情報が得られます。

実践例 検索した書籍からの情報収集



〈コンピュータ検索〉

図書館にある蔵書検索に「書籍名」、「作者名」、「出版社名」等、見付けたい書籍の情報を入力する。

〈情報源のメモ〉

どこから(出版社名、書籍名)

いつ(新聞：発行日、書籍：刊行された年月)

【ポイント】

●情報源の記録

・情報源は必ず記録しておき、出典を明らかにできるようにしておく。

●図書館ネットワーク等の活用

・図書館ネットワークを活用して、他の図書館との書籍の相互貸借もできる。

・電子書籍貸出サービスを実施している図書館の利用も考えられる。

●蔵書検索システムや学校図書館司書の活用

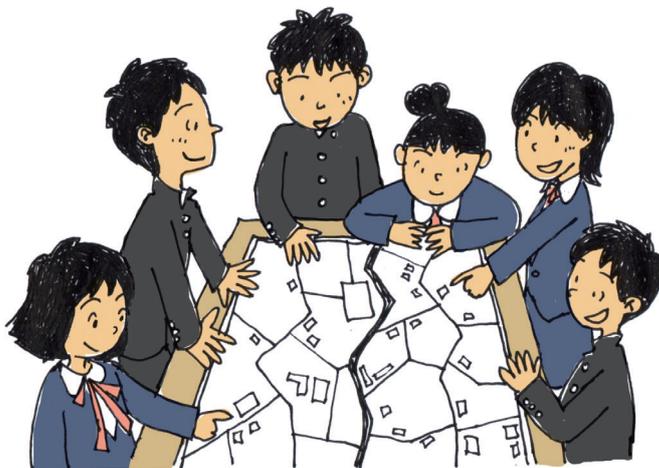
・事前に必要な書籍の情報(書籍名、作者名、出版社名等)を調べておく。

・収集しようとする情報を司書教諭等に伝えて支援してもらう。

事例③ 配布物から情報を収集する

学校や町内会、地区センターなどで配布されているプリント等の配布物は、地域に関する貴重な情報源です。地域に密着した情報を集めることができます。

実践例 ハザードマップから防災に関する情報収集



【ポイント】

●効果的な情報収集

・事実と感想は区別して記録に残しておく。

・どこから出されている配布物なのかを明らかにする。

・同じ内容を扱っている配布物を集め、書かれている内容を比較することで、調べたいことの特徴を明らかにできるようにする。

・付せんやラインマーカーなどを活用し、必要な情報を把握しやすくする。

事例⑥ リモートインタビューから情報を収集する

すぐに話を聞きに行ける距離ではない相手には、リモートインタビューで情報を集めることができます。画面越しに間近で表情を見たり、声を聞いたりしながらインタビューできるだけでなく、相手の理解を取ったうえでインタビューの録音や録画も可能で、デジタル情報として蓄積することもできます。

実践例 リモートインタビューでの情報収集



【ポイント】

○ICT環境の確認

- ・カメラ付きパソコンやタブレット型端末などが整っているかを確認する。
- ・通信環境が整っているかを確認する。
- ・インタビューを行う相手先のICT環境も事前に確認する。

○質問事項等の事前連絡

- ・事前にどのような質問をするか相手に知らせておくことスムーズに取り組むことができる。
- ・質問をしていく中で、新たに聞きたいことが出てくる場合もあることを事前に伝えておく。
- ・通信状況がよくない場合や固まった場合などどのように対応するか事前に確認しておく。

事例⑦ フリップボードで情報を収集する

フリップボードを提示してインタビューする方法は、内容が一目で伝わりやすく、質問も同時にできるため、確実な情報収集につながります。また、相手にとっても短時間で回答できるよさがあります。

実践例 フリップボードによる情報収集



【ポイント】

●質問内容の吟味

- ・聞きたいことを端的に表し、答えやすい質問内容を吟味する。

●集計方法の工夫

- ・集計表をフリップボードと一体化して結果を把握しやすくするなどの工夫も考えられる。

●教科等との関連

- ・例えば、国語科における書くこと（目的や意図に応じて、日常生活の中から題材を決め、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすること）の学習など。

事例⑧ 街頭インタビューで不特定多数から情報を収集する

インタビューのポイントをおさえた準備を計画的に行うことで、様々な立場の人から多様な考えを直接得ることができます。

実践例 街頭インタビューによる情報収集



〈インタビューの手順の例〉

- (1) 自己紹介をする。
- (2) インタビューの目的や方法に関して説明し、インタビューへの協力について了承を得る。
- (3) インタビューを始める。
- (4) インタビューを終え、謝意を伝える。

【ポイント】

- **インタビューの対象の検討**
 - ・インタビューする対象や、回答の目標数などを事前に決めておく。
- **インタビュー目的の明確化**
 - ・何を知るためにインタビューするのか自ら説明できるようにしておく。
- **質問内容の吟味**
 - ・事前にインタビューメモを作成し、質問内容を吟味する。
 - ・聞きたいことを端的に表し、答えやすい質問を用意する。
- **インタビューを行う際の留意点**
 - ・相手の表情や話し方なども貴重な情報になるため、必要に応じて写真や動画で記録することも考えられる。その際は相手の許可を得るようにする。
 - ・疑問点はその場で確認する。

事例⑨ イベント・講演会に参加して情報を収集する。

地域の行事やまちの祭りに参加する体験を通して、情報を収集することができます。自分の目で見たり、雰囲気を感じたりすることで、より実感を伴った情報になります。

実践例 地域のイベントから情報収集



〈収集する情報の例〉

- ・会場や参加者の雰囲気
- ・主催者や参加者の感想
- ・企画のテーマや内容
- ・講演の内容 など

【ポイント】

- **イベント等に参加して情報を収集する際の留意点**
 - ・イベントや講演会に参加する際の目的を明らかにしておく。
 - ・イベント等に参加する際、行き方や費用がどのくらいかかるのか事前に確認する。
 - ・参加する際のマナーを確認しておく。
 - ・ICT端末を活用し、映像や音声で記録を残す。
 - ・事例⑧のインタビュー活動と組み合わせると効果的である。

事例⑩ アンケート調査で情報を収集する

アンケート調査は、多くの人の意見を集めて、その傾向を知りたいときに行います。聞いたことを端的にし、答えやすい簡単な質問を用意することで、多くの人からのデータ収集が可能になります。また、質問の仕方や質問する相手によって結果が異なってくるので、アンケートをとる前に計画を立てることも大切です。

実践例 アンケート調査用紙による情報収集

【〇〇市に関するアンケート】

私たちは今、「〇〇市の魅力」についての調査をしています。…アンケートの取扱いには十分注意し、上の目的以外で使用することはありません。ご協力をおねがいします。

① 〇〇市には、観光でお越しですか？
はい ・ いいえ

② 何回目の訪問ですか？
初めて ・ () 回

③ 〇〇市の魅力は何ですか？
自然・温泉・食べ物・文化
その他()

④ ③について、具体的に教えてください。

記述欄

ありがとうございました。
〇〇市立△△中学校2年1組

【ポイント】

- 効果的な調査にするための調査用紙の作成
 - ・調査の目的や対象を明確にする。
 - ・短く、分かりやすい質問文にする。
 - ・質問項目を精選し短時間で回答できるようにする。
 - ・単純な質問から意見を問う質問へ移っていくようにする。
 - ・全体を対象にする場合は、年齢層や居住地等を記入する欄を設けることも考えられる。
 - ・個人情報の取扱いについて明記する。
- アンケート用紙を設置する場合の留意点
 - ・管理や回収に関して、事前に管理者等の了承を得るようにしておく。

事例⑪ WEBアンケート作成ツールを活用して情報を収集する

インターネット上でアンケートを作成・実施できるツールを用いた情報収集です。WEBアンケート作成ツールに予め用意されているテンプレートを使うことで簡単にアンケートを作成することができます。

紙のアンケートでは印刷や配布、回収、集計などが必要ですが、WEBアンケートフォームを活用すると時間と費用を節約することができます。幅広い人から回答を得たい場合に便利な方法でしょう。

実践例 WEBアンケート作成ツールを活用した情報収集

〇〇公園に関するアンケート
締め切り：〇月〇日

1.あなたの年齢を教えてください。
 身体未満
 10代
 20代
 30代
 40代
 50代
 60代
 70代以上
 無回答

2.あなたの性別を教えてください。
 男性
 女性
 無回答

3.あなたがよく行く〇〇中学校区の場所を教えてください。
 とてもよく行く ときどき行く あまり行かない ほとんど行かない

〇〇公園	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
△△公園	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
××ショッピングモール	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
□□センター	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

4.この公園を利用する目的を教えてください。(複数回答可)

散歩
 運動
 休憩
 近隣
 子供の遊び場
 イベント
 その他

【ポイント】

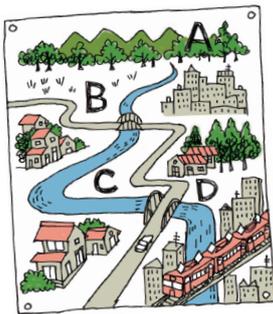
- 目的に応じた回答項目の検討
 - ・目的に照らして、年齢層や居住地等、回答項目の選択肢を十分に検討する。
- 回答期間の設定
 - ・回答期限を具体的に記載していないと回収率が低くなる可能性がある。
- 質問項目・形式の決定
 - ・質問の形式には「ラジオボタン」、「チェックボックス」、「スケール」、「マトリックス」、「テキストボックス」など、様々な種類があり、質問内容に合わせて決定する。
- 多様な端末から回答を収集する工夫
 - ・WEBサイトからのリンクや、二次元コードなどから回答フォームに誘導することで、パソコンやスマートフォンで手軽に回答してもらうことができる。

事例⑫ 観察・実験を通して必要な情報を収集する

観察・実験を通して、客観的なデータを手に入れ、自分の考えを確かにとするとともに、説得力のある提案へと高めていきます。

実践例 パックテストによる調査

地域の河川のCOD（化学的酸素要求量）の値をパックテストで測定することで、汚れの程度を客観的に知ることができる。



地点	COD値 (mg毎リットル)	気付いたこと
A	0.5~1.0	きれいな流れ
B	0.5~1.0	魚がたくさん
C	0.5~1.0	周辺にゴミが…
D※	1.0~5.0	においがきつい

※家庭排水が流れ込む地点

0.5~1.0mg 毎リットルを示した水は問題ない。でも地点Dは1.0~5.0mg 毎リットルを示していて水が汚れていることが分かった。



近くで流れ込む生活排水が原因だと思う。



【ポイント】

- 測定目的の明確化
 - ・何のために測定するのかを明らかにしておく。
- 測定方法の工夫
 - ・自分の手で実際にできる測定方法を考える。
- 分析・考察のための収集
 - ・現象を原因と結果の関係でみるため表などにまとめ、データに基づいて考察する。
- 信憑性の高いデータ収集
 - ・測定は何度も行い、平均値として求めておくようにする。
- 教科等との関連
 - ・例えば、理科における生物と環境に関する学習、数学科のデータの活用学習など。

事例⑬ ファクシミリ (FAX) で情報を収集する

ファクシミリを使用すると、多くの質問項目や図表を添えた質問にも意見をもらうことができます。電子メールでやり取りができない場合にも有効です。

実践例 アンケート用紙を送信しての情報収集

お仕事調査アンケート	
お名前	
質問1 お仕事の内容	FAX送付状
質問2 お仕事を始め	〇〇年〇月〇日
質問3 お仕事の魅力	●●●●様 〇〇中学校〇年生
質問4 お仕事の難しければ教えてください。	件名：お仕事調査アンケートに関するお願い 送信枚数：2枚（本状含む） 本文： 〇〇中学校〇年の〇〇〇〇と申します。 私の学校では、今、総合的な学習の時間で「仕事」について考える学習をしています。 お忙しいところ大変申し訳ありませんが、アンケートへの回答にご協力をお願いいたします。
ご協力ありがとうございます。	
ご回答は以下にご返信	
〇〇中学校 FAX	

【ポイント】

- ファクシミリの特性の理解
 - ・ファクシミリで回答を求める場合は、回答用紙とは別に「送付状」を一緒に送信する。
 - ・必要に応じて図表などを添付し、相手に質問の意図が分かりやすく伝わるようにする。
 - ・手書きの場合は、濃い鉛筆やボールペンで書くようにする。
 - ・事前にファクシミリを送ることを伝えておく。
 - ・送り間違いのないようにファクシミリ番号や相手の名前などを確かめる。

事例⑭ 電子メールで情報を収集する

電子メールを活用した情報収集を行うことで、様々な立場の人から課題解決に必要な情報を集めることができます。電子メールのメリットは、回答がデジタル化されている点や直接会うことが難しい相手から必要な情報を得ることができる点などにあります。

実践例 防災についての情報収集

TO: xxxxx@xxxxx.jp	相手の電子メールアドレスは正確に入力する。
件名: 災害対策についてのご質問	件名は相手が一目見て分かりやすくする。
〇〇会社△△△△様	相手先の方と自分の紹介を書く。
突然のメールで失礼いたします。	
私は、〇〇中学校の□□□□と申します。	質問する目的を明らかにし、相手に伝える。
私の学校では、今、総合的な学習の時間で、災害に強い町づくりについて考える学習をしています。その中で、貴社が災害対策に積極的に取り組んでいることを知りました。ぜひ、以下のことについて教えていただきたいと思い、メールをさせていただきました。	質問は分かりやすく簡潔にする。
1. 災害対策に取り組むようになったきっかけ	
2. 今後はどのような対策に取り組む予定か	
お忙しいところ大変申し訳ありませんが、ご協力をお願いいたします。	
〇〇中学校 □□□□	

【ポイント】

●相手への配慮

- ・件名が内容を端的にまとめているか、冒頭に相手先の方の名前、最後に自分の名前が書いてあるかを確認する。
- ・質問が端的で分かりやすいものになっているか確認する。複雑な文章は避ける。

●コンピュータウイルスへの注意

- ・知らない人からのメールや添付ファイルは不用意に開かないようにする。

●プライバシーの保護

- ・個人情報を載せないようにする。

事例⑮ 手紙で情報を収集する

手紙を活用した情報収集を行うことで、生徒は直接会うことが難しい専門機関や専門的な立場の人から必要な情報を得ることができます。手紙は、時間はかかりますが、電子メールや電話に比べ丁寧な情報収集の手段です。

実践例 国際理解の題材で手紙を用いた情報収集

1 相手の名前	<p>〇〇〇〇 様</p> <p>はじめにお手紙さしあげます。</p> <p>私は〇〇中学校3年生の□□□□と申します。今、総合的な学習の時間で、外国人留学生在が日本で生活するに当たっての困り事について調査しています。次のことを教えていただけませんか。</p> <p>1. 日本にきて、一番困ったこと</p> <p>2. 日本と海外の違いで驚いたこと</p> <p>どうぞよろしく願いいたします。</p> <p>〇年〇月〇日</p> <p style="text-align: right;">□□ □□</p>
2 あいさつ	
3 自己紹介	
4 手紙を書いた理由	
○どのようなテーマで学習しているのか	
○現時点での自分たちの考えや分かっていること	
など	
5 質問	
6 日付	
7 自分の名前	

【ポイント】

●手紙を送る際の留意点

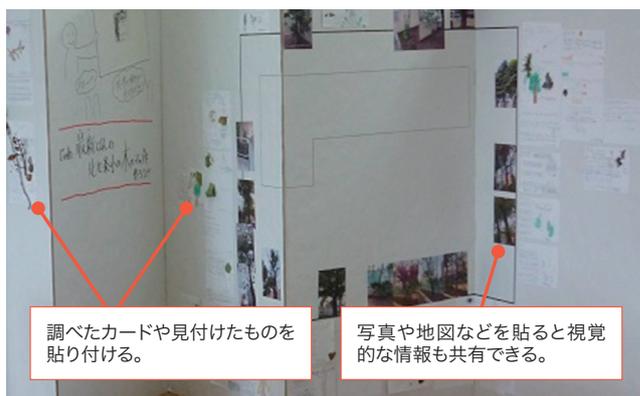
- ・字は読み手を意識し、丁寧に読みやすく書く。
- ・返事をお願いする場合は自分の宛先を書いた返信用封筒やはがきを同封する。
- ・相手に対して失礼のないように文章表現には十分配慮する。
- ・質問は分かりやすく箇条書きにし、具体的に書く。
- ・所在確認が可能であれば、事前に教師が電話等で確認して打合せのうえで送付するとよい。

事例⑯ 学級や学年など集団で情報を集積し、共有する

集めた情報を学級や学年単位で集積したものを、教室や廊下に置いておくことで、いつでも情報を見たり、追加したりすることができるようになります。また、他のことについて調べている人の情報についても互いに知ることができます。

実践例 集団での情報集積

《ダンボール板を利用した情報集積》



【ポイント】

●視覚的な分類の工夫

- ・情報の種類ごとに付せんやカードを色分けしておく、傾向などを一目で捉えることに役立つ。
- ・文字情報のほかにも、写真やマップなどを位置付けると、具体的なイメージをもつことができる。

●設置場所や設置方法の工夫

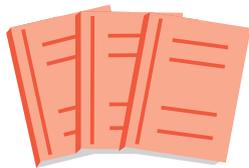
- ・生徒の日常の動線上に配置したり、近くに付せんやカードを置くことで、いつでも情報を追加したり更新したりできるようになる。
- ・ダンボール板をじゃばらのように活用したり、掲示板を並べて置いたりすることも効果的である。

事例⑰ 形式をそろえて情報を収集する

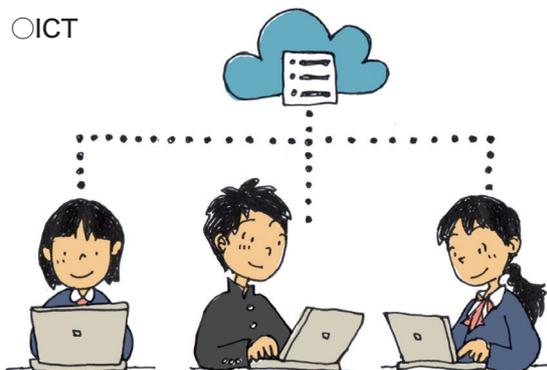
収集した情報は形式をそろえて集積することで、情報の二次活用を効率的に進めることができるようになります。情報収集の際は、その後の学習活動を視野に入れて、収集する情報の種類や量を考えます。また、収集した情報をどのような方法で蓄積しておくかも検討しておく必要があります。

実践例 様々な方法での情報の集積

○ファイル



○ICT



【ポイント】

●ファイルを利用した集積

- ・書く活動を重視し、様々な体験活動の記録を文章として集積していく。
- ・集めた情報は、はじめは時系列に集積する。その後、同じ内容でまとめるなどして、情報の整理・再構成をすることができる。

●ICTを利用した集積

- ・クラウドサーバーを活用し、集積することでパソコンやタブレット端末などの様々なデバイスから容易にデータを共有できるようにする。
- ・プレゼンテーションソフトや表計算ソフト、画像編集ソフトなどを積極的に活用する。
- ・フォルダを作成し、資料を内容ごとに整理し、データを共有できるようにする。

3. 整理・分析

様々な方法で収集した多様な情報を整理したり分析したりして、思考する活動へと高めていく。収集した情報は、それ自体はつながりのない個別なものである。それらを種類ごとに分けるなどして整理したり、細分化して因果関係を導き出したりして分析する。

このような学習活動を通して、生徒は収集した情報を比較したり、分類したり、関連付けたりして情報内の整理を行う。このことこそ、情報を活用した活発な思考の場面であり、こうした学習活動を適切に位置付けることが重要である。

整理・分析においては、次の点に配慮することが大切である。

- ①生徒自身が情報を吟味すること
- ②どのような方法で情報の整理や分析を行うのかを決定すること
- ※「考えるための技法」を用いた思考を可視化する思考ツールの活用や各教科等との関連を図ることを意識する

事例① 時系列で整理・分析する

収集した情報を時系列に整理することで、変化や転換点に気付いたり、到達点や手順を明らかにしたりすることができます。整理をする際、複数の視点で整理することもできます。

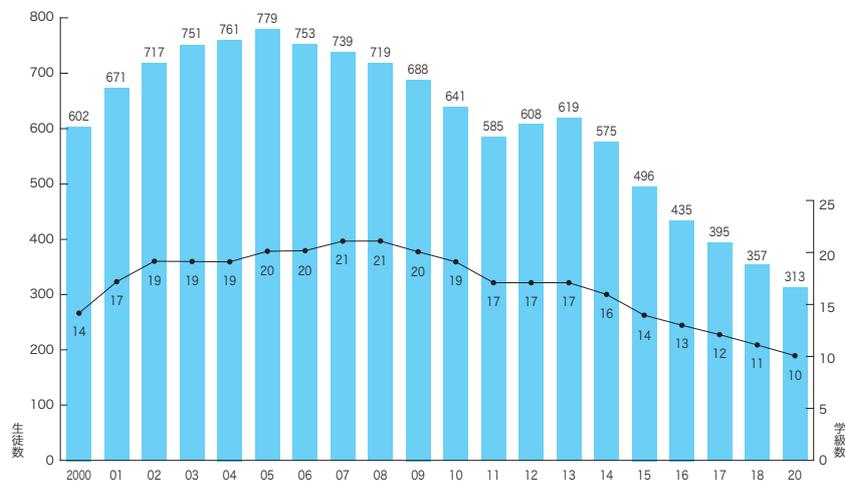
【ポイント】

- ICT機器やインターネットの活用
- ・文字情報に加えて、映像資料等、多様な資料を収集する。

実践例 学区の住宅地開発がもたらした人口の変化

- 1 学区の住宅地化や人々の暮らしについて、古地図や文献、聞き取りなどによって情報を収集する。
- 2 得られた情報をカードに書き出し、時系列に並び替える。
- 3 学区の住宅地開発に伴う自然の変化や人々の暮らしの変化を対応付けながら整理する。

生徒数と学級数の変遷



事例② 地図を用いて整理・分析する

生徒たちがフィールドワーク等で調査・収集した情報を地図を使って整理することができます。地図を使うことで、事実や関係が把握しやすくなり、事実の特徴や傾向、偏り等を捉えることが可能になります。

実践例 ソーラーパネルの設置状況について 地図を使って整理・分析

1 調査エリアを決め、フィールドワークで調査する



2 設置されていた場所を拡大した地図に整理する



3 過去の地図と比較しながら分析する



【ポイント】

● 調査の視点と調査ポイントの検討

・あらかじめ教師が過去のデータなどを事前調査しておくなどし、どのような情報を収集するか、視点を検討しておきたい。目的に応じて、調査ポイントを選定することで、収集される情報の質が高まり、整理・分析を効果的に行うことができる。

● 地図への整理の仕方の工夫

・拡大地図を利用することで、個人やグループで集めた情報を全員で整理することができる。
・ICT端末を利用して撮影した写真を貼り付けることで、場所状況の把握がしやすくなる。

● ICT機器やインターネットの活用

・地図アプリケーションや交流・協働学習支援ツールを使うことで、グループで作成した地図を教師や生徒間で共有したり、公開したりすることができる。

● 教科等との関連

・例えば、社会科（地理的分野）における、身近な地域を調査する学習など。

【地図を用いて整理・分析すると効果的な例】

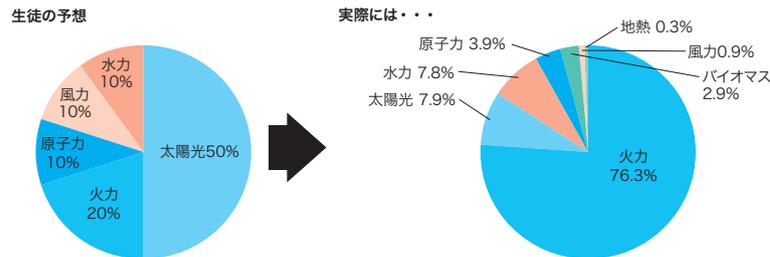
- ・川の水質と指標生物の分布
- ・点字ブロックの設置状況と放置自転車の状況
- ・土地の利用状況と防災上の危険箇所など

事例③ グラフ化して整理・分析する

事象の特徴を客観的に捉えたり、事実や関係を把握したりすることに役立ちます。情報を客観的に整理しておくことで、情報発信をする際には自分の考えや主張の明確な根拠となり効果的に伝えることができます。

実践例 日本の総発電量に対する発電種別の構成比

「発電種別の予想と実際を比較しよう」



「これまで調べてきたことを基に予想のグラフを作りました。」
 →「実際には、火力が70パーセント以上占めていました。」
 →「なぜ、こんなにも火力が多いのかさらに調べてみようと思います。」

【ポイント】

- 効果的なグラフの利用
- ・複数の事象を関連させて考えるために、複数のグラフを一つのグラフにまとめたり、並べて示したりするなど、効果的にグラフを利用できるようにする。

【棒グラフ】量の多寡を比較する
 (例)・〇〇川の各調査地点の指標生物の生息数

【円グラフ・帯グラフ】構成比をみる
 (例)・〇〇市の産業別就業者数の構成比

【折れ線グラフ】変化の傾向をみる
 (例)・過去5年の日本の石油消費量の推移

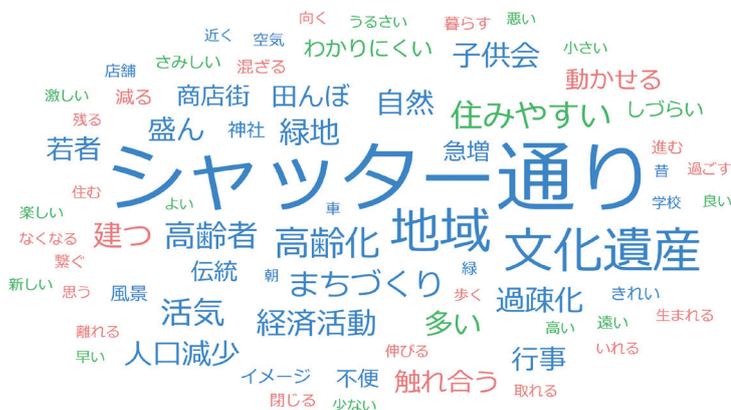
【レーダーチャート】複数の指標をまとめてみる
 (例)・〇〇市の災害対策の分野別の取組状況

事例④ テキストマイニングで整理・分析する

アンケート調査の自由記述やインタビュー調査で得られた大量の情報から全体の傾向やポジティブ・ネガティブなどの要素を見ることができます。

実践例 地域の活性化に向けたアンケート調査の分析

「この地域のイメージ」についてアンケート調査を行い集まった大量の回答データを全てテキスト化し、テキストマイニングツールを活用して整理・分析する。



【ポイント】

- 目的に応じた分析
- ・データ分析を行う際には、年齢層や居住地等で整理しておくことで、世代間等でのイメージの違いについても分析することができる。

「ワードクラウド」による分析

出典：ユーザーローカル社「AIテキストマイニング」
<https://textmining.userlocal.jp/>

事例⑤ 統計的手法を用いて整理・分析する

数学科の「データの活用」と関連させて、収集した情報を統計的に整理・分析することで、事象の特徴を客観的に捉えたり、事実関係を推測したりすることができます。

実践例 ごみの分別状況を改善するための方策を検討

「地域住民を対象にアンケートを実施しよう」

→回答結果をデータ化し、2つの調査項目を軸にとってグラフ化してみよう

→世代によって回答の傾向が違うから、異なる方法で提案してみよう

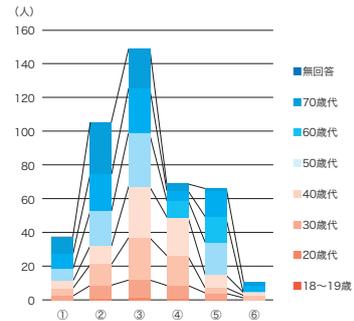
【質問項目】ゴミ分別やリサイクルを進めるため、今後実施すべきと思うこと(複数回答可)	18～19歳	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	無回答
①広報誌等による啓発の徹底	0	3	4	5	7	9	10	0
②分別の手引きの各戸配布やごみ・資源収集カレンダーの内容の充実	1	8	12	11	21	22	30	0
③いつでも現物を持ち込むことができる施設の増設	2	10	25	30	32	27	22	0
④資源物の収集日を増やす	1	8	17	23	10	6	4	0
⑤粗大ゴミの個別収集	1	3	3	8	19	15	16	1
⑥その他	0	1	2	2	2	2	1	0

表形式に集計したアンケート結果

【ポイント】

●分析の視点

- ・目的に応じて、適切な調査項目(属性)を選択して分析できるようにする。



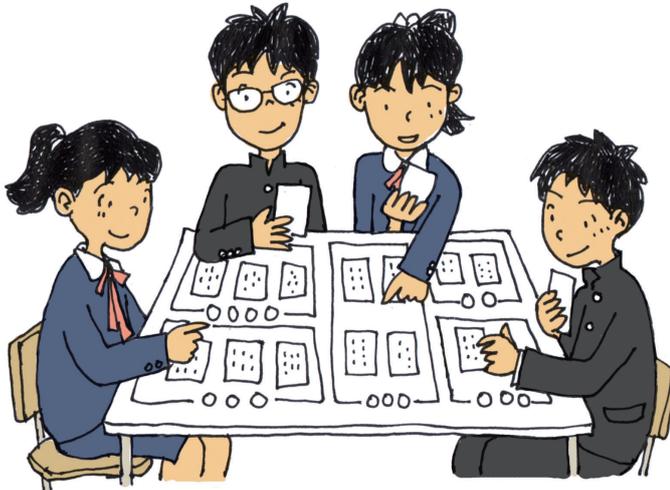
グラフ化したアンケート結果

事例⑥ KJ法的な手法を用いて整理・分析する

収集した情報を比べ、似たもの同士を同じ類型に入れてタイトル付けを行い、他のものと区別します。また、新たに入手した情報はこれまでの枠組みで類型化することで、多量の情報を効率よく処理していくことができます。

実践例 バス利用者の減少と高齢化問題の整理・分析

- 1 何のために整理・分析するのか、目的を確認する。
「町の特徴や利用者の状況から、なぜ、バスの利用者が減少しているのかを考えよう。」
- 2 調査してわかったことや体験して感じたことをカードに書き出す。(1枚のカードに1つの事項)。
- 3 内容が同じカードのまとまりを作り、タイトルを付ける。
- 4 まとまりの関係性が見いだされた場合は、矢印や線でつなぎ、関係性を明示する。



【ポイント】

●話し合いを通しての分類

- ・分類していく際、カードの内容について話し合いながら情報を共有し、理解して分類する。

●まとまり間の関係を明示

- ・まとまり間の関係を検討する際には線や矢印で結びながら全体を整理する。

●教科等との関連

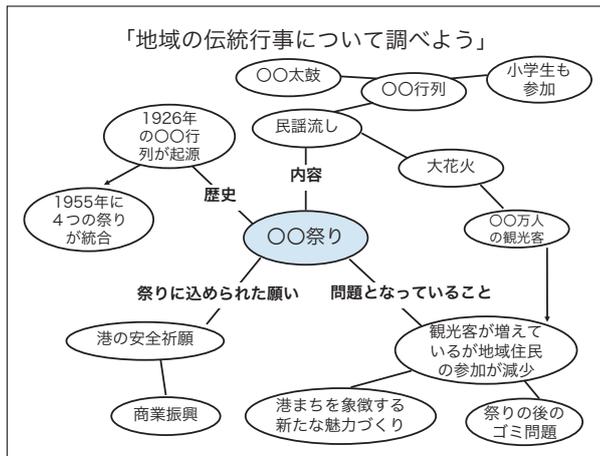
- ・例えば、国語科の情報の扱い方に関する事項の学習など。

事例⑦ コンセプトマップを用いて整理・分析する

コンセプトマップは、言葉をマップ上に並べて線でつないだ図のことで、対象に関する情報を複数配置して、それらの関係や関連を明らかにすることができます。また、関係や関連は、線や矢印で可視化され、全体像を把握する際にも役に立ちます。

実践例 地域の伝統行事について調べよう

- 1 中心に対象とする事柄を書く。
- 2 つながりを考えながら収集した情報を書き出す。
- 3 情報と情報を、線や矢印で結び、どのようなつながりなのか、キーワードを明示する。



【ポイント】

●コンセプトマップの更新

・コンセプトマップに整理していくと、不足している情報があることに気付くことができる。必要な情報を再度収集し、整理・分析しながら更新していくことでより精緻なものとなる。

●教科等との関連

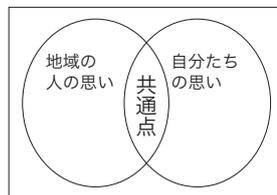
・例えば、国語科の情報の扱い方に関する事項の学習や社会科(公民的分野)の「私たちと現代社会」に関する学習など。

事例⑧ ベン図を用いて整理・分析する

収集した情報の共通点と相違点の両方を明らかにすることができます。整理する視点を設定して情報を振り分けることで、対象の特徴が明確になったり、よさや問題点が明らかになったりします。

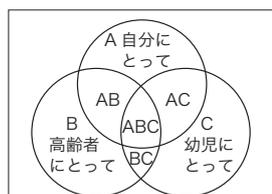
実践例 共通点・相違点を明らかにするベン図

- 1 情報を付せんやカードに書き出す。
- 2 異なる立場を示したベン図を用意する。
- 3 共通点や相違点を考えながらベン図に位置付ける。



実践例 視点を設けて共通の要素を含むものを見いだすベン図

- 1 調べたことを付せんやカードに書き出す。
- 2 整理する視点を決める。
- 3 視点の数に合ったベン図を用意する。
- 4 視点に沿って位置付ける。



【ポイント】

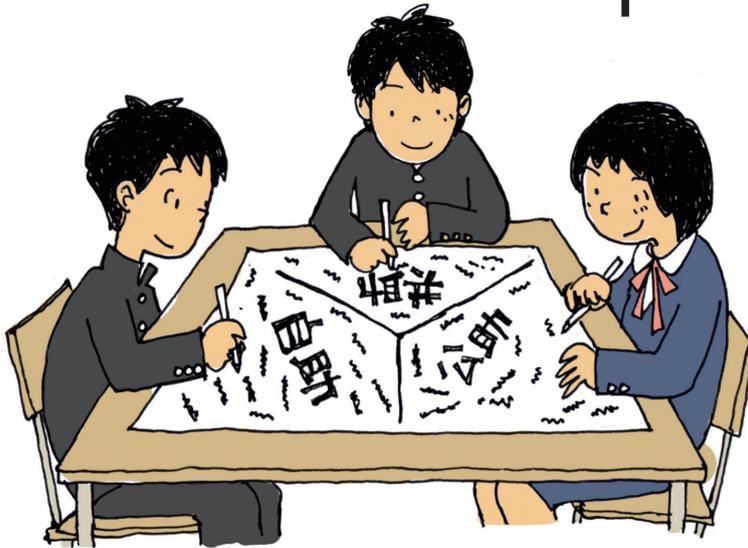
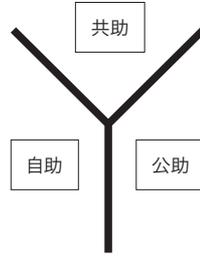
●目的に応じた分析

- ・目的に応じて、例えば「年齢」、「国籍」、「地域」、「立場」など、異なる視点を定めて整理する。
- ・どちらかの立場でなく、どちらのよさも生かした解決の方法を模索する時には、共通点が何かをはっきりさせる。
- ・自分たちの課題解決の提案をよりよいものに高めたい場合は、例えば「A実現可能か、B緊急を要するか、C持続可能か」などの視点を定めて整理する。

事例⑨ XチャートやYチャートで整理・分析する

対象について多様な視点で整理することで、収集した情報を多角的に分析することにつながります。

実践例 避難生活で自分にできることを考えよう (Yチャート)



【ポイント】

- 分析の視点の設定
 - ・Yチャートは3つの視点、Xチャートは4つの視点が設定できる。視点の数にあったチャートを選ぶ。
 - ・検討対象に応じて、分析の視点を適切に定める。教師が設定することもあれば、生徒に設定させることも考えられる。
- 学級全体での共有
 - ・学級全体で話し合いをしながら進めるために、黒板やデジタルホワイトボード等に構造的に書き記すこともできる。

事例⑩ メリット・デメリットの視点で整理・分析する

生徒が考えた課題解決のためのアイデアや方法、提案をメリットとデメリットの両面から吟味することで、より質の高いアイデアや方法へと高めていくことができます。

実践例 自然環境を守る取組を発信しよう

地域の人に伝えるための発信方法のメリット・デメリットを書き出して話し合って選ぶ。

発信方法: カレンダー(自然環境を守るための具体的な取組を紹介する)

メリット	デメリット
<ul style="list-style-type: none"> ・説明だけでなく、写真やイラストを入れられる。 ・実用的なので多くの人に受け取ってもらえる。 ・長期間飾ってもらえる。 ・一枚で家族全員に見てもらえることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・伝えたい内容を読み取ってもらえないかもしれない。 ・印刷にお金がかかる。 <p>【改善策・対応策】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イラストを用いて一目で伝わる内容にする。 ・どれくらいの費用がかかるのか調べる。

【ポイント】

- メリット・デメリットを元にした話し合い
 - ・話し合いを行う際には、建設的・批判的な議論が求められる。この議論を繰り返すことで、アイデアのよさや課題、不足している情報を収集する必要性に気付くことができる。

事例⑪ ビフォー・アフターの視点で整理・分析する

集まった情報を整理・分析していくと、情報を収集する前後で生徒の見方や考え方が変わることがあります。ビフォー・アフターの視点で振り返ることで、生徒が自らの変容を自覚して捉えることができるようになります。これは学習に対する自己評価にもつながります。

実践例 高齢者の困りごとを考えよう

<p>ビフォー</p> <p>何に困っている</p> <ul style="list-style-type: none"> ・動きにくそう ・できることが少なくなっていく <p>何ができる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とにかく助ける 	<p>アフター</p> <p>何に困っている</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全身に重みがある ・できることもある <p>何ができる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「困っていることはありませんか」と聞くようにする
--	---

【ポイント】

- **自己の変容**
 - ・常に自分の変化や成長、その時に感じた思いなどを記録しておくようにする。積み重ねていくことで成長を実感することができるようになる。
- **ビフォーとアフターの明確化**
 - ・活動を行う前に、ビフォーの実態を明確にしておくことで、アフターとの比較がしやすくなる。
- **教科等との関連**
 - ・各教科等の学習でも、この方法を活用することで、振り返りの充実を図ることができる。

事例⑫ SWOT分析で整理・分析する

職場体験やインターンシップなどを通して自己のキャリアを考える場合に、SWOT(スウォット)分析を用いることが効果的です。SWOT分析は、強み、弱み、機会、脅威の頭文字から命名されたフレームワークで、内的要因と外的要因から分析を行うことができます。体験活動を通して得られた情報をもとに再度分析を行うことで、自己の生き方を問い直すことにつながります。

実践例 職場体験学習

職場体験学習での体験先を決めるに当たり、自分に適した職業は何かを考えるようになった。そして、職場体験学習を終え、自分の強みを生かしてどのように自分の価値を高めることができるか、あるいは自分の弱みをどのように克服したりリスクを回避したりすることができるのか、自分のキャリアを見つめ直した。

【ポイント】

- **目的の明確化**
 - ・分析することが目的化しないように、分析の目的や意味を明確にする。

	<p>強み(Strength)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・明るく笑顔で挨拶できる。 ・友達が悩んでいるときに相談に乗れる。 	<p>弱み(Weakness)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最後まで粘り強く努力することが苦手である。 ・プレッシャーに弱い。
<p>機会(Opportunity)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これからの社会ではコミュニケーション能力が一層重要となる。 	<p>強み×機会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・持ち前のコミュニケーション力を生かし、人と深く関わる仕事を考える。 	<p>弱み×機会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何事も計画を立て、見通しをもつ。 ・初めてのことに積極的に挑戦する。
<p>脅威(Threat)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・AIに代替されるかもしれない。 ・グローバル化で競争相手が増える。 	<p>強み×脅威</p> <ul style="list-style-type: none"> ・語学力(英語力)を高め、自分のグローバル人材としての価値を高める。 ・プログラミングスキルを身に付ける。 	<p>弱み×脅威</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育職や介護職など、今後も一定の需要のありそうな職種についても考える。

事例⑬ ランキング表を用いて整理・分析する

収集した情報を基準に沿って順序付けて整理することができます。その過程で、自分とは異なる友達の考えにふれ、視野が広がったり、重要な情報に気付いたりすることが期待できます。

実践例 「〇〇市の魅力再発見」

〇〇市の再開発計画を提案するために、「〇〇市の魅力」ベスト5をグループで話し合って選ぶ。

	魅力	理由
1	温泉 〇〇山 〇〇溪 〇〇城	観光資源が豊富だから
2	〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇	おいしい食べ物がたくさんあるから
3	〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇	地域の人があたたかいから
4	〇〇〇 〇〇〇	生活に困らないから
5	〇〇〇

【ポイント】

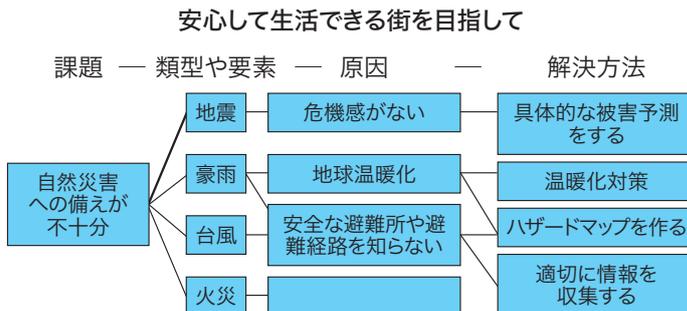
- **根拠の明確化**
 - ・ ランキング化していく際には、「なぜそう考えたのか」理由について話し合うことで、対象を多面的・多角的に捉えることにつながる。
- **付せんやカードの活用**
 - ・ 集めた情報を付せんやカードに書き出しおき、それらを操作しながらランキング付けすることで、比較・分類する思考が可視化されながら、情報が整理されていく。
- **ランキング表の比較**
 - ・ 異なるグループで作成したランキング表を比較することで、考え方の違いに気付くことができる。

事例⑭ ロジックツリーを用いて構造化しながら整理・分析する

解決すべき課題について、論理的に整理・分析する際に有効な方法です。物事には「全体と部分」、「原因と結果」、「意図と行為」、「目的と手段」という構造があります。収集した様々な情報の関係を樹形図のように構造的（網構造・層構造）に整理することで、全体像を明確にしたり、原因や解決策を分析したりすることができます。

実践例 安心して生活できる街を目指して

- 1 「自然災害への備えが不十分」といった課題を書く。
- 2 2層目に自然災害の種類や要素を調べ網羅的に整理する。
- 3 3層目にそれぞれの原因を分析する。
- 4 4層目に原因に対応した解決方法を考える。



【ポイント】

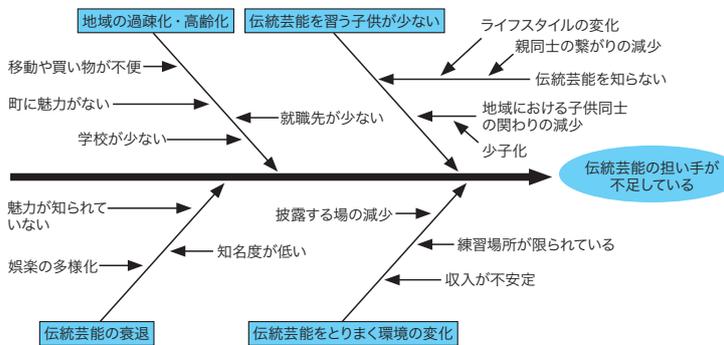
- **ねらいに照らした層構造**
 - ・ 「要素を網羅的に把握する」、「原因を追究する」、「原因に対して解決策を導く」など、学習のねらいに照らしてロジックツリーを構成する。
- **教科等との関連**
 - ・ 例えば、国語科における情報の扱い方に関する事項の学習や理科における「自然災害」に関する学習など。

事例⑮ フィッシュボーン(特定要因図)で整理・分析する

課題の解決に向けて、特定の問題の原因を明確にし、因果関係を整理することができます。明らかになった問題の要因や要素について優先順位をつけ、影響が大きいものから解決策を検討することができます。

実践例 伝統芸能の担い手不足の解消に向けて

- 1 「伝統芸能の担い手が不足している」という問題を書きだし、背骨の線を書いておく。
- 2 問題に対する直接的な要因について、思いつく限り書き出し、大骨として背骨とつなげる。
- 3 大骨につながる小骨に要因を構成する要素を書き出す。小骨をさらに細かく分け、孫骨とすることもある。
- 4 完成した図から最大の要因を特定する。



【ポイント】

- ブレインストーミングやKJ法的な手法との連動
 - ・ブレインストーミングで自由にアイデアを出し合い、それをKJ法的な手法で大まかに整理した後、フィッシュボーンを用いることで、それぞれの因果関係を整理・分析することができる。
- ICTの活用
 - ・ICT端末等で使用できるソフトウェアを活用することで、より多くの生徒間で、分析結果を共有することができる。

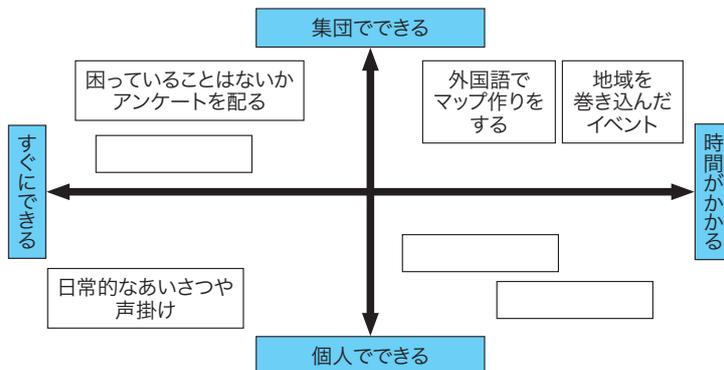
事例⑯ 座標軸を用いて整理・分析する

座標軸を用い、複数の視点を組み合わせることで情報の特徴を整理することで、それぞれの関係を可視化して捉えることができます。

実践例 在留外国人の方が住みやすい街づくり

- 1 住みやすい街にしていくための解決方法をカードに書き出す。
- 2 座標軸の視点を「時間がかかる／すぐにはできる」「個人でできる／集団でできる」と決める。
- 3 カードをどこに位置付けるとよいか話し合いながら整理する。

「在留外国人の方も住みやすい街にするための方法は？」



【ポイント】

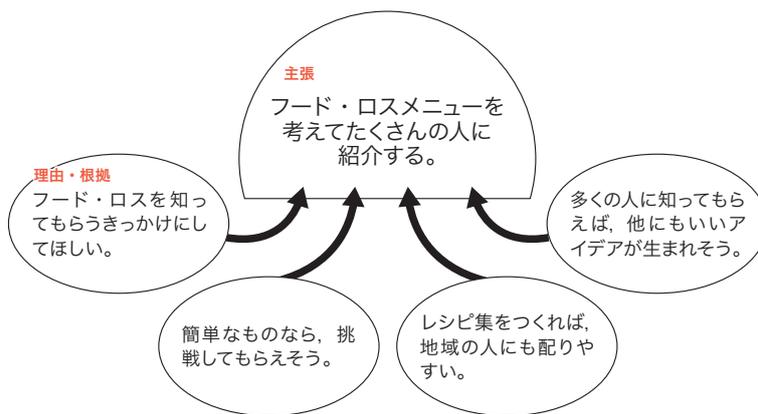
- 適切な視点の設定
 - ・同じ情報でも視点が変われば、異なる様相が見えてくる。効果性、緊急性、安全性、持続性などのねらいに照らして適切な視点を設定することが大切である。
- 各象限ごとの分析
 - ・情報を位置付けた後、四つの象限についてそれぞれの特徴を明確にすることで、課題解決の見通しをもつことにつながる。

事例⑰ クラゲチャートを用いて整理・分析する

クラゲの頭の部分に主張を書き込み、なぜそう言えるのか根拠を足の部分に記入します。収集した情報や経験の中から、主張の根拠や出来事の原因を探して整理し、理由付けることができます。

実践例 フード・ロスを減らそう

- 1 課題やテーマに沿って主張したいことや意見を頭の部分に書く。
- 2 収集した情報の中から、主張や考えの理由・根拠となる情報を探して、足の部分に書き出す。



【ポイント】

- 状況に応じた柔軟な活用
 - ・足を全部埋める必要はない。また、必要であれば足を書き足すようにする。
 - ・クラゲの頭と足がつながりにくい場合は、足の横に説明を書くといい。
- 教科等との関連
 - ・例えば、国語科の情報の扱い方に関する事項の学習や技術・家庭科の食に関する学習など。

事例⑱ KWLシートを用いて整理・分析する

学習の全体の流れを見通しながら、収集した情報を「K=知っていること (What I know)」、「W=知りたいこと (What I want to know)」、「L=学んだこと (What I learned)」の3観点で整理・分析できます。学習活動の計画を立てる場面や学習成果を振り返る場面での活用が有効です。

実践例 人と自然との共生をめざして

- 1 調査の計画を立てる場面で、「K」と「W」を書き出す。
- 2 調査体験を行う。
- 3 調査体験後に何を学んだのか振り返り、体験で得た情報を「L」に書き出す。

絶滅危惧種を守るための取組

K (知っていること)	W (知りたいこと)	L (学んだこと)
絶滅危惧種の保全のためには、地域の自然を守る必要がある。	自然を守るために、私たちができることはあるのか？	イノシシもササユリもどちらも残すために、私たちにもできることがある。
獣害などの影響は、絶滅危惧種にも及んでいる。	獣害を減らすための現実的な対策はあるのか？	国や地域などで行われている対策がある。それを広めていくことも大切である。
環境整備や獣害対策には多くの費用がかかる。		

【ポイント】

- ヒントやモデルの提示
 - ・「K」を出発点として、「W」を整理する際、発達の段階に応じて、どのようなことを書けばよいのかヒントやモデルを示すことが有効である。
- 「W」に対応した整理
 - ・調査体験を行った際、別の用紙に収集した情報を記録しておき、「W」に書かれたことをまとめとして、「L」に新しく知ったことなどを整理する。

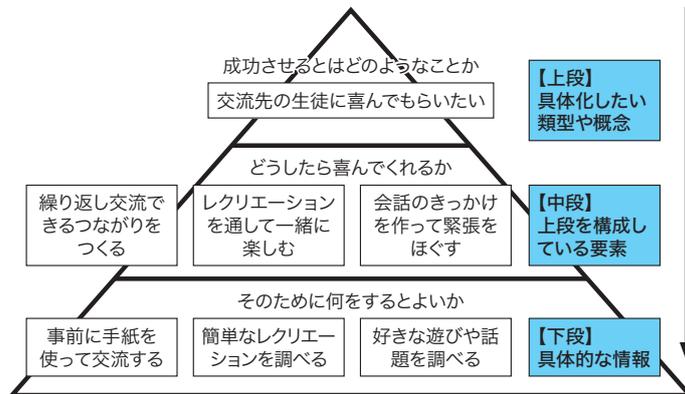
事例⑱ ピラミッドチャートを用いて具体化(個別化, 分解)しながら整理・分析する

収集した情報をピラミッドの上から下に具体化しながら整理することで、類型や概念を構成している要素や具体的な情報(事例)を明確にすることができ、理解が一層深まります。

実践例 ○○支援学校との交流会を開こう

- 1 上段に、具体化したい概念を書き出す
- 2 中段に、上段を構成している要素を考え書き出す
- 3 下段に、具体的な情報を書き出す

「○○支援学校との交流会を成功させよう」



【ポイント】

●発問の工夫

- ・ 上段に位置付けた「類型や概念」を具体化して中段や下段に位置付ける際、その視点を明示することが大切である。

〈例〉「誰が?」、「どこで?」、「いつ?」、「どのような?」、「なぜ?」

- ・ 同じシートを使って、個人・グループ・学級で話し合いをすることで、より多くの具体的な情報へと広がっていく。

●教科等との関連

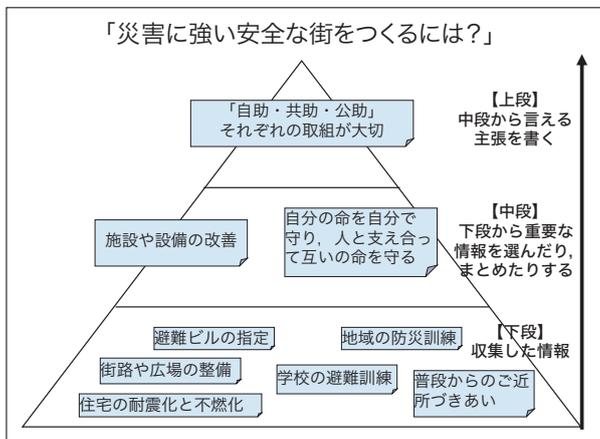
- ・ 例えば、国語科の情報の扱い方に関する学習など。

事例⑳ ピラミッドチャートを用いて抽象化(一般化, 統合)しながら整理・分析する

収集した情報をピラミッドの下から上に抽象化しながら整理することで、複数の情報(事例)に共通する性質や傾向、類型や概念を作り出すことができます。

実践例 災害に強い安全な街をつくらう

- 1 下段に、収集した具体的な情報(事例)を書き出す
- 2 中段に、下段の中から重要な情報を選び、まとめる
- 3 上段に、中段のまとめから言える主張をつくる



【ポイント】

●発問の工夫

- ・ 下段に位置付けた「具体的な情報(事例)」を抽象化して中段や上段に位置付ける際、その視点を明示することが大切である。

〈例〉「事例に共通することは?」、「つまり、全体をまとめて言うと?」

●教科等との関連

- ・ 例えば、国語科の情報の扱い方に関する学習など。

事例② 自己評価カードを活用してまとめ・表現する

どのような資質・能力が身に付き、変容したのかを可視化して認識することは、生徒の自信につながり、さらなる探究活動の意欲を高めることができます。自己評価カードを活用することで、できたことやできなかったことを明確にすることができます。

実践例 自己の変容を振り返る自己評価カード

評価項目	目標：〇〇市の魅力を外国人観光客に伝えよう	自己評価
1	〇〇市を訪れる外国人観光客に関する問題点を見つけることができた	○
2	〇〇市の魅力や価値を伝えることに関して課題を設定することができたか	◎
3	外国人観光客が〇〇市で知りたいことについて情報を集めることができたか	○
4	〇〇市の案内のために必要な情報を整理することができたか	△
5	〇〇市を訪れる外国人観光客に〇〇市を案内をすることができたか	△

【振り返り】〇〇市のいいところは何かを調べたことで、今まで当たり前感じていたことも、とても素敵なことだと分かりました。情報を伝えるための方法をもう少し考えながらこれからの学習に取り組んでいく必要があるのかなと思いました。これからは、・・・

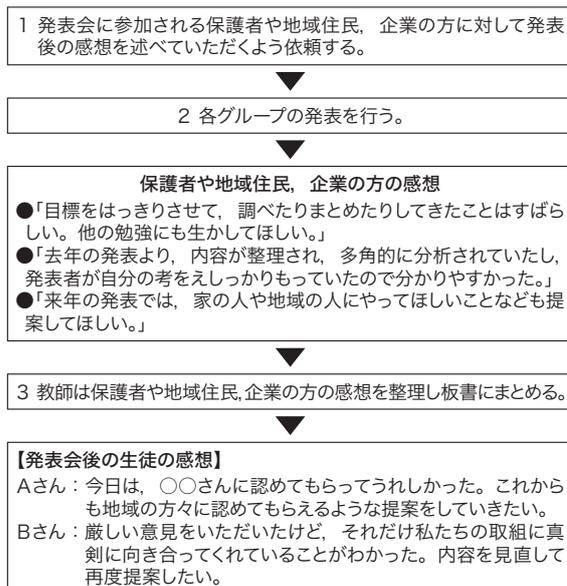
【ポイント】

- 単元全体を振り返る工夫
 - ・ 探究活動を振り返り、文章化することにより、自分の変容を実感できるようにする。その際、単元の「はじめ」と「終末」の変化を表現するようにする。
- 資料の効果的な活用
 - ・ 単元全体の学習活動の足跡が分かる資料（ポートフォリオ）などを活用して、学習の過程において多くの知識や学び方を獲得したこと、単元の導入と終末における自己の変容などに気付くようにする。
- 教科等との関連
 - ・ 各教科等においても、自己評価カードなどに言語化することで学習活動を振り返ることが考えられる。

事例③ 保護者や地域社会などに向けた報告会でまとめ・表現する

自分たちが取り組んできた活動の成果等について、広く社会に発信することによって、達成感や自己肯定感、協働的に学び合うことのよさを実感することにつながります。

実践例 保護者や地域住民、企業の方に向けた発表会



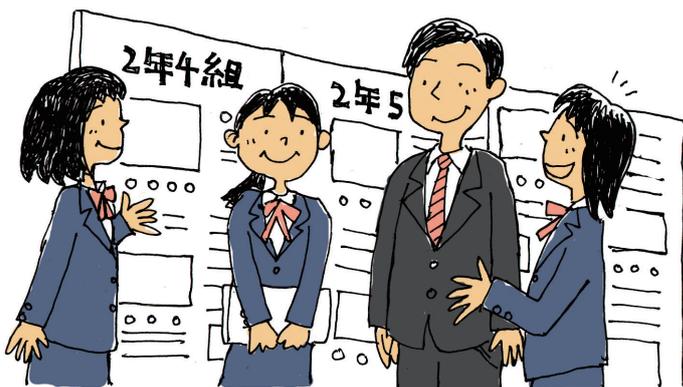
【ポイント】

- 外部評価の場の設定
 - ・ 保護者や地域住民のほか、情報収集のために講師を招いた授業を行っていた場合はその講師などを招き、活動の価値や改善点に関して、感想や意見を述べてもらうよう依頼する。
- 教師によるファシリテート
 - ・ 感想や意見を板書で整理したり、生徒と保護者等との間に入り「〇〇についてはどうですか？」などと対話を促したりする。
- 教科等との関連
 - ・ 例えば、国語科における話すこと・聞くことに関する学習（提案や主張など自分の考えを話したり、それらを聞いて質問したり評価などを述べたりする活動）など。

事例④ ポスターセッションを行いまとめ・表現する

発表内容に関心をもっている聞き手に向けて発表するため、聞き手にとって理解しやすく、発表者にとっても聞き手との質疑応答や意見交換を通して自分の考えを深めたり、新たな視点を得たりすることが期待できます。

実践例 環境保全の取組の成果を ポスターセッションで発表する



- (1)文字やイラスト、図のインパクトで視覚的に訴えかけるような工夫をする。
- (2)コミュニケーションを取りながら進める。
- (3)必要に応じて、実演などを効果的に組み合わせる。

【ポイント】

- ポスター表現の工夫
 - ・結論だけを大きく書いて、他の内容は吹き出し等で補足的に説明するなど、主張点を明確にし、大事なことだけをまとめる。
- コミュニケーションの促進
 - ・発表の途中で「ここまでで何か質問はありますか？」など聞き手とコミュニケーションを取りながら進める。
- 教科等との関連
 - ・例えば、国語科における書くこと、美術科における表現に関する学習など。

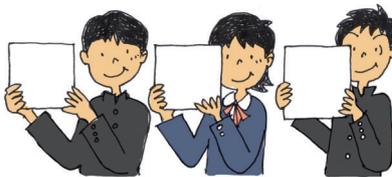
事例⑤ パネルディスカッションを行いまとめ・表現する

発信者が決められたテーマについて異なる立場で議論する「パネルディスカッション」を活用してまとめ・表現する方法です。

実践例 ○○中学校版SDGs達成のためのパネルディスカッション

パネルディスカッションの進行方法

- (1)共通の課題の確認(司会者)
 - ・どんな課題で研究してきたのか
- (2)各パネリストによる提案(パネリスト)
 - ・できるだけ異なる視点や立場で
 - ・具体的な資料を提示しながら
- (3)聴衆の質問、意見(聴衆)
 - ・よく分からなかったことや疑問点への質問
 - ・提案に対する自分の考えの発表
 - (例)「～と思うのですが、どう思いますか」
 - ・反対意見や情報の提供など
- (4)パネリストの意見(パネリスト)
 - ・聴衆の質問や意見について自分の考えを分かりやすく話す
 - (※(3)(4)を繰り返し、意見を深めていく)
- (5)司会者のまとめ(司会者)
 - ・話し合いから生まれた新しい考え方や意見をまとめる
 - ・質問や意見から新たな課題をもつ
- (6)最後に各パネリストが言い残したことや総括的な意見を発表する(パネリスト)



【ポイント】

- 協調的な発言
 - ・互いの意見のよいところを吸収して最も優れた解決策を考えるように会を運営する。
- 根拠のある発言
 - ・裏付けのある意見を発表するために、事前に話す内容を想定し、根拠になる情報を収集しておく。
- 簡潔で分かりやすい発言
 - ・発言できる時間が限られているので、最も伝えたいことを端的に発言する。

事例⑥ シンポジウムを企画しまとめ・表現する

発表者が決められたテーマについてそれぞれ提案し、その後、聴衆（参加者）が質問や意見を出し合い、新しい考えを発見する「シンポジウム」を活用してまとめ・表現する方法です。

実践例 ○○学区の未来を考えるシンポジウム

シンポジウムの進行方法

- (1) 司会者がテーマについて説明する。
- (2) シンポジストが自分の意見を発表する。
- (3) 司会者がシンポジストの意見をまとめながら、テーマを掘り下げる。
- (4) 司会者が会場の参加者からの質問を受け付け、シンポジストは質問に回答する。
- (5) 最後にシンポジストが言い残したことや総括的な意見を発表する。



【ポイント】

- 全員の積極的な参加
 - ・ 司会者は、疑問を投げかけるなど発言が活発になるようにする。シンポジストは、参加者全員で考えた内容を提案する。
 - ・ 聴衆は聞くだけで終わらず積極的に質問や意見を言う。
- 簡潔で分かりやすい発言
 - ・ 発言できる時間が限られているので、最も伝えたいことを端的に発言する。

事例⑦ 新聞でまとめ・表現する

自分自身の考えを伝えるために、情報を再構成して新聞としてまとめることが考えられます。その際、伝える目的、相手などに応じて、内容、表現方法、情報量、構成などを工夫する必要があります。

実践例 探究活動の成果を新聞でまとめる

優先順位②	○ ○ ○ ○	トップ記事	○ ○ ○ ○	題字
私の考え	コラム	優先順位③	○ ○ ○ ○	優先順位④
			○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○

表現上の工夫

- ・ 記事の量、見出しの大きさは、紙面の下部ほど少なく、小さくなる。
- ・ 見出しは、読み手を引き付けるため、比喩、体言止め、倒置法、語りかけなどを用いる。
- ・ 資料で調べた難しい言葉や読みにくい漢字は分かりやすく表す。

【ポイント】

- 目的意識・相手意識と内容の関連付け
 - ・ 伝える目的や相手が変われば、それに伴って内容（主張点）も変わる。何を目的とした活動であったのか、単元の課題を確認し、主張点を明確にすることで情報の再構成を促す。
- 記事の優先順位等の工夫
 - ・ 主張点が分かりやすく伝わるよう記事の優先順位や割り付け、見出し、分量等を工夫する。
- 効果的な写真・資料の活用
 - ・ 写真や資料を効果的に使うことで、活動の様子や臨場感等を伝えることができる。

事例⑧ パンフレットでまとめ・表現する

多くの情報を一目でわかりやすくまとめ・表現するには、パンフレットも一つの方法です。左右に開く観音折りならば4ページを一度に見ることができるなど、レイアウトと折り方を工夫することで、様々な表現が可能となります。

実践例 町のよさをパンフレットでまとめる

伝えたい内容に「見出し」を付けてカードで整理する
・伝えたい内容を「見出し」を付けてカードに書き出す ・カードには1枚に1項目を書く
「見出し」を並べてパンフレットに載せる順序を決める
・どのような順番に載せれば、読む相手の説得力があるかを考える ・キャッチコピーを考える (例) 数字での主張、諸感覚での主張、色で主張、擬音語の活用、擬人化など
文章と図や表、写真とのバランスを考える
・文章に合わせて入れたい図や表、写真などを決める ・優先順位や分量等に配慮してレイアウトを考える ・パンフレットの形式を考える (1枚裏表印刷、観音折り、8ページの冊子など)
レイアウトに従って文章や図表を貼り付け、まとめる
・見出しは大きく目立たせる ・文章は短い文で分かりやすく、少なく ・図や写真、文章の量を考えて書く (基本的には文章30%、図・表・写真70%が目安)
身の回りのパンフレットを参考にして、よい点をまねてみましょう!

【ポイント】

- 相手意識・目的意識の明確化
 - ・「観光客に町のよさをPRする」、「地域住民に働きかける」など対象や目的を明確にし、それに応じた内容や表現を工夫する。
- 表現の工夫
 - ・対象や目的に応じて、最も伝えたい言葉や画像を精選し、練り上げることが、情報を再構成し、概念的な知識の獲得につながる。
- 教科等との関連
 - ・例えば、国語科における書くこと、美術科における表現に関する学習、数学科におけるデータの活用に関する学習など。

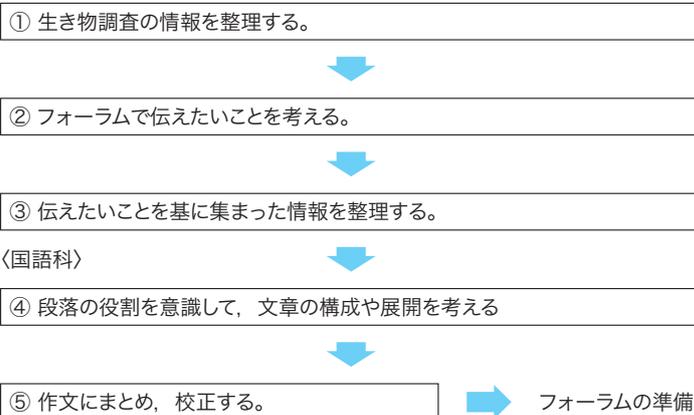
事例⑨ 作文でまとめ・表現する

国語科の書くことと関連させ、総合的な学習の時間での体験活動を通して考えたことなどを作文でまとめ・表現することが考えられます。

実践例 フォーラムで伝えたいことを作文でまとめる

総合的な学習の時間の中で取り組んだ生き物調査の内容を地域の方々にフォーラムで伝えるために、全体を見通したり事柄を整理したりしてまとめる。

<総合的な学習の時間>



【ポイント】

- 資料としての蓄積
 - ・生徒が作成した発表資料や作文集などを、学校図書館等で蓄積し閲覧できるようにしておくことで、生徒が学習の見通しをもつ上で参考になるだけでなく、優れた実践を学校のよき伝統や校風の一つにしていくことができる。
- 教科等との関連
 - ・総合的な学習の時間での体験活動などを国語科での学習の教材として活用することもできる。

事例⑫ 制作，ものづくりとしてまとめ・表現する

具体的な制作やものづくりを目指すことで，目標の実現に向けた探究活動が実現します。体験を通して創造性を発揮するとともに，幅広くメッセージを伝えることにもつながります。

また，自分たちの制作物に込めた思いや表現の背景にある意図を整理する過程で，自らの取組を省察し，学習の意義や価値に気付くことにもつながります。

実践例 地域の特産品を使った商品開発

料理，お弁当，スイーツ，伝統工芸品など

制作，ものづくりの例
・キャラクターの制作
・ロゴマークの制作
・地域のPRムービーの制作



【ポイント】

- 制作の意図や目的の明確化
 - ・制作やものづくりを行うこと自体が目的化しないように，それを通して解決したい課題意識を明確にする。
- 地域の人や専門家との協働
 - ・地域の人や専門家からの助言を受ける場面を設定することで，協働して取り組むことの大切さや地域社会に参画する喜びを実感することにつながる。

事例⑬ 総合表現としてまとめ・表現する

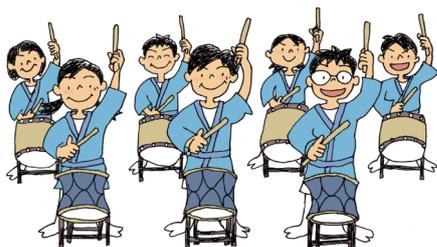
学習した成果を演劇等の総合表現として行うことも効果的です。セリフづくり，絵づくり，音づくり，動きづくりなど，多様な表現方法を組み合わせて表現するため，協働的に取り組む態度の形成や各教科等の学習との往還が期待できます。

実践例 ○○市のよさを創作ダンスで表現する

- 1 市の特徴を盛り込んだ楽曲をつくる
- 2 表現したい内容をどのようにしたら伝わるかを考え創作する
- 3 体育大会の機会を活用して表現する



実践例 伝統文化の大切さを郷土に伝わる伝統芸能で表現する



総合表現の例

- ・地域の歴史を伝える演劇やミュージカル
- ・地域活性化のためのPRムービー など

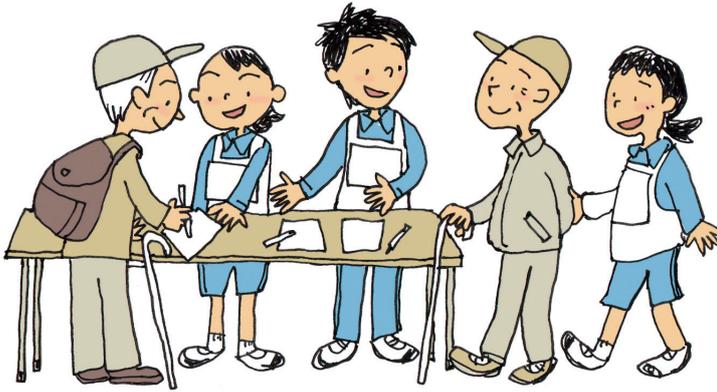
【ポイント】

- 情報の収集との一体化
 - ・「こんなことを表現したい」という思いや願いが，セリフや衣装となって具体化されるため，必要に応じて再度情報を収集し，表現につなげるなど，探究のプロセスの柔軟化を図る。
- 教科等との関連
 - ・例えば，美術科や音楽科，保健体育科における表現に関する学習など。

事例⑭ 社会への参画を通してまとめ・表現する

日常生活や社会の中にある問題や地域の事象を実際に解決していく単位では、生徒が社会参画することが考えられます。こうした学習活動を通し、課題解決に取り組んだことへの自信や自己肯定感が育まれ、社会への参画意識も醸成されます。

実践例 地域ぐるみの防災訓練の企画・運営



社会への参画の例

- ・地域の伝統・文化を伝える祭りの企画・運営
- ・観光ガイドとして地域の名所案内
- ・環境フェスタの企画・開催
- ・商店街の再生イベントの企画・開催 など

【ポイント】

- 同じ問題の解決を目指す地域の人や行政機関、専門家との協働
- ・ 立場が異なる他者と繰り返し関わる場を設定し、目的に照らして多様な視点で検討し、一つのものにまとめていくことで、事象に対する認識が深まる。
- 成果の検証
- ・ 例えば、参加者にアンケートを取るなど、成果を検証する場面を設定することで、生徒が新たな課題を設定することにつながる。

「GIGAスクール構想」の実現に向けて、小・中学校においては児童生徒向けの1人1台端末環境が整備された。このことは、総合的な学習の時間をより学際的に、探究的に進める後押しになる。1人1台端末環境が整備されることにより、探究的な学習の過程の充実が期待できる。探究の道具として使いこなせるようにするためにも、ICT端末の十分な活用が求められる。

以下、ICT端末を活用することによって深まる学びについて、探究の過程に沿って考えていきたい。

・「課題の設定」の場面での活用

「課題の設定」の場面は探究のプロセスのスタートである。この場面では、生徒が探究する価値のある課題をどのように見出していくのかが重要である。そのためには、課題状況を具体的にイメージし、課題を自分のこととして捉えられるようにする必要がある。

ICT端末があれば、動画や写真などを用いて課題状況をイメージしやすくなるように補助することや、課題状況と自分の思いとのズレを認識させることができる。また、課題状況を具体的にイメージするためには、端末の画面操作だけでなく、生徒が実際に地域に出てインタビューやフィールドワークを行ったりすることも有効である。その際、端末で写真や動画、音声データ等として記録、蓄積し、視聴することで生徒の課題意識を高めることも考えられる。また、見出した課題について、既に実行されている解決策や他の地域の取組の様子などを調べることも可能になる。

このように、ICT端末を活用することで、課題を具体的にイメージすると同時に、その課題に対して既に取り組みされている解決策を調べることで、課題をより焦点化させることが期待できる。

・「情報の収集」の場面での活用

「情報の収集」の場面は、ICT端末を活用する場面が多くある。インターネット上には多種多様な情報が無数に存在している。どの本を読むべきか、誰に話を聞くべきかという情報もインターネット上の情報を参考にすることができる。WEB会議システム等を活用して、遠隔地の専門家に話を聞くこともできるだろう。また、動画情報なども上手に使いえば優良な情報源となりうる。

観察やインタビュー等の活動による情報収集の場合も写真や動画、音声データ等として蓄積しておくことで、その後の探究的な学習を深める役割を果たすことが考えられる。

・「整理・分析」の場面での活用

ICT端末の活用によって「情報の収集」の場面が充実するからこそ、「整理・分析」の場面がより重要となる。集めた情報を比較したり、分類したり、関連付けたりしながら、自分なりの考えを形成していくことが求められる。「整理・分析」の場面では、例えば、表計算ソフトを用いた統計処理や、テキストマイニングによる定性分析などが考えられる。また、考えることを補助するための思考ツールなどを活用しながら、「整理・分析」の学習活動を支援していくことも求められる。



・「まとめ・表現」の場面での活用

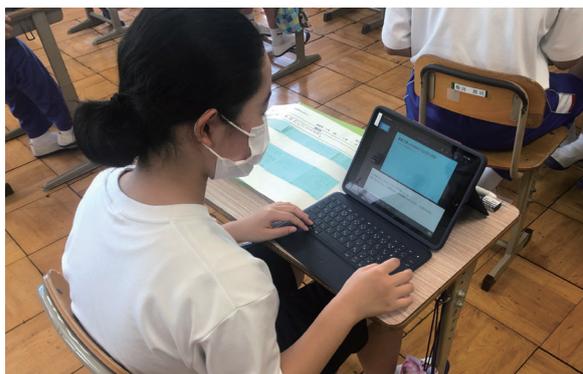
「まとめ・表現」の場面においても、文字情報だけでなく、写真や動画、音声データなどを使って表現したり、まとめたものを学校以外の人にも広く発信したりすることができる。同時に、この場面では、時間的制約を超えた情報の蓄積、過程の可視化を容易にするICTの特性を活かし、学習の履歴や活動の様子をポートフォリオ化して、学びの振り返りを支援することもできる。ワークシートなどをICT端末で記録しておき、以前の考えと現在の考えと比べて学びを自覚させたり、過去の写真やデータと現在のものを比べて状況がどのように改善されたのかを明らかにして、さらなる課題の発見を支援することも可能になる。

さらに、生徒一人一人が端末を活用することにより、それぞれの生徒が自身にとって最適な手順や方法を選ぶことができる。これまでは、インターネットで情報検索をさせる場合には、クラス全員でコンピュータ教室に行き、全員が一斉にインターネットに接続することが一般的であったが、1人1台端末環境ではそのような必要がなくなる。調べる課題自体が異なることもあるだろうし、同じ課題に向かっていたとしても、それぞれの生徒が場面や状況に応じて最適な手順や方法での情報収集を行うことも可能になる。本で調べる生徒もいれば、インターネットで調べる生徒もいるような状況設定が可能になるだろう。

同時に、それらの学習状況や学習成果を常に教師や生徒間で共有できることも1人1台端末環境の利点である。「情報の収集」の場面では、個別に収集した情報をクラウド上のフォルダに保存・蓄積していけば、短時間で多様かつ多量な情報を共有することが可能である。また、「まとめ・表現」の場面でも、文章やスライドをクラウド上で共有し、共同編集しながらまとめていくことで、内容の重複やデザインの統一などをチェックしながら進めたり、それぞれの進捗状況を確認したりしながら作業を分担することが可能になる。

このように、ICT端末を活用することによって、探究的な学習の過程は、ますます質的に高まり、実社会や実生活の中でも生かされていくようになる。同時に、現実の複雑な問題状況を解決する過程で活用されることによって、端末が探究のための道具として活用できるものになっていくことが期待される。

そのためにはいつ、どこで何を使うのかということを生徒が自分で選択できる状況や、いつでも端末にアクセスできる状況をつくっていくことが重要である。端末の使い方やアプリの活用方法、活用のマナーやルールなどの必要なことを事前に指導するとともに、生徒の活用状況に応じて適宜指導を行うようにしたい。



教育・学習におけるICT活用の特性・強みを生かすことで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善や個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実につなげることができる。そうすることで、従来はなかなか伸ばせなかった情報活用能力等の資質・能力の育成や、今までの学習方法では困難さが見られた生徒の一部への効果の発揮、今までできなかった学習活動の実施が可能となる。

ICT活用の特性・強みと具体的な活用例	ソフト・機能(例)
<p>(1)多様で大量の情報の取扱い、容易な試行錯誤</p> <p>①探究的な学習過程における活用 課題の設定・・・デジタルデータによる学習課題の具体的なイメージや焦点化等 ※グローバルな課題, ローカルな課題, 情報の蓄積による個に応じた課題の設定が可能となる。</p> <p>情報の収集・・・ウェブブラウザによるインターネット検索等 ※多様な情報, 大量の情報, 最新の情報, 加工しやすい情報を, いつでも, どこでも, 素早く, 手軽に調査し収集することが可能となる。</p> <p>整理・分析・・・表計算ソフトによるデータ等の整理・分析, グラフの作成, プレゼンテーションソフトを使った図の作成や情報の整理等 ※デジタルデータを検索, 分析するなどして情報を再構成したり, プログラミング的思考を育成したりすることが可能となる。</p> <p>まとめ・表現・・・文書作成ソフトによるレポート, 論文等の作成, プレゼンテーションソフトを使った発表等 ※校内のみならず, 国内外への多様な発信, 手軽な制作と工の繰り返し, 成果物の継続的な蓄積が可能となる。</p> <p>②今までの学習方法では困難さが見られた生徒に対する学習指導の際に, ウェブブラウザを活用した多種多様な学習動画, デジタル教材などから生徒の興味・関心, 特性に応じた活用</p> <p>③プログラミングにおける試行錯誤の繰り返しなど論理的思考・課題解決</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェブブラウザ ・文書作成 ・表計算 ・プレゼンテーション ・プログラミング
<p>(2)時間的制約を超えた情報の蓄積、過程の可視化</p> <p>①写真・動画の撮影・編集・保存による学習過程を可視化した学習の振り返りや, 目標・学習課題の更新</p> <p>②クラス管理ソフトを活用したデータの共有により個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の実現</p>	<p>((1)のソフト・機能に加えて)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・写真・動画の撮影・編集・保存 ・クラス管理
<p>(3)空間的制約を超えた相互かつ瞬時の情報の共有</p> <p>①ウェブ会議機能, ファイル共有機能等による学校と家庭, 他の学校・地域や海外との交流のような距離が離れた場をつないだ学習</p> <p>②ウェブ会議機能, ファイル共有機能等による他者との意見共有, 比較検討, 合意形成, アイデア創出, 発表資料等の共同制作</p>	<p>((1)のソフト・機能に加えて)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コメント ・アンケート ・チャット ・電子メール ・ウェブ会議 ・ファイル共有

※平成28(2016)年『2020年代に向けた教育の情報化に関する懇談会』最終まとめを参考に作成

学習指導要領との関連 (中学校学習指導要領 第5章 第3の2(3))

探究的な学習過程においては, コンピュータや情報通信ネットワークなどを適切かつ効果的に活用して, 情報を収集・整理・発信するなどの学習活動が行われるように工夫すること。その際, 情報や情報手段を主体的に選択し活用できるよう配慮すること。

コラム

総合的な学習の時間における「考えるための技法」の活用

「考えるための技法」とは、考える際に必要になる情報の処理方法を、「比較する」「分類する」「関連付ける」のように具体化し、技法として整理したものである。概ね中学校段階において活用できると考えられる「考えるための技法」としては、次のようなものが考えられる。

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ○順序付ける <ul style="list-style-type: none"> ・複数の対象について、ある視点や条件に沿って対象を並び替える。 ○比較する <ul style="list-style-type: none"> ・複数の対象について、ある視点から共通点や相違点を明らかにする。 ○分類する <ul style="list-style-type: none"> ・複数の対象について、ある視点から共通点のあるもの同士をまとめる。 ○関連付ける <ul style="list-style-type: none"> ・複数の対象がどのような関係にあるかを見付ける。 ・ある対象に関係するものを見付けて増やしていく。 ○多面的に見る・多角的に見る <ul style="list-style-type: none"> ・対象のもつ複数の性質に着目したり、対象を異なる複数の角度から捉えたりする。 | <ul style="list-style-type: none"> ○理由付ける(原因や根拠を見付ける) <ul style="list-style-type: none"> ・対象の理由や原因、根拠を見付けたり予想したりする。 ○見通す(結果を予想する) <ul style="list-style-type: none"> ・見通しを立てる。物事の結果を予想する。 ○具体化する(個別化する、分解する) <ul style="list-style-type: none"> ・対象に関する上位概念・規則に当てはまる具体例を挙げたり、対象を構成する下位概念や要素に分けたりする。 ○抽象化する(一般化する、統合する) <ul style="list-style-type: none"> ・対象に関する上位概念や法則を挙げたり、複数の対象を一つにまとめたりする。 ○構造化する <ul style="list-style-type: none"> ・考えを構造的(網構造・層構造など)に整理する。 |
|--|---|

「考えるための技法」を活用することの意義については、以下の三点がある。

一つ目は、探究の過程のうち特に「整理・分析」の過程における思考力、判断力、表現力等を育てるという意義である。情報の整理・分析においては、収集した情報をどのように処理するかという工夫が必要になる。「考えるための技法」は、こうした分析や工夫を助けるためのものである。

二つ目は、協働的な学習を充実させるという意義である。「考えるための技法」を使って情報を整理・分析したものを黒板や、デジタルホワイトボード等で表現することによって、可視化され生徒間で共有して考えることができるようになる。

三つ目は、各教科等を越えた全ての学習の基盤となる資質・能力を育成すると同時に、各教科等で学んだ資質・能力を実際の問題解決に活用するという総合的な学習の時間の特質を生かすという意義である。「考えるための技法」を意識的に使えるようにすることによって、各教科等と総合的な学習の時間の学習を相互に往還する意義が明確になる。

「考えるための技法」の活用を支援する上で、「思考ツール」の活用が効果的である。「思考ツール」とは、思考を可視化することで、いわば道具のように「考えるための技法」を意図的に使えるようにするためのものである。しかし、「思考ツール」を授業場面で、ただ用いるだけでは、生徒が「考えるための技法」を意図的に使う技能を身に付けることはできない。教師は以下の二点に留意する必要

がある。

第一に、「思考ツール」を活用すること自体が目的にならないように、探究的な学習の過程に適切に位置付ける必要がある。さもないと、「思考ツール」が、生徒の自由な発想を妨げるものになってしまうたり、「思考ツール」に単に書き込む作業に終始してしまったりすることがある。そうしたことを避けるために、学習の過程において、どのような意図で、どのように活用するかを十分検討し、「考えるための技法」に対応した「思考ツール」を選択する必要がある。

第二に、各教科等や総合的な学習の時間において生徒が身に付ける「考えるための技法」や「思考ツール」を組織的・計画的に活用する指導を工夫する必要がある。それは、物事を比較したり、分類したりすることや、物事を多面的に捉えたり考えたりすることは、様々な形で各教科等で育成を目指す資質・能力やそのための学習の過程に含まれているからである。「考えるための技法」や「思考ツール」を組織的・計画的に活用する指導を工夫することで、生徒は、各教科等の様々な学習場面において、「考えるための技法」や「思考ツール」を習得する。さらに、総合的な学習の時間や他教科等でそれらを活用する経験を積み重ねることで、身に付けた資質・能力が汎用的な資質・能力として育成されることが期待されている。実際の指導に当たっては、例えば、「比較する」場面では、どの教科等においても同じ「思考ツール」を活用するように組織的・計画的に指導することで、生徒が比較するための思考ツールを意識的に活用できるようになり、各教科等の枠を越えた汎用的なものとして身に付けていくことが期待できる。

事例 思考ツールを活用した総合的な学習の時間の授業

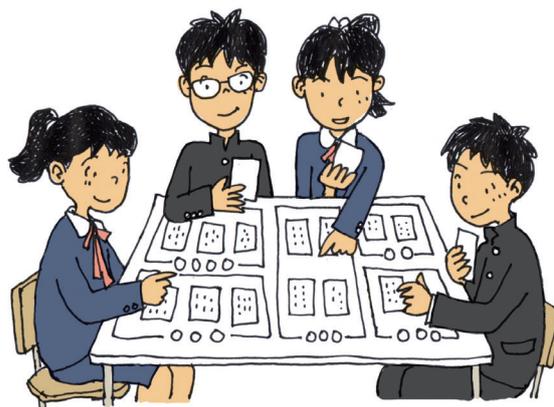
総合的な学習の時間における探究課題として、「町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人々や組織」を設定した事例を取り上げる。この事例では社会科をはじめとする他教科等の学習と関連させながら、地域の特色や現状について学ぶとともに、保護者や地域住民、観光客へのアンケート調査を行い、地域の魅力や課題について明らかにした。



第2学年の生徒たちの多くは、地域の未来を具体的にイメージできていなかったことから、地域経済分析システム（RESAS）*を用いて自分たちの住む町の今後の人口の推移や産業構造の変化などを調べる時間を設定した。将来の人口が今よりもかなり減ること、高齢者率が急激に増加することなどが明らかとなり、生徒たちは、「このままでは危ない」という危機感を抱いた。

その一方で、都会ではないのに人口が増えている町や住みやすい町ランキングの上位にランクインしている魅力的な町があることもわかった。そこで、「住み続けられる町とは、どんなところだろうか」という課題を設定し、魅力的な町を実際に訪れ、その様子を観察したり、インターネットを活用してその町について調べたりした。そして、収集した情報についてどのような「考えるための技法」を用いて整理・分析するのが有効なのか、生徒に考える機会を設けた。

ここでは、自分たちが住む町と他の魅力的な町の特徴を明らかにするために、「K J 法的な手法」(本書42頁参照)を用いることにした。K J 法的な手法では、多量の情報を効率よく処理していくことができる。生徒たちは、自分たちの町の特徴と魅力的な町の特徴について、自分たちが感じていること、地域の方々から聞き取ったこと、インターネットで調べたこと、実際に訪れて感じたことなどをカードに書き出し、グループ分けを行った。そして、自分たちが住む町と他の魅力的な町の特徴を比較した。



こうして明らかとなったそれぞれの町の特徴を基に、自分たちが住む町の魅力を高めるために必要な手立てについて、「ピラミッドチャート」(本書49頁参照)を使って具体化することにした。ピラミッドチャートでは、下段に、自分たちが住む町の現状や課題、そして魅力などを書き出し、その中から、自分たちが住む町の魅力を高めるために必要な手立てを中段に書き出した。そして、その中で優先順位の高い手立てを上段に書き出し、これから取り組んでいく活動を決定した。

「考えるための技法」の活用は、総合的な学習の時間だけで求められるものではない。国語科における物語文の序盤と終盤の登場人物の比較、社会科における世界と日本の文化の特徴の整理、技術・家庭科の家庭科分野における物の選び方や買い方についての意識の整理など、様々な教科等の学習場面で「考えるための技法」を活用した経験が基盤にある。こうした学習経験を積み重ねることで、生徒は「考えるための技法」を汎用的なものとして身に付け、実社会・実生活の課題解決において課題の特質に応じて自在に活用できるようになる。その実現に向け、教師には、「考えるための技法」の視点から各教科等の学習をつなげるカリキュラム・マネジメントが求められる。

*RESAS (リーサス)：地方創生の様々な取り組みを情報面から支援するために、経済産業省と内閣官房が提供している地域経済分析システム(<https://resas.go.jp/>)。



第2編

総合的な学習の時間と カリキュラム・マネジメント

第1章

カリキュラム・マネジメントの充実

カリキュラム・マネジメントは、学校教育に関わる様々な取組を、教育課程を中心に据えて組織的かつ計画的に実施し、教育活動の質の向上につなげていくものであり、中学校学習指導要領第1章総則の第1の4において次の三つの側面が示されている。

- ①内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと
- ②教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと
- ③教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと

これらは、①が教科等横断的なカリキュラム・デザイン、②がPDCA サイクルを通じた教育課程やその下での教育活動の検証・改善、③が学校内外のリソース活用、を指しており、それぞれが、各学校で育成を目指す資質・能力を育むことを目的とした組織的・計画的な取組と位置付けられる。関連して、同章第5の1アでは、「各学校においては、校長の方針の下に、校務分掌に基づき教職員が適切に役割を分担しつつ、相互に連携しながら、各学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントを行うよう努めるものとする。(後略)」と示されているように、カリキュラム・マネジメントは校長が定める学校の教育目標など教育課程の編成の基本的な方針や校務分掌等に基づき行われることを示しており、全教職員が適切に役割を分担し、相互に連携することが必要である。

一方、同章第2の1において、教育課程の編成に当たって、学校教育全体や各教科等における指導を通して育成を目指す資質・能力を踏まえつつ、各学校の教育目標を明確にすることとともに、各学校の教育目標を設定するに当たっては、「第4章総合的な学習の時間の第2の1に基づき定められる目標との関連を図るものとする。」とされた。

各学校における教育目標には、地域や学校、生徒の実態や特性を踏まえ、主体的・創造的に編成した教育課程によって実現を目指す生徒の姿等が描かれることになる。各学校における教育目標を踏まえ、総合的な学習の時間の目標を設定することによって、総合的な学習の時間が、各学校の教育課程の編成において、特に教科等横断的なカリキュラム・マネジメントという視点から、極めて重要な役割を担うことが今まで以上に鮮明となった。それゆえ、総合的な学習の時間におけるカリキュラム・マネジメントの充実について検討することは、教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図る上で極めて重要である。

本書第2編では、総合的な学習の時間におけるカリキュラム・マネジメントの充実のための具体的な方策について解説する。カリキュラム・マネジメントの三つの側面について、①については2章から4章、②については5章、③については6章で論じている。

第2章 全体計画の作成

第1節 全体計画の基本的な考え方

1. 全体計画の概要

全体計画とは、指導計画のうち、学校として、総合的な学習の時間の教育活動の基本的な在り方を示すものである。具体的には、各学校において定める目標、及び内容について明記するとともに、学習活動、指導方法、指導体制、学習の評価等についても、その基本的な内容や方針等を概括的・構造的に示すことが考えられる。

全体計画に盛り込むべきものとしては、①必須の要件として記すもの、②基本的な内容や方針等を概括的に示すもの、③その他、各学校が自分の学校の全体計画を示す上で必要と考えるもの、の三つに分けて考えられる。

①必須の要件として記すもの

- ・各学校における教育目標
- ・各学校において定める目標
- ・各学校において定める内容（目標を実現するにふさわしい探究課題、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力）

②基本的な活動内容や方針等を概括的に示すもの

- ・学習活動
- ・指導方法
- ・指導体制（環境整備、外部との連携を含む）
- ・学習の評価

③その他、各学校が全体計画を示す上で必要と考えるもの。

- ・年度の重点・地域の実態・学校の実態・生徒の実態・保護者の願い・地域の願い・教職員の願い
- ・各教科等との関連・地域との連携・小学校や高等学校との連携・近隣の中学校との連携 など

その他、全体計画には、各学校が必要と考える事項を加えることができる。

以上を書き表した全体計画の様式の例が図1である。必要な要素が含まれていれば、その様式は、各学校で自由に定めることができる。

なお、「社会に開かれた教育課程」の理念に基づき、目指すべき教育の在り方を家庭や地域と共有

し、その連携及び協働のもとに教育活動を充実させていくためには、各学校の教育目標を含めた教育課程の編成についての基本的な方針を、家庭や地域とも共有していくことが重要である。そのためにも、総合的な学習の時間の全体計画の策定や公表を効果的に行うことが求められる。

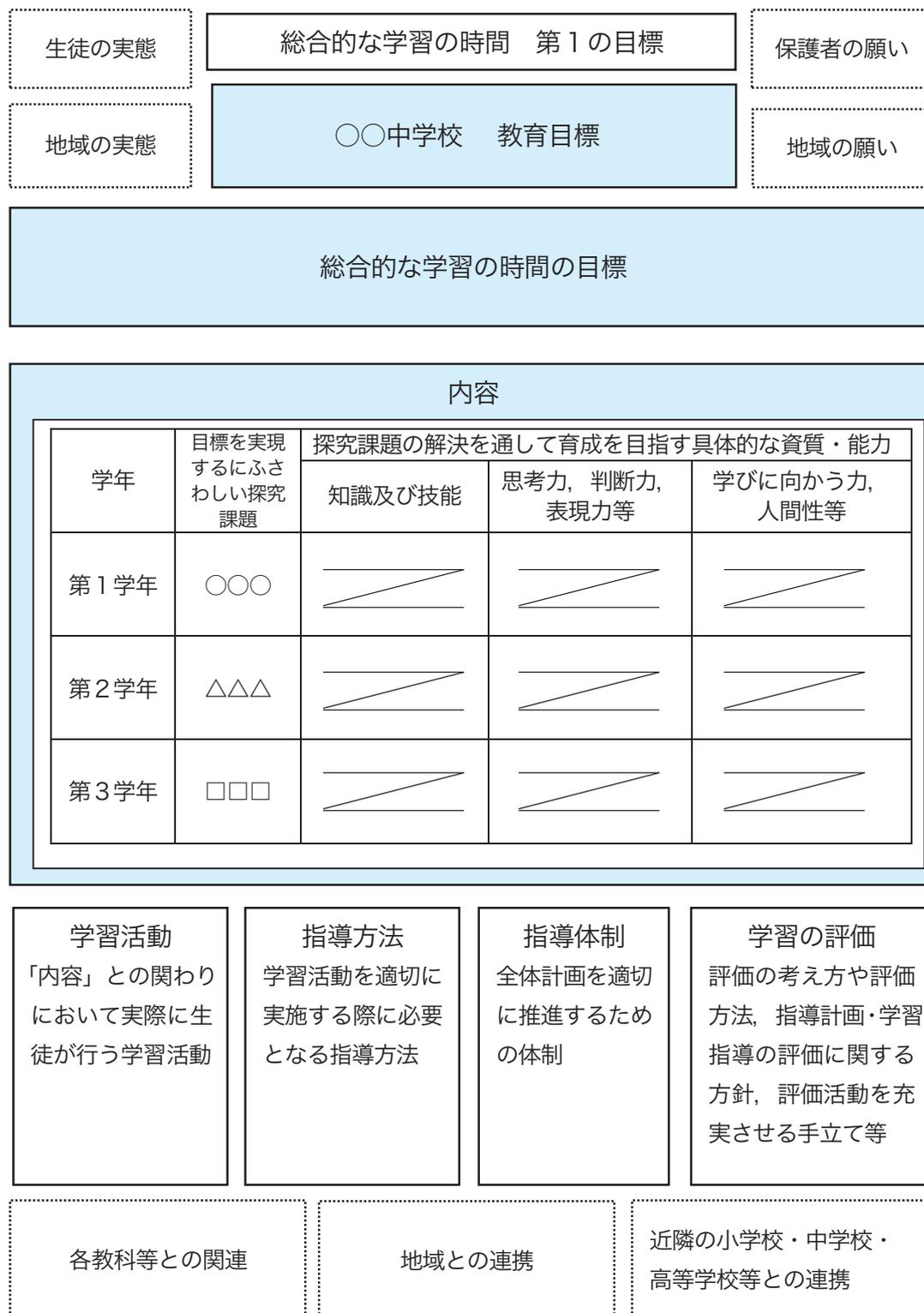


図1 総合的な学習の時間の全体計画の様式(例)

2. 全体計画の中心となる三要素

先に示した全体計画における必須の要件の中でも「各学校において定める目標」と、「目標を実現するにふさわしい探究課題」、「探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力」は、全体計画の中心となる三要素と考えることができる。

〈全体計画の中心となる三要素〉

- ①各学校において定める目標
- ②目標を実現するにふさわしい探究課題
- ③探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力

総合的な学習の時間においては、横断的・総合的な学習や探究的な学習としての単元を実現することが欠かせない。そのためには、三要素を明らかにする必要がある。

これらの関係は、図2のように、表すことができる。

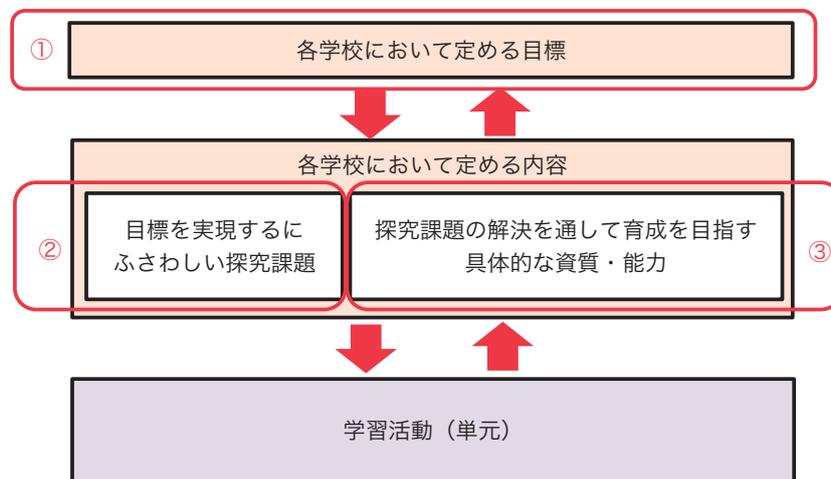


図2 全体計画の三要素と学習活動(単元)の関係

三要素のうち、「各学校において定める目標」は、学習指導要領に示された第1の目標及び各学校における教育目標を踏まえて作成するものである。一方、「②目標を実現するにふさわしい探究課題」、「③探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力」は、探究課題としてどのような対象と関わり、その探究課題の解決を通して、どのような資質・能力を育成するのかを示すものであり、両者は各学校において定める内容を構成している。②③は互いに関係していると同時に、両者がそろって初めて、各学校が定める目標の実現に向けて指導計画は適切に機能する。

3. 三要素を明確にすることの価値

総合的な学習の時間では、全体計画を作成するに当たって2に示した三つの要素がとりわけ重要である。それは、以下の理由による。

一つ目は、「探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力」とは、各学校において定める目標に記された資質・能力を各探究課題に即して具体化したものであり、生徒が各探究課題の解

決に取り組む中で、教師の適切な指導により育成を目指す資質・能力だからである。各学校において定める目標と、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力の二つにより、この時間の教育活動を通して「どんな生徒を育てたいか」を明示することになる。

二つ目は、総合的な学習の時間では、現代的な諸課題（国際理解、情報、環境、福祉・健康など）や、地域や学校の特色に応じた課題、生徒の興味・関心に基づく課題などに取り組むことが期待されているからである。これらの実社会・実生活の中から見いだされた探究課題は、これからの社会を担う生徒にとっては避けて通ることのできない課題である。こうした正解が一つに定まらない課題について、真剣に解決に向けて取り組むことこそが、これからの時代を生きる生徒に求められている。「目標を実現するにふさわしい探究課題」を明らかにすることは、実社会・実生活の中にある複雑な問題状況に向き合い、学び続ける生徒の育成につながる。

三つ目は、周囲の環境等との関係の中で、将来に向けていかに生きていくかを考えることが期待されているからである。問題の解決や探究活動では、生徒が自ら設定した学習課題や学習対象などを、自分と切り離して見たり扱ったりするのではなく、自分や自分の生活との関わりの中でとらえ、考えることになる。また、人や社会、自然を、別々の存在として認識するのではなく、それぞれがつながり合い関係し合うものとしてとらえ、認識しようとする。総合的な学習の時間では、それぞれの生徒が具体的で関係的な認識を、自ら構築していくことを期待している。こうして総合的な学習の時間では、第1の目標に示す「自己の生き方を考えていく」生徒の姿が具現されていくのである。

そのためにも、日常生活や社会との関わりを重視することが大切である。日常生活や社会との関わりを重視することは、自分とのつながりが明らかになり生徒の関心も高まりやすい。また、直接体験なども行いやすく、身体全体を使って、本気になって取り組む生徒の姿が生み出される。また、生徒にとっての学ぶ意義や目的を明確にすることが可能で、そのことが生徒の意欲的な学習の姿を生み出すことにもつながる。

このように、各学校においては、総合的な学習の時間の必要性や重要性を再確認し、三要素を定めることが求められる。

第2節 全体計画作成の進め方

1. 学校教育目標を確認する

中学校学習指導要領の第1章総則には、学校教育目標と総合的な学習の時間の目標について、以下のように規定されている。

教育課程の編成に当たっては、学校教育全体や各教科等における指導を通して育成を目指す資質・能力を踏まえつつ、各学校の教育目標を明確にするとともに、教育課程の編成についての基本的な方針が家庭や地域とも共有されるよう努めるものとする。その際、第4章総合的な学習の時間の第2の1に基づき定められる目標との関連を図るものとする。

ここに示されているように、教育課程の編成に当たっては、各学校の教育目標を明確にするとともに、総合的な学習の時間において各学校が定める目標との関連を図ることが求められている。したがって、総合的な学習の時間の目標の設定に当たっては、学校教育目標を確認し、その関連を意識することが大切である。

2. 各学校において定める目標を設定する

各学校における目標は、次のような点を基本に考えていくことができる。

(1) 目標の設定

各学校が目標を設定する際には、この時間の教育活動が創意工夫に満ちた、豊かなものになるよう第1の目標の構成に従って、以下の二点を踏まえ、独自に目標を定める必要がある。

- (1) 「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して」、「よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成すること」という、目標に示された二つの基本的な考え方を踏襲すること。
- (2) 育成を目指す資質・能力については、「育成すべき資質・能力の三つの柱」である「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」のそれぞれについて、第1の目標の趣旨を踏まえること。

(2) 目標の書き表し方の例

目標を書き表すには、上の二点を適切に反映した上で、これまで各学校が取り組んできた経験を生かして、各目標の要素のいずれかを具体化したり、重点化したり、別の要素を付加して目標を設定することが考えられる。

○ 「具体化」の例

地域の素材を扱った学習を想定している場合、「横断的・総合的な学習を行うことを通して」は、次のように「具体化」できる。

- ・自分の生活と地域の人々や事象との関わりについて探究することを通して
- ・地域の自然や社会と人々についての探究的な学習を通して など

○ 「重点化」の例

「よりよく課題を解決し」を「重点化」すると、次のようになる。

- ・仮説を立て、調査を通して得られた情報を分析し、論理的に結論を導く考え方を身に付け
- ・課題解決を目指して事象を比較したり、因果関係を推測したりして考え など

○ 「付加」の例

各学校において大切にしたいことで、この時間の趣旨や教育課程上の位置付けに照らして妥当な要素を「付加」することができる。例えば、次のようになる。

- ・地域に対する誇りと愛着を高め

- ・持続可能な社会づくりへの意識を持ち
- ・自他の思いや願いを尊重し など

目標の記述の仕方については決まった型があるわけではない。重要なことは、適切な分量の中で各学校が大切にしたいことを、分かりやすい表現で盛り込むように工夫することである。例えば、以下のような示し方が考えられる。

〔設定例〕

探究的な見方・考え方を働かせ、地域の人、もの、ことに関わる総合的な学習を通して、目的や根拠を明らかにしながら課題を解決し（重点化）、自己の生き方を考えることができるようにするために、以下の資質・能力を育成する。

- (1) 地域の人、もの、ことに関わる探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付けるとともに、地域の特徴やよさに気づき、それらが人々の努力や工夫によって支えられていることに気付く（具体化）。
- (2) 地域の人、もの、ことの中から問いを見いだし、その解決に向けて仮説を立てたり、調査して得た情報を基に考えたりする力を身に付けるとともに、考えたことを、根拠を明らかにしてまとめ・表現する力を身に付ける（重点化）。
- (3) 地域の人、もの、ことについての探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、持続可能な社会を実現するための行動の仕方を考え、自ら社会に参画しようとする態度を育てる（付加）。

3. 目標を実現するにふさわしい探究課題

(1) 目標を実現するにふさわしい探究課題とは

目標を実現するにふさわしい探究課題とは、目標の実現に向けて学校として設定した、生徒が探究的な学習に取り組む課題であり、従来「学習対象」と説明してきたものに相当する。目標を実現するにふさわしい探究課題については、学校の実態に応じて、例えば、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題、地域の人々の暮らし、伝統と文化など地域や学校の特色に応じた課題、生徒の興味・関心に基づく課題などのことであり、以下の三つの要件を兼ね備えることが求められる。

- ①探究的な見方・考え方を働かせて学習することがふさわしい課題であること
- ②その課題をめぐって展開される学習が、横断的・総合的な学習としての性格をもつこと
- ③その課題を学ぶことにより、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくことに結びついていくような資質・能力の育成が見込めること

(2) 例示された探究課題の特質

探究課題については、各学校の総合的な学習の時間の目標や、生徒、学校、地域の実態に応じて、上の三つの要件を満たす教育的に価値ある諸課題を、各学校の判断で内容として設定するものであり、①国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題（現代的な諸課題）、②地域や学校の特徴に応じた課題、③生徒の興味・関心に基づく課題、④職業や自己の将来に関する課題の四つが例示されている。

国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題とは、ここ数十年の間に社会の変化に伴って新たに生じた、またはその深刻さを増してきた、あるいは切実に意識されるようになってきた、現代社会の諸課題のことである。そのいずれもが、持続可能な社会の実現に関わる課題であり、現代社会に生きる全ての人々が、これらの課題を自分のこととして考え、よりよい解決を目指して行動することが望まれている。また、これらの課題については正解や答えが一つに定まっているものではなく、従来の各教科等の枠組みでは必ずしも適切に扱うことができない。

地域や学校の特徴に応じた課題とは、地域の伝統、文化、行事、生活習慣、経済、産業などに関わる、各地域や各学校に固有な生活上の諸課題のことである。そのいずれもが、よりよい郷土の創造に関わる課題である。地域社会に生きる全ての人々が、その地域ならではのよさに気づき、問題点を自分のこととして受け止めるとともに、日々の生活の中で自己の生き方との関わりで考え続け、よりよい解決を目指して行動することが望まれる。

生徒の興味・関心に基づく課題とは、生徒がその発達段階に応じて興味・関心を抱く課題のことである。例えば、ものづくりなどを行い楽しく豊かな生活を送ろうとすること、生命の神秘や不思議さを明らかにしたいと思うこと、などが考えられる。この課題は、生徒の課題への取組の姿勢を示唆するとともに、そのいずれもが、よりよい自己実現と深く関わっている。生徒には、これらの課題を実社会や実生活との関わりで考え、課題の解決を目指して自発的に行動することが望まれる。

職業や自己の将来に関する課題とは、義務教育の最終段階にある生徒にとって、切実かつ現実的な課題である。この課題について、具体的な体験活動や調査活動、仲間との真剣な話し合いを通して学び合う機会をもつことは、生徒が自己の生き方を具体的、現実的なものとして考えることにつながる。また、このことは、自己の将来を力強く着実に切り拓いていこうとする資質・能力の育成において、極めて重要である。したがって、こうした課題を総合的な学習の時間の探究課題として取り上げ、具体的な学習活動としていくことには大きな意義がある。

(3) 探究課題の設定

探究課題の設定に当たっては、例示された四つの課題を意識し、生徒が探究的に関わりを深める人・もの・ことなどの学習対象について具体化して示すことが考えられる。例えば、以下のようなものなどである。なお、これらは、従来「学習対象」として示されてきたものと深く関わっている。

四つの課題	探究課題の例
横断的・総合的な課題 (現代的な諸課題)	地域に暮らす外国人とその人たちが大切にしている文化や価値観 (国際理解)
	情報化の進展とそれに伴う日常生活や消費行動の変化 (情報)
	地域の自然環境とそこに起きている環境問題 (環境)
	身の回りの高齢者とその暮らしを支援する仕組みや人々 (福祉)
	毎日の健康な生活とストレスのある社会 (健康)
	自分たちの消費生活と資源やエネルギーの問題 (資源エネルギー)
	安心・安全な町づくりへの地域の取組と支援する人々 (安全)
	食をめぐる問題とそれに関わる地域の農業や生産者 (食)
科学技術の進歩と社会生活の変化 (科学技術)	
	など
地域や学校の特色に応じた課題	町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人々や組織 (町づくり)
	地域の伝統や文化とその継承に力を注ぐ人々 (伝統文化)
	商店街の再生に向けて努力する人々と地域社会 (地域経済)
	防災のための安全な町づくりとその取組 (防災)
	など
生徒の興味・関心に基づく課題	ものづくりの面白さや工夫と生活の発展 (ものづくり)
	生命現象の神秘や不思議さと、そのすばらしさ (生命)
	など
職業や自己の将来に関する課題	職業の選択と社会への貢献 (職業)
	働くことの意味や働く人の夢や願い (勤労)
	など

4. 探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力

探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力とは、各学校において定める目標に記された資質・能力を各探究課題に即して具体化したものであり、生徒が各探究課題の解決に取り組む中で、教師の適切な指導により育成を目指す資質・能力のことである。したがって、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力には、各学校の目標が実現された際に現れる望ましい生徒の成長の姿が示されることになる。各学校において定める目標と、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力の二つにより、この時間の教育活動を通して「どんな生徒を育てたいか」を明示することになる。

従前の学習指導要領では、総合的な学習の時間において「育てようとする資質や能力及び態度」として、「学習方法に関すること」、「自分自身に関すること」、「他者や社会とのかかわりに関すること」の三つの視点を参考にして例示されていた。今回の改訂では、こうした趣旨を受け継ぎつつ、資質・能力の三つの柱に沿って、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力を各学校で明示することが求められている。

(1) 知識及び技能

総合的な学習の時間では、探究的な学習の過程において、それぞれの探究課題についての事実的知識や技能が獲得される。この「知識及び技能」は、各学校が設定する探究課題に応じて異なることが考えられる。一方、事実的知識は探究の過程が繰り返され、連続していく中で、何度も活用され発揮されていくことで、構造化され生きて働く概念的な知識へと高まっていく。

「知識及び技能」に関する資質・能力については、「①概念的な知識の獲得」、「②自在に活用することが可能な技能の獲得」、「③探究的な学習のよさの理解」の三つに配慮して設定することが考えられる。

①概念的な知識の獲得

総合的な学習の時間においては、事実に関する知識に加え、各教科等の枠を超えて、知識の統合がなされていくことにより、次のような概念的な知識の獲得が想定されている。

多様性：それぞれには特徴があり、多種多様に存在している
 相互性：互いに関わりながらよさを生かしている
 有限性：物事には終わりがあり、限りがある

探究的な学習の過程により、どのような概念的な知識が獲得されるかということについては、何を探究課題として設定するか等により異なる。例えば、「地域の自然と、そこに起きている環境問題」を課題として設定した場合は、

- ・生物は、色、形、大きさなどに違いがあり、生育の環境が異なること（多様性）
- ・地域の自然において、生物はその周辺の環境と関わって生きていること（相互性）
- ・自然環境は、様々な要因で常に変化する可能性があり、一定でないこと（有限性）

などが考えられる。この例では、直接的に学習で関わる対象は「地域の自然」であるが、それを探究的に学習することを通して獲得される概念は、地域の自然だけに当てはまるものではなく、例えば広く持続可能な社会づくりに関わる様々なテーマについて考える際にも使うことができる概念的な知識ともなり得るのである。

なお、これらの他にも、以下のような概念的な知識の獲得を想定することもできる。

独自性：それぞれに違いがあり、個別のよさをもっている
 協働性：力を合わせ、目的の実現に向けて取り組む
 創造性：新しいものを創り出し、生み出していく

例えば、「町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人々や組織」を探究課題として設定した場合は、

- ・町にはそれぞれ文化や歴史があり、それを大切にして町づくりや地域活性化に取り組んでいること（独自性）
- ・町づくりや地域活性化のために、様々な立場の人々や組織が支え合い、協力し合っていること（協

働性)

- ・町づくりや地域活性化のために地域活動に参画することが、地域の新しい価値の創造につながっていること（創造性）

などが考えられる。このように、知識については、探究課題からどのような概念的な知識の獲得を目指すのかを明確に設定することが大切である。図3は、平成22年度版『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』に掲載した学習対象と学習事項を参考に再整理したものである。学習対象とは、生徒が探究的に関わりを深める人・もの・ことを示したものであり、探究課題に該当するものと考えることができる。そして、学習事項とは、個々の学習対象との関わりを通して、生徒に「どんなことを学んでほしいか」について、さらに踏み込んで分析的に示したものである。獲得する概念的知識を設定する際は、この図に示した探究課題や学習事項を参考にして検討していくとよい。

②自在に活用することが可能な技能の獲得

技能は、探究的な学習の過程が繰り返され連続していく中で、手順に関する知識を関連付けて構造化し、特定の場面や状況だけではなく日常の様々な場面や状況で活用可能な技能として身に付いていく。したがって、いつでも、滑らかに、安定して、素早く行われるような技能を獲得する生徒の姿として設定することが考えられる。例えば、

- ・地域への〇〇の呼びかけを相手や場面に応じた適切さで実施できる。
- ・収集した情報を手際よく分類し、分かりやすい方法で表すことができる。

などが考えられる。

③探究的な学習のよさの理解

総合的な学習の時間においては、①②とともに、探究的な学習のよさの理解として、資質・能力の変容を自覚すること、学習対象に対する認識が高まること、学習が生活とつながることなどを、探究的に学習してきたことと結び付けて理解することが期待されている。したがって、どのような探究的な学習のよさの理解を目指すのかを明確にして設定することが考えられる。例えば、

- ・〇〇について探究し続けてきたことによって、自らの行為が未来社会に深く関わっていることに気付く。
- ・働くことの意味を考える学習が、将来の職業選択のみならず、今後の自分自身の生き方に深く関わっていることが理解できる。

などが考えられる。

探究課題		学習事項
横断的・総合的な課題(現代的な諸課題)	地域に暮らす外国人とその人たちが大切にしている文化や価値観(国際理解)	<ul style="list-style-type: none"> 日本の伝統や文化の特徴と日本人としての自覚 世界の国々の伝統や文化の特徴 異なる文化との共生を目指す活動や取組 など
	情報化の進展とそれに伴う日常生活や消費行動の変化(情報)	<ul style="list-style-type: none"> 多様な情報手段の機能と特徴 情報環境の変化と自分たちの生活との関わり 目的に応じた主体的で責任ある情報の選択と発信 など
	地域の自然環境とそこに起きている環境問題(環境)	<ul style="list-style-type: none"> 地域の自然の存在とそのよさ 環境問題と自分たちの生活との関わり 環境の保全と持続可能な社会の創造のための取組 など
	身の回りの高齢者とその暮らしを支援する仕組みや人々(福祉)	<ul style="list-style-type: none"> 地域の高齢者とその生活 現代社会における福祉の現状と問題 福祉問題の解決やよりよい福祉を創造するための取組 など
	毎日の健康な生活とストレスのある社会(健康)	<ul style="list-style-type: none"> 社会の変化と健康の保持・増進をめぐる問題 自分たちの生活習慣と健康との関わり より健康で安全な生活を創造するための取組 など
	自分たちの消費生活と資源やエネルギーの問題(資源エネルギー)	<ul style="list-style-type: none"> 社会を支える資源・エネルギー活用とその生産の現状 資源・エネルギー問題と社会生活との関わり 省資源・省エネルギーと持続可能な社会の創造のための取組 など
	安心・安全な町づくりへの地域の取組と支援する人々(安全)	<ul style="list-style-type: none"> 地域の交通や防犯上の問題 まちの安心・安全を支える人々や組織の取組 より安心・安全な生活を創造するための取組や協働することの意義 など
	食をめぐる問題と地域の農業や生産者(食)	<ul style="list-style-type: none"> 地域の農業や生産者の現状と日本及び世界の食糧問題 食の安全や食料確保と社会生活との関わり 食をめぐる問題の解決とよりよい食生活の創造を目指した取組 など
地域や学校の特色に応じた課題	科学技術の進歩と社会生活の変化(科学技術)	<ul style="list-style-type: none"> 科学技術の進歩と生活様式や価値観の変化 科学技術の進歩と社会生活との関わり 科学技術をよりよく生活に生かし豊かな生活を創造しようとする取組 など
	町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人々や組織(町づくり)	<ul style="list-style-type: none"> 地域の人々がつながり、支え合って暮らすことの意義と難しさ 町づくりや地域活性化に取り組んでいる人々や組織とその思い 地域の一員として、町づくりや地域活性化に関わろうとする活動や取組 など
	地域の伝統や文化とその継承に力を注ぐ人々(伝統文化)	<ul style="list-style-type: none"> 地域の伝統や文化のもつ特徴 地域の伝統や文化の継承に力を注ぐ人々の思い 地域の一員として、伝統や文化を守り、受け継ごうとする活動や取組 など
	商店街の再生に向けて努力する人々と地域社会(地域経済)	<ul style="list-style-type: none"> 社会の変化と地域の商店街が抱える問題 地域経済の活性化に向けて努力する人々とその思い 地域の一員として、地域社会の再生に関わろうとする活動や取組 など
生徒の興味・関心に基づく課題	防災のための安全な町づくりとその取組(防災)	<ul style="list-style-type: none"> 災害の恐ろしさと防災意識の大切さ 地域や学校で防災に取り組む意義と安全な町づくり、学校づくり 地域や学校の一員として、災害に備えた安全な町づくり、学校づくりに関わろうとする活動や取組 など
	ものづくりの面白さや工夫と生活の発展(ものづくり)	<ul style="list-style-type: none"> ものづくりの面白さや工夫とそれを生かした生活の豊かさ ものづくりによる豊かな社会の創造と生活の発展 快適で自分らしい生活環境を生み出す取組 など
来に関や自己に関する課題	生命現象の神秘、不思議、すばらしさ(生命)	<ul style="list-style-type: none"> 生命現象の神秘や不思議、すばらしさ かけがえのない存在としての自己理解と自尊心 自他の生命の尊重を理解し守るための取組 など
	職業の選択と社会への貢献(職業)	<ul style="list-style-type: none"> 職業による自己実現と社会貢献 自分自身の夢や適性と職業の選択 自分自身の職業的将来展望を模索する取組 など
働くことの意味や働く人の夢や願い(勤労)	<ul style="list-style-type: none"> 地域で働く人の存在とその夢や願い 地域社会を支える様々な職業や機関 経済的自立と働くことの意味 など 	

図3 探究課題と学習事項の例(中学校)

(2) 思考力、判断力、表現力等

「思考力、判断力、表現力等」については、「知識及び技能」を未知の状況において活用できるものとして身に付けるようにすることが大切である。そのためにも、様々に異なる状況や複雑で答えが一つに定まらない問題に対して、「知識及び技能」を繰り返し活用・発揮することが大切になる。その過程で、問題状況の特質や情報の性質、表現する相手やその目的等によって、どの「知識及び技能」が適切であり有効であるかなどに気付いていく。そのような経験の積み重ねの中で、次第に未知の状況においても活用できるものとして、思考力、判断力、表現力等は確かに育成されていく。

「思考力、判断力、表現力等」の資質・能力については、「①課題の設定」、「②情報の収集」、「③整理・分析」、「④まとめ・表現」の探究的な学習の過程で育成されるものとして設定することが考えられる。

①課題の設定

「課題の設定」については、実社会や実生活に広がっている複雑な問題に向き合っ、自らの力で解決の方向を明らかにし、見通しをもって計画的に取り組むことができるようになることが期待される。資質・能力の設定に当たっては、例えば、

- ・複雑な問題状況の中から課題を発見し設定する
- ・解決の方法や手順を考え、確かな見通しをもって計画を立てる

などの視点で設定することが考えられる。

②情報の収集

「情報の収集」については、情報収集の手段を意図的・計画的に用いたり、解決の過程や結果を見通したりして、多様で効率的な情報収集が行われるようになることが期待される。資質・能力の設定に当たっては、例えば、

- ・情報を効率的に収集する手段を選択する
- ・必要な情報を多様な方法で収集し、種類に合わせて蓄積する

などの視点で設定することが考えられる。

③整理・分析

「整理・分析」については、収集した情報を取捨選択すること、情報の傾向を見付けること、複数の情報を組み合わせて新しい関係を見いだすことなどが期待される。資質・能力の設定に当たっては、例えば、

- ・異なる情報の共通点や相違点を見付け、関係や傾向を明らかにする
- ・事象を比較したり関連付けたりして、確かな理由や根拠をもつ

などの視点で設定することが考えられる。

④まとめ・表現

「まとめ・表現」については、整理・分析した結果や自分の考えをまとめたり他者に伝えたりすること、振り返ること対象や自分自身に対する理解が深まることなどが期待されている。資質・能力の設定に当たっては、例えば、

- ・相手や目的に応じて効果的な表現をする
- ・学習を振り返り、自己の成長を自覚し、学習や生活に生かす

などの視点で設定することが考えられる。

なお、総合的な学習の時間において育成することを目指す「思考力、判断力、表現力等」を、探究の過程の各段階で整理すると図4のようになる。

	小学校・中学校	高等学校	
① 課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> ■問題状況の中から課題を発見し、設定する ■解決の方法や手順を考え、見通しをもって計画を立てる など 	<ul style="list-style-type: none"> ■複雑な問題状況の中から適切に課題を設定する ■仮説を立て、検証方法を考え、計画を立案する など 	より複雑な問題状況 確かな見通し、仮説
② 情報の収集	<ul style="list-style-type: none"> ■情報収集の手段を選択する ■必要な情報を収集し、蓄積する など 	<ul style="list-style-type: none"> ■目的に応じて手段を選択し、情報を収集する ■必要な情報を収集し、類別して蓄積する など 	より効率的・効果的な手段 多様な方法からの選択
③ 整理・分析	<ul style="list-style-type: none"> ■問題状況における事実や関係を把握し理解する ■多様な情報にある特徴を見付ける ■課題解決を目指して事象を比較したり、関連付けたりして考える など 	<ul style="list-style-type: none"> ■複雑な問題状況における事実や関係を把握し、自分の考えをもつ ■視点を定めて多様な情報を分析する ■課題解決を目指して事象を比較したり、因果関係を推測したりして考える など 	より深い分析 確かな根拠付け
④ まとめ・表現	<ul style="list-style-type: none"> ■相手や目的に応じて、分かりやすくまとめ、表現する ■学習の進め方や仕方を振り返り、学習や生活に生かそうとする など 	<ul style="list-style-type: none"> ■相手や目的、意図に応じて論理的に表現する ■学習の仕方や進め方を振り返り、学習や生活に生かそうとする など 	より論理的で効果的な表現 内省の深まり

図4 探究の過程における思考力、判断力、表現力等とその深まり(例)

こうした「思考力、判断力、表現力等」は、この探究課題ならばこの力が育まれるといったような対応関係があるものではなく、複数の単元を通して、さらには学年や学校段階をまたいで、探究の学習の過程を繰り返すことで、時間を掛けながら徐々に育成していくものである。

このため、それぞれの過程で育成される資質・能力について、生徒の発達段階や、探究的な学習への習熟の状況、その他生徒や学校の実態に応じた設定をしていくことが重要である。

例えば、課題の設定については、学年が上がり、生徒の探究的な学習への習熟が高まるにつれて、問題状況を単純なものからより複雑なものとしたり、解決の手順等について教師があらかじめ示すことを段々と少なくし、生徒自身が見通しや仮説を立てることに比重を移したりして、質を高めていくことが考えられる。同じように、情報の収集においては、多様な方法からより効率的・効果的な手段を選択できるようにしたり、整理・分析においては、より深く分析したり、より確かな根拠付けが行われるよう質を高めていくことが考えられる。まとめ・表現については、相手や目的に応じてより分かりやすく伝わるように、より論理的で効果的な表現を工夫したり、学習を振り返る中で、より物事や自分自身に関して深い気付きとなるよう内省的な考え方が深まるようにしたりしていくことが考えられる。

(3) 学びに向かう力、人間性等

「学びに向かう力、人間性等」は、よりよい生活や社会の創造に向けて、自他を尊重すること、自ら取り組んだり異なる他者と力を合わせたりすること、社会に寄与し貢献することなどの適正かつ好ましい態度として「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」を活用・発揮しようとする事と考えることができる。その設定に当たっては、「自分自身に関すること及び他者や社会との関わりに関することの両方の視点を含む」ようにすることが求められる。一方、自分自身に関することと他者や社会との関わりに関することとは截然と区別されるものではなく、例えば社会に参画することや社会への貢献のように、それぞれは、積極的に社会参加をしようという態度を育むという意味においては他者や社会との関わりに関することであるが、探究的な活動を通して学んだことと自己理解とを結び付けながら自分の将来について夢や希望をもとうとする事は、自分自身に関することとも深く関わることであると考えられる。

重要なことは、自分自身に関することと他者や社会との関わりに関することの二つのバランスをとり、関係を意識することである。主体性と協働性とは互いに影響し合っているものであり、自己の理解なくして他者を深く理解することは難しい。これらの関係は、図5のように表すことができる。

		小学校・中学校	高等学校
自己理解・他者理解	自分自身に関すること	探究的な活動を通して、自分の生活を見直し、自分の特徴やよさを理解しようとする 	探究を通して、自己を見つめ、自分の個性や特徴に向き合おうとする 
	他者や社会との関わりに関すること	探究的な活動を通して、異なる意見や他者の考えを受け入れて尊重しようとする	探究を通して、異なる多様な意見を受け入れ尊重しようとする
主体性・協働性	自分自身に関すること	自分の意思で、目標をもって課題の解決に向けた探究に取り組もうとする 	自分の意思で真摯に課題に向き合い、解決に向けた探究に取り組もうとする 
	他者や社会との関わりに関すること	自他のよさを生かしながら協力して問題の解決に向けた探究に取り組もうとする	自他のよさを認め特徴を生かしながら、協働して解決に向けた探究に取り組もうとする
将来展望・社会参画	自分自身に関すること	探究的な活動を通して、自己の生き方を考え、夢や希望などをもとうとする 	探究を通して、自己の在り方生き方を考えながら、将来社会の理想を実現しようとする 
	他者や社会との関わりに関すること	探究的な活動を通して、進んで実社会・実生活の問題の解決に取り組もうとする	探究を通して、社会の形成者としての自覚をもって、社会に参画・貢献しようとする

図5 学びに向かう力、人間性等(例)

自分自身に関することとしては、自己理解や主体性や、将来展望などに関わる心情や態度、他者や社会との関わりに関することとしては、他者理解や協働性、社会参画などに関わる心情や態度が考えられる。

「学びに向かう力、人間性等」については、自他を尊重する「①自己理解・他者理解」、自ら取り組んだり力を合わせたりする「②主体性・協働性」、未来に向かって継続的に社会に関わろうとする「③将来展望・社会参画」について育成される資質・能力として作成することが考えられる。

①自己理解・他者理解

「自己理解・他者理解」については、例えば、

- ・自分の生活を見直し、自分の特徴やよさを理解しようとする
- ・異なる意見や他者の考えを受け入れて尊重しようとする

などの視点で設定することができる。

②主体性・協働性

「主体性・協働性」については、例えば、

- ・自分の意思で目標に向かって課題の解決に取り組もうとする
- ・自他のよさを生かしながら協力して問題の解決に取り組もうとする

などの視点で設定することができる。

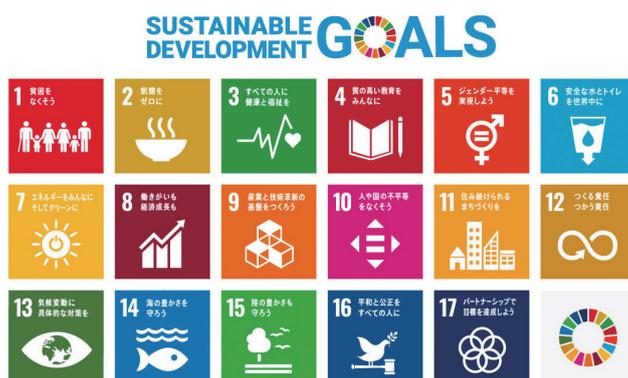
③将来展望・社会参画

「将来展望・社会参画」については、例えば、

- ・自己の生き方を考え、夢や希望などをもとうとする
- ・実社会や実生活の問題の解決に、進んで取り組もうとする

などの視点で設定することができる。

2015年9月にアメリカ合衆国・ニューヨークで実施された国連サミットにおいて、150か国以上の首脳に参加により「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択され、「持続可能な開発目標」(Sustainable Development Goals, SDGs)が掲げられた。これは、発展途上国のみならず先進国自身も取り組む2016年から2030年までの国際目標で、貧困や飢餓、エネルギー、気候変動、平和的社会など、持続可能な世界を実現するための17の目標と169のターゲットから構成されている。



SDGs全ての目標の達成に寄与する「持続可能な開発のための教育(ESD)」は、地球規模の課題を自分事として捉え、その解決に向けて自ら行動を起こす力を身に付けるための教育であり、学習指導要領においても、前文及び総則に「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げられている。SDGs達成に向けては、解決の道筋がすぐには明らかにならない課題や、唯一の正解が存在しない課題の解決に取り組む必要がある。したがって、実社会や実生活における課題を探究する総合的な学習の時間において取り組む探究課題も、SDGsの目標やターゲットに関連することが想定される。例えば、74頁で例示した探究課題のうち現代的な諸課題に区分されるものについては、図6に示すようにSDGsの目標が関連することが考えられる。なお、これらはあくまで例示であり、必ずしもここに示したSDGsの目標が関連するとは限らず、また、他のSDGsの目標が関連することも考えられる。SDGsの目標の4番目には、「教育」に関する目標が示されているが、この目標はSDGsの目標の一つとして位置付けられているだけでなく、SDGsの全ての目標の実現に寄与するものである。

総合的な学習の時間において取り組む探究課題について、SDGsの視点を踏まえて探究することにより、生徒たちは、自分たちが解決しようと取り組んでいる課題が、地域や国を超えて地球規模でつながっていることを実感することができる。

その一方で、SDGsの視点を取り入れる際には、SDGsに関する知識の習得を図る学習指導に終始することのないよう、今回の改訂により総合的な学習の時間において明確にされた、「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行う」というこの時間の特質を十分に踏まえることが必要である。

(参考)「持続可能な開発のための教育(ESD)推進の手引」

https://www.mext.go.jp/content/20210528-mxt_koktougou01-100014715_1.pdf

	探究課題	関連するSDGsの目標の例
横断的・総合的な課題(現代的な諸課題)	地域に暮らす外国人とその人たちが大切にしている文化や価値観(国際理解)	  
	情報化の進展とそれに伴う日常生活や消費行動の変化(情報)	
	地域の自然環境とそこに起きている環境問題(環境)	   
	身の回りの高齢者とその暮らしを支援する仕組みや人々(福祉)	
	毎日の健康な生活とストレスのある社会(健康)	
	自分たちの消費生活と資源やエネルギーの問題(資源エネルギー)	  
	安心・安全な町づくりへの地域の取組と支援する人々(安全)	 
	食をめぐる問題と地域の農業や生産者(食)	 
	科学技術の進歩と社会生活の変化(科学技術)	

図6 探究課題とSDGsの関連の例

第3節

全体計画の具体例

事例 ○○中学校の全体計画

(1) 学校において定める目標

各学校が総合的な学習の時間の目標を設定するに当たっては、教科等横断的なカリキュラム・マネジメントの軸となるよう、各学校における教育目標を踏まえて設定することが求められる。

この事例では、学校教育目標の実現のため「探究活動の充実」と「地域学習の充実」を重点としており、総合的な学習の時間との関連が深いことを示し、併せて第1の目標と対応させて学校において定める目標を示している。

(2) 目標を実現するにふさわしい探究課題

目標を実現するにふさわしい探究課題は、従前の学習指導要領では「学習対象」として説明されてきたものに相当する。つまり、探究課題とは、探究的に関わりを深める人・もの・ことを示したものである。

各学年の探究課題については、各学校の総合的な学習の時間の目標や、生徒、学校、地域の実態に応じて設定することが求められる。探究的に関わることができる地域の人・もの・ことを踏まえて、生徒の興味・関心や学校でこれまで大切にしてきた教育活動等を意識して探究課題を設定することが考えられる。

(3) 探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力

各学校において定める目標に記された資質・能力を各探究課題に即して、具体的に示したものである。教師の適切な指導の下、生徒が各探究課題の解決に取り組む中で、育成を目指す資質・能力を示している。(1)は知識及び技能(2)は思考力、判断力、表現力等(3)は学びに向かう力、人間性等に関わる資質・能力を指している。

(4) 学習の評価

発表やプレゼンテーションなどの表現による評価、制作物による評価、教師や友達、地域の人々からの他者評価等、多様な評価方法や評価者を適切に組み合わせることが重要である。この学校では、その他の評価方法として、総合的な学習の時間で教科等横断的な学習を展開していることを踏まえ、特別活動等で使用するキャリアパスポートを活用するよう計画している。

(5) 各教科等との関連

総合的な学習の時間では、様々な教科等で学んだ見方・考え方を総合的に活用しながら、様々な角度から捉え、考えることが求められる。社会で生きて働く資質・能力を育成する上で、教科等の学習と総合的な学習の時間を往還することが重要となる。

この計画では、学習の効果を高め、育成を目指す資質・能力を身に付けることができるようにするために、各教科等との関連を図った総合的な学習の時間を展開していくことを示している。

事例 ○○学校 総合的な学習の時間 全体計画

<p>生徒の実態</p> <ul style="list-style-type: none"> ○心身ともに健康な生徒が多い。 ○素直で、優しい生徒が多いが、自分で考え粘り強く取り組む姿勢に欠けるところがある。 ○睡眠時間や起床時刻などの生活リズムや家庭学習の習慣の定着に課題がある。 <p>保護者の願い</p> <ul style="list-style-type: none"> ○地域を大切に、将来は地域の担い手になってほしい。 ○学習習慣を確立してほしい。 ○基礎的・基本的な知識や技能を定着させてほしい。 	<p>（学校教育目標）</p> <p>地域の一員としての自覚に立ち、人権を尊重し、自立した生徒の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ○相手や目的意識をもち、様々な人と協働できる、自律的な生徒 ○広い視野をもち、持続可能な社会や地域を創造する生徒 ○目標実現のために、自分から考え判断し、行動できる、自主的な生徒 <p>総合的な学習の時間の目標</p> <p>探究的な見方・考え方を働かせ、地域の人・もの・ことに関わる総合的な学習を通して、目的や根拠を明らかにしながら課題を解決し、主体的・自律的・創造的に自己の生き方を見つけようとする態度を育てる。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付けるとともに、地域の特徴やよさに気づき、それらが人々の努力や工夫によって支えられていることを理解する。 (2) 地域の人、もの、ことの中から自ら課題を設定し、その解決に向けて必要な情報を収集したり、整理・分析したりして考える力を身に付けるとともに、考えたことの根拠を明らかにしてまとめ・表現する力を身に付ける。 (3) 地域の人、もの、ことについての探究的な学習に主体的・創造的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、持続可能な社会を実現するための行動の仕方を考え、地域の一員として社会に参画しようとする態度を育てる。 	<p>地域の実態</p> <ul style="list-style-type: none"> ○豊かな自然に囲まれている。 ○高齢化が進んでいる。 ○学校教育に対する理解があり、協力的である。 <p>地域の願い</p> <ul style="list-style-type: none"> ○地域の担い手となってほしい。 ○地域と積極的に関わり、行事等に進んで参加してほしい。 ○豊かな人間性を身に付けてほしい。
---	---	---

総合的な学習の時間の内容

学年	1年	2年	3年
テーマ	福祉	防災	町づくり
探究課題	身の回りの高齢者とその暮らしを支援する仕組みや人々	地域の防災に取り組んでいる人々や組織	町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人々や組織
知識及び技能	知識	高齢者の尊厳と自立に向けた支援に向けて、地域の様々な立場の人が支え合い、協力し合っていることを理解することができる。	町づくりや地域活性化のための取組が、地域の新しい価値の創造につながっていることを理解することができる。
	技能	日常的に気持ちのよい挨拶をしたり、わかりやすい話し方をしたりして、高齢者に適切に関わっている。	災害から身を守るために、自助、公助、共助の考え方によって相互に連携し、地域の方々と関わっている。
探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力	探究的な学習のよさの理解	高齢者への接し方など自分の意識や行動の変容は、高齢者とその暮らしについて探究的に学んだことによる成果であると気付く。	地域の方々への命を守る意識と防災の重要性への認識は、自然災害や防災と自分たちの生活との関係を探的に学んだことによる成果であると気付く。
	課題の設定	身近な地域の中から課題を見出し、解決の方法や手順を考えることができる。	自分たちを取り巻く地域に目を向けて、課題を見出し、解決の方法や手順を考え、見通しをもって計画を立てることができる。
	情報の収集	自分の目的や意図に即した情報を収集し、情報を蓄積することができる。	多様な方法で自分の目的や意図に即した情報を収集し、種類に合わせて類別して情報を蓄積することができる。
	整理・分析	収集した情報を比較したり関連付けたりして、情報と情報がどのような関係にあるか、見出すことができることができる。	収集した情報を比較したり関連付けたりして、共通点や差異点を見付けたり、確かな理由や根拠をもたたりすることができる。
	まとめ・表現	相手や目的に応じて、適切に表現したり、まとめたりすることができる。	相手や目的に応じて、他教科等で培った表現力等を活用し、適切に表現したり、まとめたりすることができる。
	自己理解・他者理解	探究活動を通して、自分自身を理解し、他者の考えを受け入れ、尊重しながら、学び合おうとする。	探究活動を通して、自分自身を理解し、異なる他者の考えや意見を受け入れ、尊重しながら、学び合おうとする。
	主体性・協働性	自分と身近な実生活・実社会の問題解決に他者と協働し、進んで取り組もうとする。	地域との関わりの中で、地域にとって必要なことと自分にできることを検討し、自分ができることを他者と協働し、実践に移そうとする。
将来展望・社会参画	地域との関わりの中で、地域にとって必要なことと自分にできることを検討し、実践に移そうとする。	地域との関わりの中で、地域にとって必要なことと自分たちにできることを検討し、自分たちにできることを他者と協働し、実践に移そうとする。	

他教科等で身に付けた資質・能力

【学習活動】	【指導方法】	【指導体制】	【学習の評価】
<ul style="list-style-type: none"> ・地域の実態、生徒の実態を踏まえ、探究課題を設定する。 ・職場体験学習と自己の進路先の選択を主軸におき、キャリア教育を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各教科等との関連を重視した指導を行う。 ・学習内容によってはSDGsを意識し、持続可能な社会について考えられるような指導の工夫をする。 ・地域の方々と直接関わるような体験活動を重視する。 ・対話やコミュニケーションを多く取り入れた学習方法を重視する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全職員による指導体制を確立する。 ・地域コーディネーターを中心に地域資源の活用や地域の人々、大学との連携・調整を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・キャリアパスポートを活用した評価の充実を図る。 ・個人内評価を重視する。 ・発表会(異学年交流も含む)を利用した評価を工夫する。 ・地域や関係機関の方々からの評価を重視する。

第3章

年間指導計画の作成

第1節 年間指導計画の基本的な考え方

1. 年間指導計画とその構成要素

年間指導計画は、各学校で作成した総合的な学習の時間の全体計画を踏まえ、学年や学級において、その年度の総合的な学習の時間の学習活動の見通しをもつために1年間の流れの中に単元を位置付けて示すものである。どの時期に、どれくらいの時間をかけて、どのように学習活動を展開するのか、また、探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力を中心に計画を立てることで、1年間にわたる具体的な生徒の学習の様子を思い描きながら構想を立てるようにしたい。

年間指導計画には特に固定的な様式はないが、総合的な学習の時間が一層豊かなものになるように、各学校が実施する教育活動の特質に応じて必要な要素を盛り込み、活用しやすい様式に工夫して表すことが大切である。その際、各学校が作成する全体計画に示された目標及び内容、目標を実現するにふさわしい探究課題、具体的な資質・能力との関連性に十分配慮することが重要である。

年間指導計画には様々な様式があるが、そこに含まれる基本的な構成要素としては、単元名、各単元における主な学習活動、活動時期、予定される時数などがある。これらの要素に加えて、単元のねらい、生徒の意識、各教科等との関連、外部講師や異校種との関連などを記す場合もある。

	単元名		主な学習活動		活動時期		予定される時数					
月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総合的な学習の時間	「放置竹林問題を解決しよう。」											
	放置竹林について知ろう (20時間) ・ 地域の人と裏の竹林を散策し、放置竹林の問題について知る。 ・ 放置竹林の原因や環境に与える影響について調べる。 ・ 放置竹林問題を解決する方法を調べる。			課題を解決する方法の有効性を考えよう。(30時間) ・ 竹を再利用した肥料(竹パウダー)を地域で作っていることを知り、その効果を調べる。 ・ 竹パウダーを広く周知するための方法を考える。			放置竹林を考える会(フォーラム)を開こう (20時間) ・ 周辺の地域で放置竹林問題についてどのような取組をしているかを調べる。 ・ 近隣校で集まってそれぞれの取組を交流する。					

図1 年間指導計画の構成要素

2. 年間指導計画における時数配当の考え方

各学年に配当された総合的な学習の時間数は、学校教育法施行規則の別表第二に示されたとおり第1学年は50単位時間を、第2・3学年はそれぞれ70単位時間を上回るように計画する必要がある。

この時数を確保した上で、各単元の実施に必要と見込まれる時間数を配分することになる。

その際、年間を通じて毎週2時間を確保して継続的に実施するものや、複数の学習活動が並行して行われるものなど、各学年や学級で実施しようとする学習活動の特質に応じて、時数を配当することになる。いずれの場合にも、当該学年の教育課程全体を視野に入れつつ、予定される学習活動を実施するために必要な時数を配当することが重要である。

3. 年間指導計画における単元配列の考え方

年間指導計画において単元を配列する際には、図2のようないくつかの考え方がある。配列する際の工夫としては、例えば、図1のように複数の小単元の間は何らかのまとまりや主題性をもつようにすることが挙げられる。それは、それぞれの小単元が活動や生徒の意識の流れにおいて一定の連続性をもち、場合によっては連なって展開されることで、活動の見通しをしっかりとって探究に取り組むことができる等、学びを深め、生徒の学習意欲を高める効果が期待できるからである。

これらの他にも様々なパターン考え方があり、それぞれに特徴が認められる。充実した総合的な学習の時間を計画するために工夫を凝らして作成することが望まれる。

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
分散型	■				■				■			
年間継続型	■				■				■			
並列型	■				■				■			
複合型	■ (学級)				■ (学年)				■ (学級)			

図2 単元配列の考え方の例

①分散型

総合的な学習の時間の単元を学期ごとなどいくつかの期間に分けて配列するものである。このとき、単元ごとに取り扱われる探究課題が異なる場合が多い。

②年間継続型

1年間を通じて同じ探究課題で継続的に取り組むものである。ただし、年間を通じて取り組む場合でも、活動には自ずと一定のまとまりがあり、まとまりごとにいくつかの単元に分かれることもあることに留意したい。

③並列型

同じ時期に複数の単元に並行して取り組むものである。この場合、二つの単元の間で探究課題が関連性をもつ場合と相互に独立している場合がある。

④複合型

学年単位の活動と学級単位の活動など、異なる学習形態や学習集団などを組み合わせて取り組むものである。

なお、どの型においても、季節や地域の行事などを中核にしてある期間に集中的に取り組む場合も考えられる。その期間は、総合的な学習の時間を中心として学校生活が組織される場合もある。

[学習活動を具体的に示した年間指導計画事例]

①分散型

図3は、学期ごとに三つの異なる単元を実施する第1学年の年間指導計画であり、単元名、単元目標、主な学習活動、学習時期、予定時数、生徒の意識の流れが記載されている。一学期は地域、二学期は国際理解、三学期は防災に関する探究課題を扱うものである。

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総合的な学習の時間	<p>伝統的な菓子文化を伝えよう。(20時間) 【ねらい】 日本遺産であるシュガーロードと地域の菓子文化のつながりを探る活動を通して、地域文化のよさを理解し、地域のためにできることを考え、発信できるようにする。 【第1次】 ・地元のお菓子和シュガーロードの関わりについて調べる。 ●●饅頭が誕生したのは、江戸時代に長崎から伝わった砂糖文化が影響しているなあ。 【第2次】 地元の菓子づくりを体験しよう。 ・地元で伝わるお菓子づくりを体験し、その歴史について知る。 ●●饅頭は、現代人の趣向に合わせているから今もお土産として人気なのだ。しかし、洋菓子文化に押され生産数が減っているぞ。 【第3次】 ・日本遺産に認定された地元の伝統的な菓子文化をPRする。 たくさんの人々に地元の伝統的なお菓子を紹介することができた。自分も地域のこれからの担い手として文化を継承していきたい。</p>				<p>互いの文化を伝え合おう。(20時間) 【ねらい】 地域に住む留学生との交流を通して、自他の文化の違いやそれぞれの文化よさに気づき、それぞれの文化のよさを積極的に発信できるようにする。 【第1次】 ・地域に住む海外からの留学生と交流する。 ○○国は日本と同じ米文化だけど味付けや宗教上の理由で食べられない食材もあるなあ。 【第2次】 ・様々な国の文化について調べる。 様々な国の文化を知ること、その国の人々の考え方も知ることができたよ。 【第3次】 ・地域の方や留学生を招いて、互いの文化を紹介しあう、国際交流会を企画、運営する。 地域の人にもこの学びを発信することができた。日本の文化のよさも伝えることができたよ。これからも地域にすむ海外の人たちと互いを理解し合い、仲良くしていきたいな。</p>				<p>災害から命を守る取組をしよう。(10時間) 【ねらい】 災害から命を守る方法を考える活動を通して、地域にはどのような災害リスクがあるのかを知り、地域の一員として命を守るための行動を考えることができるようになる。 【第1次】 ・防災マップから、自分たちの地域の課題を知る。 ハザードマップで調べると、○○川流域は洪水で最大3mも浸水するのだなあ。小学校の昔調べで以前この地域が○m水没したという話を聞いたことがあるぞ。 【第2次】 ・地域を調査し、防災パンフレットにまとめるとともに、災害になった時、自分たち中学生が何ができるのかを調べまとめる。 まず、自分たちの命を守る行動を早め早めに取りたい。そして、避難所などでは積極的に地域の方のために働きたいな。</p>			

図3 学期ごとに異なる探究課題に基づく単元を実施する年間指導計画の例(第1学年)

②年間継続型

図4は、「働くとはどういうことか」をテーマに、1年間継続して実施する第2学年の年間指導計画である。

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総合的な学習の時間	単元名 「働くとは？」											
	1 働くことについて、体験したり、先輩の話を聞いたりして調べてみよう。(30時間) ○10年後の自分を想起し、働くことの意義を考える。 ○先輩の話を聞いたり、職場体験活動を行ったりして具体的なイメージをもつ。				2 分かったことや追究したいことについて調べ考える。(30時間) ○働くとはどういうことか、職場体験や先輩の話を基に、自分自身で課題を設定してレポートにまとめる。				3 未来予想図を作成しよう。(15時間) ○これまでの学習を基に、働くことや社会貢献の意義について考えたことをまとめる。 ○振り返りとして、未来予想図を作成する。			

図4 年間を通して一つの探究課題で単元を実施する年間指導計画の例(第2学年)

③並列型

図5は、年間を通して一つの単元を並列して実施する第1学年の年間指導計画であり、上段は福祉、下段は平和に関する探究課題に基づく単元である。

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総合的な学習の時間	やさしさのあるまちづくり											
	1 私たちの町はすみよい町？ (10時間) ○高齢者疑似体験等を行う。 ○誰にとってもやさしい町かを調査しよう。 ○調べて分かったことをまとめよう。				2 誰にとってもやさしいまちづくりについて考えたことを発表しよう。(10時間) ○意見文にまとめる。 ○意見文として町づくり推進課に提言する。 ○町づくり推進課の人の話を聞く。				3 学習をふりかえろう。(5時間) ○やさしいまちづくりのために、自分自身ができることは何か、今後の学習に生かしたいことは何かをまとめる。			
	つなげよう平和のバトン											
	1 かよこ桜について調べよう。(10時間) ○校庭のかよこ桜が植樹された経緯を調べる。 ○平和資料館や地域の戦争の歴史を調べる。				2 ●●中平和シンポジウムを開こう。(10時間) ○日本や世界の平和に向けた取組について調べる。 ○世界の平和に向けた●●中シンポジウムを開催する。				3 ●●中平和宣言を作成しよう。(5時間) ○これまでの学習を振り返り、平和に向けて私たちに何ができるかを平和宣言にまとめる。			

図5 並列して2つの単元を実施する年間指導計画の例(第1学年)

④複合型

図6は、単元によって、学年や学級など、活動を展開する学習集団や学習形態が異なる年間指導計画である。上段が学年全体で取り組む単元、下段は学級ごとに取り組む単元である。

この他にも、各学年で取り組んできたことを基にして、異学年で一緒に課題の解決に取り組む単元なども考えられる。

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
総合的な学習の時間	学年テーマ	「めざせ！地域のSDGs達成」(38時間) 学年全体で地域のSDGsに関わる個人課題を立て、課題解決の学習を行う。9月に全校発表会を行い、成果を地域や関係機関、全校生徒に向けて発表する。											
	学級テーマ							「地域防災の取組を提案しよう」(32時間) ・学区内の地震災害を最小限に食い止めるための取組を考える。 ・高齢者の命を守るための防災計画を行政に提案する。					

図6 複合型の年間指導計画の例(第3学年)

第2節 年間指導計画作成上の留意点と具体例

年間指導計画は、学年の始まる4月から翌年3月までの1年間における生徒の学びの変容を想定し、時間の流れに沿って具体的な学習活動を構想し、単元を配列したものである。年間指導計画における単元の配列には、1年間を通して一つの単元を行う場合や、複数の単元を行う場合などがある。いずれにおいても、学習活動や生徒の意識が、連続し発展するように配列することが大切である。

特に、今回の学習指導要領の改訂により、第4章第3の1の(1)において、「年間や、単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、生徒や学校、地域の実態等に応じて、生徒が探究的な見方・考え方を働かせ、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習や生徒の興味・関心等に基づく学習を行うなど創意工夫を生かした教育活動の充実を図ること。」とされたことを踏まえることが重要である。ここで各教科等と異なり、単元の見通しだけでなく年間という視点が入れているのは、他の教科等との関連を意識して主体的・対話的で深い学びの実現を図るためには、年間を見通すということが大変重要であるという、総合的な学習の時間の特質を踏まえたものである。

年間指導計画に記載される主たる要素としては、単元名、各単元における主な学習活動、活動時期、予定時数などが考えられる。さらに、各学校が実施する教育活動の特質に応じて必要な要素を盛り込み、活用しやすい様式に工夫することが考えられる。例えば、他の教科等や他学年との関連を示す表を作成し、共有することにより、全校体制でこの時間の学習活動を適切に行うための共通理解を図り、連携を図ることができる。

1年間の学習活動の展開を構想する際には、地域や学校の特色に加えて、各学校において積み重ねてきた実践を振り返り、その成果を生かすことで、事前に準備を進めることができる。これまでの活動について、実施時期は適切であったか、時数の配当に過不足はないか、などについて、育成を目指す資質・能力を中心に、生徒の学習状況等を適切に把握しながら必要に応じて計画の見直しを行うことが考えられる。

以下に示す四つの留意点を踏まえつつ、年間の学習活動のイメージをつくることのできる簡潔な年間指導計画を作成したい。

1. 生徒の学習経験に配慮すること

年間指導計画を作成するに当たっては、当該学年までの生徒の学習経験やその経験から得られた成果について事前に把握し、その経験や成果を生かしながら年間指導計画を立てる必要がある。中学校において、総合的な学習の時間に取り組む場合は、小学校における学習経験について把握するとともに、これから行う総合的な学習の時間の学習活動の関連性についてもあらかじめ確認しておくことが大切である。

事例 学習の履歴を明らかにする

図7は、同一の学年、すなわち同一の生徒についての学びの履歴を表したものである。当該学年以前の学習経験を把握するために、学びの履歴を年間指導計画に加えることは、それまでの経験や成果を無駄なく生かすという点で有効である。

また、小学校における学習活動とその成果を把握するという観点でいえば、学びの履歴の中に、「小学校の総合的な学習の時間で訪れた場所」、「小学校の総合的な学習の時間で関わった人」等について記載することも考えられる。

このような年間指導計画は、校内における共通理解のために有益であるだけでなく、保護者や地域の講師、あるいは進学先の高等学校など、外部の関係者に対する情報提供の資料としても活用できる。

学年/月	4月	5月	6月	7月	8・9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
○年度 3年 (70時間)	○○のくらし													
	「とっておきの ふるさと○○」(45時間) ○●●の田畑で作っている 稲・大豆の栽培				○稲・大豆の収穫		○ふるさと●●の ほかほかパーティ		「みんなにやさしいふるさと○○」(25時間) ○人にやさしい町探検					
○年度 4年 (70時間)	○○の伝統													
	「めざせ、●●の達人」(25時間) ○パート1 ゆげゆげカイク調査隊 ～カイクの飼育に挑戦しよう			「●●の達人に学ぼう」(25時間) ○パート2 達人に弟子入り大作戦 ～●●の伝統工芸を学ぼう～			「達人に学んだことをまとめよう」(20時間) ○パート3 緑山の達人バンフづくり ～達人を地域で紹介しよう							
○年度 5年 (70時間)	○○の環境													
	「調べよう ●●のため池」(25時間) ○生き物調査 ○水質調査 ○ため池の役割			「●●の自然を守っていこう」(45時間) ○ゲンゴロウの成長記録を デジタル紙芝居にまとめる								○全国のゲンゴロウの 情報を集める		○●●のため池フォーラムを 開こう
○年度 6年 (70時間)	○○の歴史													
	「ふるさとロマン ●●の里」(45時間) ○校区の古墳調査				○●●の古代(衣食住)を 再現		○●●古代サミットを 開こう		「よりよい生き方を求めて」(25時間) ○たくさんの学校の先輩に話を聞こう					
○年度 1年 (50時間)	地域の自然や文化について知ろう													
	地域の自慢の米を育てよう (20) ○休耕地を借り、稲を栽培し、収穫する。			育てた米で感謝祭をしよう (15) ○収穫した米を使って、伝統料理を作 り、地域の人にふるまう。			伝統文化を受け継ごう (15) ○ゲストティーチャーから地 域の○○舞を習う							
○年度 2年 (70時間)	地域に学ぼう													
	地域の産業を調べよう (25) ○地域の農業、工業、産業、商業のうち、関心 のあるものを調べる。			地域の職場で働く体験を通して、地域の 食や特産物をつくろう (30) ○職場体験を行い、地域の特産物や産業を体 験する。				地域の産業の魅力を発信しよう (15) ○体験や調べ学習を通して学んだこ とを新聞で発信する。						
○年度 3年 (70時間)	地域に貢献しよう													
	地域の課題を調べよう (25) ○これまでの学習や地域の方との 交流から課題を設定する。		作った米を販売するプロジェクトを立ち上げよう (30) ○●●中特産米販売会を立ち上げ、作った米を販売するプロ ジェクトを立ち上げる。 ○販売戦略部、広報部などの部門ごとに販売に携わる。					活動を振り返り、学びを深 めよう (15) ○学習を振り返り、地域に生 きる自分について考える。						

図7 7年間の学びの履歴を記録した資料の例

2. 季節や行事など適切な活動時期を生かすこと

年間指導計画の作成においては、季節の変化や1年間の行事の流れを生かすことが重要である。季節の変化、地域や校内で開催される行事等について、時期と内容の両面から、総合的な学習の時間の展開に生かしたり関連付けたりすることができるのかを、あらかじめ検討することが大切である。

地域の伝統行事や季節に応じた生産活動、歴史的・国際的な記念日など、学習活動が特定の時期に集中することで効果が高まったり、適切な時期を逃してしまうことで効果が薄くなったりすることがあるため、例えば、地域の伝統行事が開催される日程やそれに関わる関係者の準備等の活動の展開を把握しておくことで、生徒が行事等を参観したりするだけでなく、行事の準備をする地域の人々に話を聞いたり、準備に関わることで行事の背景や地域の人々の思いや願いについて直接触れたり、感じたりすることができるようになる。また、その準備や行事に参加するなどの学習活動を設定するといったことができる。生徒が主体的に行事に参加できたり、地域や行事と自分たちとの関わりを知ったりすることで参加への意欲や学習の質を高めることができる。

歴史的な記念日や国際的な記念日をきっかけに、問題の解決や探究活動を展開する際にも、同様の事が考えられる。例えば、世界環境デーや国際平和デーなどの国際デーは、国際連合などの国際機関によって定められた記念日であり、毎年決められた日や週などに特定の問題に関して関心を高めたり、問題の解決を呼びかけたりしている。国際デーが近づくや報道などでその内容が紹介されることも多い。このような機会を捉えて、新聞やテレビなどから得られた資料を紹介するなどして生徒の関心を呼び起こし、地域で行われる活動に生徒が参画したり、教室に招いて専門家の話を聞いたりするなどの学習活動が考えられる。社会的な関心の高まりを生かした学習活動を行うことによって、生徒の学習は一層深まるものと考えられる。

これらを踏まえ、例えば、歴史的な記念日や国際的な記念日、地域における特徴的な行事に関する情報をまとめた資料を用意しておくことが考えられる。さらに、このような資料を職員室に掲示する等、情報を常に確認できるようにしたり、職員間で共有したりしておくことで、適切な活動時期を捉えた効果的な学習活動へとつなげることができる。

3. 各教科等の関連を明らかにすること

年間指導計画の作成に当たっては、各教科等との関連的な指導を行うことが求められている。また、関連的な指導は、各教科、道徳科、総合的な学習の時間及び特別活動の全てにおいて大切にしているが、横断的・総合的な学習を行う観点から、総合的な学習の時間において最も数多く、幅広く行われることが想定される。こうした特性を踏まえて、中学校学習指導要領第4章第3の1の(3)に各教科等との関連付けを明記し、この時間において特に重視している。

具体的には、各教科等で身に付けた資質・能力を十分に把握し、組織し直し、改めて現実の生活に関わる学習において活用することが期待される。そうした資質・能力を適切に活用することが、総合的な学習の時間における探究的な学習活動を充実させることにつながる。

例えば、社会科の資料活用の方法を生かして情報を収集したり、数学科の統計の手法でデータを整

理したり、国語科で学習した文章の書き方を生かして分かりやすいレポートを作成したりすることなどが考えられる。また、理科で学んだ生物と環境の学習を生かして、地域に生息する生き物の生態系を考えることなども考えられる。このように各教科等で学んだことを総合的な学習の時間に生かすことで、生徒の学習は一層の深まりと広がりを見せる。

総合的な学習の時間で行われた学習活動によって、各教科等での学習のきっかけが生まれ意欲的に学習を進めるようになったり、各教科等で学習していることの意味やよさが実感されるようになったりすることも考えられる。例えば、総合的な学習の時間で行った体験活動を生かして国語科の時間に案内状や御礼状を書くなど、総合的な学習の時間での体験活動が各教科等における学習の素材となることも考えられる。また、総合的な学習の時間で食や健康に関心をもった生徒は、技術・家庭科（家庭分野）における栄養を考えた食事や快適な住まい方の学習に前向きに取り組む姿が想像できる。また、保健体育科における学習でも総合的な学習の時間で福祉・健康について学んだことの成果を生かして、学習に深まりと広がりを生み出すことが期待できる。

事例 各教科等を網羅する

図8は、学年の各教科等の全ての単元を一覧表の形にした年間指導計画（単元配列表）である。この表を作成することにより、学年の全教育活動を視野に入れることができる。このような年間指導計画を作成する際には、機械的に単元名や学習活動を書き込むだけでなく、育成を目指す資質・能力を把握し、それらが相互に関連することが示されることによって、それぞれの学習活動は一層充実し、結果として各教科・単元における資質・能力の育成に有益なものとなる。

年間指導計画（第3学年）								
	4月	5月	6月	7月・8月	9月	10月	11月	12月
総合的な学習の時間（70）	日々の暮らしを支えるエネルギー問題について考えよう（25時間） ○ 日々の暮らしを支える電力の発電方法について調べる。 ○ 様々な発電方法のメリット・デメリットについて調べる。				エネルギー問題の解決に向け、自分たちができる取組について考えよう。（30時間） ○ エネルギー問題を解決するために、自分たちにできる事を考え、実行する。			
国語（105）	評価し、聞く	論語漢文	説得力のある構成を考える 実用的な文章	伝わる表現 和語、外来語、漢語	推薦論考を考察する 説得力のある批評文を書く 合意形成にむけて話し合う	奥の細道 古典	情報を読み取って文章を書く	
社会（140）	近代日本と世界	現代の日本と世界	私達の暮らしと現代社会 個人を尊重する日本国憲法	私達の暮らしと民主政治	私達の暮らしと経済	安心して暮らせる社会		
数学（140）	式の展開と因数分解	平方根	二次方程式	関数	図形と相似	円の性質		
理科（140）	運動とエネルギー		生命の連続性		化学変化とイオン	地球と宇宙	科学技術と人間 自然と人間	
外国語（140）	受け取りの文	ディスカッションをしよう。	現在完了 現在完了進行形	現在と過去の相違点を上げよう	関係代名詞	世界のちがいを私たちが	自分の意見を伝えよう。	
美術（35）	わかりやすく情報を伝える		環境と共に生き彫刻 ゲルニカ明日への願い		環境と共に生き彫刻 ゲルニカ明日への願い		地域の魅力を伝える	
保健体育（105）	からだ作り運動	選択1 器械運動、陸上競技	ダンス	選択2 水泳	選択3 球技 武道			

図8 各教科等を網羅的に示す年間指導計画の例（第3学年）

事例 関連教科等を重点的に示す

図9は、関連させる単元のみを抜粋して記入し、各教科等との関連を重点的に示すものである。単元名に加え、関連的な指導を通して育成したい資質・能力を明記することで、それぞれの単元において、「習得」と「活用」を意識した学習活動の展開につなぐことができる。

総合的な学習の時間		各教科等の単元名と関連が考えられる資質・能力の例
4月	●●町の課題について調べよう。(30時間)	国語科 スピーチで社会に思いを届ける 目的や意図に応じて、社会生活の中から題材を決め、集めた材料の客観性や信頼性を確認し、伝えたいことを明確にすること。(思考力, 判断力, 表現力等)
5月		社会科 地方自治 地方自治の基本的な考え方について理解すること。その際、地方公共団体の政治の仕組み、住民の権利や義務について理解すること。(思考力, 判断力, 表現力等)
6月		
7月		
(8月)		●●町の活性化を図るために、自分たちにできることに取組もう。(30時間)
9月	社会科 地方自治 民主政治の推進と、公正な世論の形成や選挙など国民の政治参加との関連について多面的・多角的に考察、構想し、表現すること。(思考力, 判断力, 表現力等)	
10月	数学科 標本調査とデータの活用 標本調査について、数学的活動を通して、コンピュータなどの情報手段を用いるなどして無作為に標本を取り出し、整理すること。(知識及び技能)	
11月	美術科 地域の魅力を伝える 多くの人に自分が住む地域の魅力を伝えるために、その地域の特色などから主題を生み出し、形や材料、伝達の効果と美しさなどとの調和を総合的に考え表現すること。(思考力, 判断力, 表現力等)	
12月	技術・家庭科 デジタル作品の設計と制作 問題を見いだして課題を設定し、使用するメディアを複合する方法とその効果的な利用方法等を構想して情報処理の手順を具体化するとともに、制作の過程や結果の評価、改善及び修正について考えること。(思考力, 判断力, 表現力)	
1月	取組を振り返り、地域の活性化について自己の考えをまとめ、今後の関わり方について考えよう。(10時間)	社会科 地方自治 私たちがよりよい社会を築いていくために解決すべき課題を多面的・多角的に考察、構想し、自分の考えを説明、論述すること。(思考力, 判断力, 表現力等)
2月		道徳科 郷土愛 郷土の伝統と文化を大切にし、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め、地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、進んで郷土の発展に努めること。
3月		

図9 関連する各教科等を重点的に記載する年間指導計画の例(第3学年)

4. 外部の教育資源の活用及び異校種の連携や交流を意識すること

総合的な学習の時間を効果的に実践するには、保護者や地域の人、専門家などの多様な人々の協力、社会教育施設や社会教育団体等の施設・設備など、様々な教育資源を活用することが大切である。このことは、中学校学習指導要領第4章第3の2の(7)にある通りである。年間指導計画の中に生徒の学習活動を支援してくれる団体や個人を想定し、学習活動の深まり具合に合わせていつでも連携・協力を求められるよう日頃から関係づくりをしておくことが望まれる。学校外の教育資源の活用は、この時間の学習活動を一層充実したものにしてくれるからである。

また、総合的な学習の時間の年間指導計画の中に、小学校や高等学校、特別支援学校との連携や、児童・生徒等が直接的な交流を行う単元を構成することも考えられる。

異校種との連携や交流活動を行う際には、生徒にとって交流を行う必要感や必然性があること、交流を行う相手にも教育的な価値のある互恵的な関係であることなどに十分配慮しなければならない。教師が互いに目的をもって計画的・組織的に進めることが大切である。

なお、学校外の多様な人々の協力を得たり、異校種との連携や交流活動を位置付けたりして学習活動を充実させるには、綿密な打合せを行うことが不可欠である。そのための適切な時間や機会の確保は、充実した学習活動を実施する上で配慮すべき事項である。

外部の教育資源として、ウェブサイトを活用することも考えられる。参考になるウェブサイト及びリンクを掲載する。



- ・子供の学び応援サイト（文部科学省）
： https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/gakusyushien/index_00001.htm
- ・学校と地域でつくる学びの未来（文部科学省）
： <https://manabi-mirai.mext.go.jp/>
- ・協力企業と連携した総合的な学習の時間「みらプロ」（文部科学省・総務省・経済産業省）
： <https://mirapro.miraino-manabi.jp/>
- ・STEAMライブラリー（経済産業省）
： <https://www.steam-library.go.jp/>
- ・NHK for School「ドスルコスル」（NHK）
： <https://www.nhk.or.jp/school/sougou/dosurukosuru/>
- ・地域経済分析システムRESAS（内閣府・経済産業省）
： <https://resas.go.jp/>

■年間指導計画作成の視点と留意事項

下表は、先に述べた年間指導計画作成上の留意点を踏まえ、実際に年間指導計画を作成するための視点とそれぞれの留意事項の例を示したものである。

表 年間指導計画作成の視点と留意事項の例

	視点	年間指導計画作成の留意事項
Ⅰ. 素案の作成	学校の全体計画と関連付けて単元を配列した素案の作成	<input type="checkbox"/> 学習指導要領で総合的な学習の時間の「第1の目標」、「学校の教育目標」を確認している <input type="checkbox"/> 実施しようとする単元展開と自校の「目標及び内容」との間に整合性があるか確認している <input type="checkbox"/> 実際に年間の指導計画の中に単元の予定を入れ込み、年間指導計画を作成している <input type="checkbox"/> 学年・学級の経営方針との関連を図っている
Ⅱ. 素案の吟味・修正・改善	生徒の意識の流れの把握	<input type="checkbox"/> 生徒の過去の学習経験について把握している <input type="checkbox"/> 生徒の意識の実態に照らして、一年間の意識の流れに無理がないか確認している
	単元配列の検討	<input type="checkbox"/> 年間を通して学ぶことが期待される内容が当該学年の生徒にふさわしいか確認している <input type="checkbox"/> 年間を通しての資質・能力の育成が無理なく確実に進むように配列されているか確認している <input type="checkbox"/> 単元の実施が適切な時期に配列されているか確認している
	各教科等及び学年間の関連	<input type="checkbox"/> 各教科等の年間計画を把握し、関連について確認している <input type="checkbox"/> 他の学年を見通し、当該学年として学習活動の水準が適切か、下学年と比べて学習活動に質的な高まりや積み上げがあるか確認している
	地域素材の教材化及び外部資源の活用	<input type="checkbox"/> 地域の素材を捉え、実地調査している <input type="checkbox"/> 地域の行事等について、日程と内容の両面から関連を確認している <input type="checkbox"/> 地域の外部資源が適切に活用されているか確認している <input type="checkbox"/> 異校種との交流や連携が無理なく位置付いているか確認している
Ⅲ. 管理と運用	授業時数の管理と運用	<input type="checkbox"/> 探究活動を行うために必要な時数が確保されているか確認している <input type="checkbox"/> 単元の途中では、実施した授業時数を確認し、教育課程上の授業時数が確保されているか確認している
	年間指導計画の弾力的運用	<input type="checkbox"/> 単元の途中では、生徒の興味・関心や問題意識が追究課題や学習課題とずれていないか確認し、「ずれ」が生じた場合には、年間指導計画に変更や修正を加えている

第4章 単元計画の作成

第1節 単元計画の基本的な考え方

単元とは、課題の解決や探究的な学習活動が発展的に繰り返される一連の学習活動のまとまりという意味である。単元計画の作成とは、教師が意図やねらいをもって、このまとまりを適切に生み出そうとする作業に他ならない。単元づくりは、教師の自律的で創造的な営みである。学校として、既に十分な実践経験が蓄積され、例年実施する価値のある単元計画が存在する場合においても、目の前の生徒の実態に即した単元へと改善するために、単元を構想し、計画を練り直すことが必要である。

単元計画の作成は、大きく次の二つに分けることができる。まず、単元を構想する。次に、単元の計画を具体的に書き表す。実際には、必ずしも単元構想から計画へと移るのではなく、二つの作業を行きつ戻りつすることを繰り返しつつ、よりよい単元計画を作成していくことが大切である。

1. 単元計画作成の手順

単元計画の作成に当たっては、図1「単元計画作成の手順チャート」に沿って、以下の①から⑦の手順が考えられる。

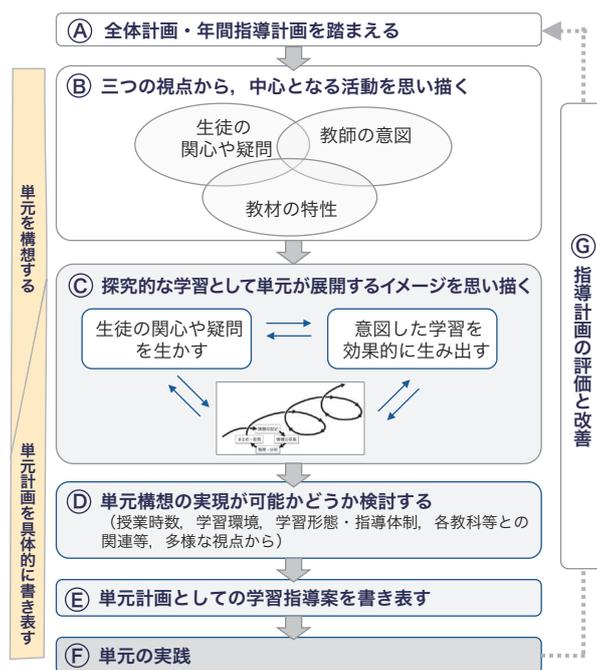


図1 単元計画作成の手順チャート

④全体計画・年間指導計画を踏まえる

単元計画を作成するに当たっては、その前提として、学校の全体計画・年間指導計画を踏まえる必要がある。

⑤三つの視点から、中心となる活動を思い描く

単元計画作成の出発点として、「生徒の関心や疑問」「教師の意図」「教材の特性」の三つの視点が考えられる。どの視点から構想を始めてもよいが、他の二つの視点についても、十分に考えを巡らせて構想することが大切である。

①生徒の関心や疑問

生徒にとって、切実な関心や疑問を出発点とすることで、生徒の主体的な活動が期待できる。

②教師の意図

教師の意図を出発点とすることで、探究課題を通してどのようなことを学ばせたいのか、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力を明確にした単元構想が可能となる。

③教材の特性

教材（学習材）とは、生徒の学習を動機付け、方向付け、支える学習の素材のことである。教材の特性を出発点とすることで、どのような課題の解決や探究的な学習活動を行うことができるのか、明確に見通すことができる。その際、横断的・総合的な学習になるように意識していくことが求められる。

⑥探究的な学習として単元が展開するイメージを思い描く

⑤で思い描いた中心的な活動を、生徒主体の価値ある探究的な学習にするためには、次の二つのポイントがある。

①生徒による主体的で粘り強い課題の解決や探究活動を生み出すには、生徒の関心や疑問を重視し、適切に取り扱うこと。

②課題の解決や探究的な学習活動の展開において、教師が意図した学習を効果的に生み出していくこと。

生徒が主体的に進める展開においては、教師が意図した内容を生徒が自ら学んでいくように、単元を構想する点に難しさがある。そこでまず、その関心や疑問から、生徒はどのような活動を求め、展開していこうかと考える。そして、活動の展開において出会う様々な問題場面と、その解決を目指して生徒が行う課題の解決や探究活動の様相、さらにそれぞれの学習活動を通して生徒が学ぶであろう事項について、考えられる可能性をできるだけ多面的、網羅的に予測する。もちろんその際には、各学校において定めた内容との照らし合わせを行う。

㊦単元構想の実現が可能かどうか検討する

まず、単元を構成する諸活動を考えた後、各活動が生徒の意識や活動の自然な流れに沿って展開できるかを検討する。流れに不自然さや無理がある場合には、順番を入れ替えたり、活動の間に別の活動を挟んだり省略したりすることで、単元構想を実現する可能性をより高めることができる。さらに、各活動の授業時数、学習環境、学習形態、指導体制、各教科等との関連等の多様な視点から、単元構想が実際に実現可能かどうかを吟味する。

㊧単元計画としての学習指導案を書き表す

単元の計画を具体的に表現するには、以下のような構成要素が考えられる。

○単元名	○教師の願い
○単元目標	○地域や学校の特色
○生徒の実態	○社会の要請
○目標を実現するにふさわしい探究課題	○学校研究課題との関連
○単元において育成を目指す資質・能力	○各教科等との関連
○教材	○単元の評価規準
○指導計画・評価計画	など

㊨単元の実践

どれだけ丁寧に単元づくりを行っても、生徒の活動は教師の想定通りにはならない場合もある。生徒の動きに応じて計画を柔軟に修正しつつ、学びを生み出そうとする、教師の構えが重要である。

㊩指導計画の評価と改善

単元の実践を振り返り、単元計画を見直すとともに、次年度の全体計画や年間指導計画の改善に役立てる。

2. 単元計画としての学習指導案

単元計画としての学習指導案を書き表す上での基本的なイメージは、次の図のようになる。ここでは、⑤に示した単元計画の構成要素に基づき、作成している。なお、単元計画作成の具体的手順や、その具体例については、第2節で述べる。

令和〇〇年度 〇〇中学校 総合的な学習の時間 〇年〇組 学習指導案 (例)											
<p>1 単元名</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>総合的な学習の時間において、どのような横断的・総合的な学習や探究的な学習が展開されるかを一言で端的に表現したものが単元名である。総合的な学習の時間の単元名については、①生徒の学習の姿が具体的にイメージできる単元名にすること、②学習の高まりや目的が示唆できるようにすることに配慮することが大切である。</p> </div>											
<p>2 単元目標</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>どのような学習活動を通して、生徒にどのような資質・能力を育成することを目指すのかを明確に示したものが単元目標である。各学校が定める目標や内容を視野に入れ、中核となる学習活動を基に構成することが考えられる。なお、目標の表記については、一文で示す場合、箇条書きにする場合などが考えられる。</p> </div>											
<p>3 単元設定の理由</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>なぜこの単元を設定したかについて、様々な要素からその設定理由を述べる。要素としては、①生徒の実態、②育成を目指す資質・能力、③教材、④教師の願い、⑤地域や学校の特色、⑥社会の要請、⑦学校研究課題との関連、⑧各教科等との関連等が挙げられる。</p> </div>											
<p>4 単元の評価規準</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 15%;">評価の観点</th> <th style="width: 30%;">知識・技能</th> <th style="width: 30%;">思考・判断・表現</th> <th style="width: 25%;">主体的に学習に取り組む態度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="text-align: center; vertical-align: middle;">評価規準</td> <td style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>①概念的な知識の獲得 ②自在に活用することが可能な技能の獲得 ③探究的な学習のよさの理解 の三つに関して作成することが考えられる。</p> </td> <td style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>①課題の設定 ②情報の収集 ③整理・分析 ④まとめ・表現 の各過程で育成される資質・能力を生徒の姿として作成することが考えられる。</p> </td> <td style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>①自己理解・他者理解 ②主体性・協働性 ③将来展望・社会参画 などについて育成される資質・能力を生徒の姿として作成することが考えられる。</p> </td> </tr> </tbody> </table>				評価の観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	評価規準	<p>①概念的な知識の獲得 ②自在に活用することが可能な技能の獲得 ③探究的な学習のよさの理解 の三つに関して作成することが考えられる。</p>	<p>①課題の設定 ②情報の収集 ③整理・分析 ④まとめ・表現 の各過程で育成される資質・能力を生徒の姿として作成することが考えられる。</p>	<p>①自己理解・他者理解 ②主体性・協働性 ③将来展望・社会参画 などについて育成される資質・能力を生徒の姿として作成することが考えられる。</p>
評価の観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度								
評価規準	<p>①概念的な知識の獲得 ②自在に活用することが可能な技能の獲得 ③探究的な学習のよさの理解 の三つに関して作成することが考えられる。</p>	<p>①課題の設定 ②情報の収集 ③整理・分析 ④まとめ・表現 の各過程で育成される資質・能力を生徒の姿として作成することが考えられる。</p>	<p>①自己理解・他者理解 ②主体性・協働性 ③将来展望・社会参画 などについて育成される資質・能力を生徒の姿として作成することが考えられる。</p>								
<p>5 単元の展開 (〇時間)</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 15%;">学習過程 (時間数)</th> <th style="width: 40%;">活動内容</th> <th style="width: 10%;">評価規準</th> <th style="width: 35%;">指導のポイント・関連する教科等 など</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td colspan="4" style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>単元の展開では、目標を実現するにふさわしい探究課題、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力、生徒の興味・関心を基に中核となる学習活動を設定する。活動内容や時間数、学習環境をより具体的に記述するとともに、それぞれの活動における指導のポイントや関連する教科等の学習内容、評価規準等についても示すことが求められる。</p> </td> </tr> </tbody> </table>				学習過程 (時間数)	活動内容	評価規準	指導のポイント・関連する教科等 など	<p>単元の展開では、目標を実現するにふさわしい探究課題、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力、生徒の興味・関心を基に中核となる学習活動を設定する。活動内容や時間数、学習環境をより具体的に記述するとともに、それぞれの活動における指導のポイントや関連する教科等の学習内容、評価規準等についても示すことが求められる。</p>			
学習過程 (時間数)	活動内容	評価規準	指導のポイント・関連する教科等 など								
<p>単元の展開では、目標を実現するにふさわしい探究課題、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力、生徒の興味・関心を基に中核となる学習活動を設定する。活動内容や時間数、学習環境をより具体的に記述するとともに、それぞれの活動における指導のポイントや関連する教科等の学習内容、評価規準等についても示すことが求められる。</p>											

図2 学習指導案の基本的なイメージ(例)

第2節 単元計画作成の具体的手順

前節の考え方に沿って、単元計画を作成した事例を示す。

単元名「未来の自分に近づこう」（第2学年36時間扱い）

《単元の概要》

3日間の職場体験を終えて、仕事や働くということに興味・関心を高めた生徒たちが、「地域で働く人々」と関わる活動を中心に、地域で働く人々の仕事に対する姿勢や願いを知り、自己の将来や生き方を考えるよう学習活動を展開した単元である。



1. 全体計画・年間指導計画を踏まえる

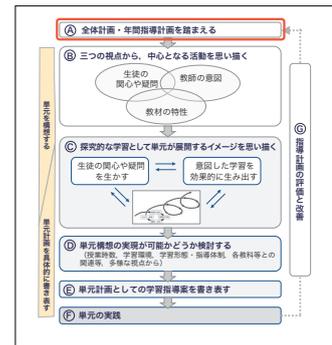
■全体計画との関連

〇〇中学校 教育目標

知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな生徒を育てる。

- 1 ふるさとの一員としての自覚に立つ生徒
- 2 人権を尊重する生徒
- 3 自主的・自律的・創造的能力に富むたくましい生徒

「単元計画作成の手順チャート」の(A)



〇〇中学校 いきいきタイム（総合的な学習の時間）の目標

探究的な見方・考え方を働かせ、地域の人、もの、ことに関わる総合的な学習を通して、地域の課題を解決し、自主的・自律的・創造的に自己の生き方を考えることができるようにするために、以下の資質、能力を育成する。

- (1) 地域の人、もの、ことに関わる探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付けるとともに、地域の特徴やよさに気づき、それらが人々の努力や工夫によって支えられていることを理解する。
- (2) 地域の人、もの、ことの中から自ら課題を設定し、その解決に向けて必要な情報を収集したり、整理・分析して考えたりする力を身に付けるとともに、考えたことを、根拠を明らかにしてまとめ、表現する力を身に付ける。
- (3) 地域の人、もの、ことについての探究的な学習に主体的・創造的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、持続可能な社会を実現するための行動の仕方を考え、地域の一員として社会に参画しようとする。

〇〇中学校 いきいきタイム（総合的な学習の時間）内容

目標を実現するに ふさわしい探究課題		探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力		
学年	探究課題	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
1	地域の伝統や文化とその継承に力を注ぐ人々（伝統文化）	地域の人、もの、ことに関わる探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付けるとともに、地域の特徴やよさに気づき、それらが人々の努力や工夫によって支えられていることを理解する。	地域の人、もの、ことの中から自ら課題を設定、その解決に向けて必要な情報を収集したり、整理・分析して考えたりする力を身に付けるとともに、考えたことを、根拠を明らかにしてまとめ・表現する力を身に付ける。	地域の人、もの、ことについての探究的な学習に主体的・創造的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、持続可能な社会を実現するための行動の仕方を考え、地域の一員として社会に参画しようとする。
2	地域で働く人々の仕事に対する姿勢や願い（勤労）			
3	町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人々や組織（町づくり）			



本単元の探究課題と、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力		探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力		
探究課題（第2学年）	地域で働く人々の仕事に対する姿勢や願い（勤労）	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
		<ul style="list-style-type: none"> 地域や専門家の方々の仕事に対する姿勢や願いを通して地域の職場や職業について理解する。 調査活動を、目的や対象に応じた適切なものとして実施することができる。 地域や専門家の方々の仕事に対する姿勢や願いに関する理解は、未来の自分の職業生活を構想するために解決すべき課題を探究的に学習してきたことの成果であることに気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域や専門家の方々の仕事に対する姿勢や願いを、自分の考えと比較したり、思いを共有したりしながら、自分の課題解決へと見通しをもつことができる。 課題の解決に必要な情報を、手段を選択して多様に収集し、種類や項目に応じて蓄積することができる。 課題解決に向けて、観点に合わせて情報を整理・分類し、考察することができる。 地域の職場や専門家の方々など、相手意識や目的意識に応じて、わかりやすく表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域や専門家の方々との関わりを通し、自分のよさに気づき、探究活動に進んで取り組もうとする。 学習活動を通して得られた自分と違う意見や考えのよさを生かしながら、協働して学び合おうとする。 地域や専門家の方々との関わりの中で、自分にできることを見付けようとする。

■年間指導計画との関連

月	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
総合的な学習の時間	「職場体験に行こう！」 34h ・各自の課題を設定する ・課題に応じて職場を決定する ・事前学習・事後学習を行う ・職場体験で学んだことを伝え合う			「未来の自分に近づこう」 36h 「働くって何だろう？」 16h 「私のライフプラン」 20h ・講座を選択して課題を設定する ・校外学習で情報を収集する ・探究した成果を発表する ・私のライフプランを考える ・私のライフプランを発表する ・私のライフプランを再考する								

2. 三つの視点から生徒の姿を思い描く

この事例では、職場体験を通して生じた関心や疑問から単元を構想した。「もっとやってみたい!」という意欲を生かし、さらなる追究できる機会を設けることで、生徒の主体的・協働的な探究活動へとつなげることを考えた。

(1) 生徒の関心や疑問

「働くって何だろう?」を通して考えたこと、興味を抱いたこと、疑問をもったこと、もっとやってみたいことなど、生徒に芽生えた関心や疑問を生かした単元を構想した。

商品の陳列を体験したが、色の並び順とか見せ方とか、そんなに深い理由があったとは知らなかった!どんな並べ方があるのか調べたい!



接客を体験して、ちょっとだけコミュニケーションが上手になったと思うけど、あいさつとかマナーとか、もっと練習してみたい!



農園で体験して、普段は見えなかったけれど、いろいろな仕事をしていることが分かった。どんな思いで仕事に取り組んでいるのか知りたい!



生徒たちは、職場体験を通して、いろいろな仕事についての興味・関心を高めているようだ。もっと仕事や働くということについて考えられる単元を考えよう。



教師(総合担当)

(2) 教師の意図

次に、どのような力を育てたいかについて、全体計画や年間指導計画をもとに考え、中心となる学習活動を具体的に思い描いた。

こんなに生徒の興味・関心がふくらんでいるのに、そのままじゃもったいないですね。それじゃあ、これをもっと探究できるように単元を考えましょう。

教師(総合担当)

そうですね。このままだと、体験した職場のことだけで終わってしまうから、もっと広い視野で職業を見られるようになってほしいですね。

担任A

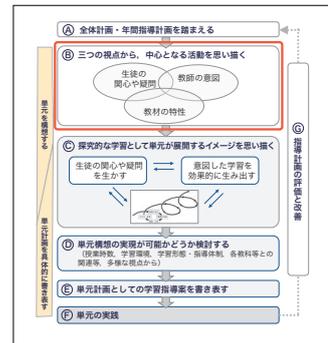
いや、興味や疑問がたくさん湧いているのだから、対象が「職業」だけに決めない方がいいと思います。職場体験で気付いたことをもう一歩深めて、「そうだったのか!」って納得してる姿が、理想ですね。

担任B

全体計画では「地域で働く人々の仕事に対する姿勢や願い」を探究課題にしているから、この単元では身近で働く人との関わりを深めるようにすればいいんじゃないでしょうか。

担任C

「単元計画作成の手順チャート」の⑧



生徒のこれまでの学習の進捗状況や興味・関心の実態を把握する

前単元までに高まっている生徒の興味・関心を、活動の様子を観察、感想などの振り返りから把握する。

どんな資質・能力を育てたいのか?

全体計画や年間指導計画を踏まえて、探究課題の解決を通して、どのような資質・能力を育てたいのか、具体的に考える。

授業のイメージを学年で共有する

大まかな指導のイメージを学年会等で話し合い、共有しておくことで、協働的な単元計画の作成につなげる。

(3) 教材の特性

次に、「地域で働く人々」という教材の価値について分析した。職場体験をはじめとし、自分の未来を描く単元を構想することによって、学び得る内容や価値ある体験が可能であるかなど、教材の特性を明らかにした。



担任A

この地域には、大きな企業は少ないけど、昔から頑張っている町工場がたくさんあります。職人さんの思いや願いに触れることで、働くことの意味や価値に迫れるのではないかと思います。



担任B

そうですね。いろいろな仕事が機械化されている中で、職人さんがどのような努力や工夫を重ねているか、迫ることができそうですね。



担任C

町工場以外にも、商店街にはいろいろなお店があるから、店主の方にインタビューをする活動もできるかもしれません。



担任A

商店だったら、お客さんの思いや願いについても聞けるかもしれませんね。お客さんは、どうして大きなお店ではなく、商店街に来ているのかがわかると、商店街のよさに気付けそうですね。



担任B

町工場の職人さん、商店街の店主やお客さんとの関わりを通して、より具体的に働くことの意味や価値を考えることができそうです。ただ、インタビューするだけで生徒の考えが深まるかどうか心配です。



教師(総合担当)

そうですね。全体計画を見たり、「地域で働く人々」が教材としてふさわしいか、ウェビングをしたりして確認してみましょう。

教材と出合う姿を思い描く

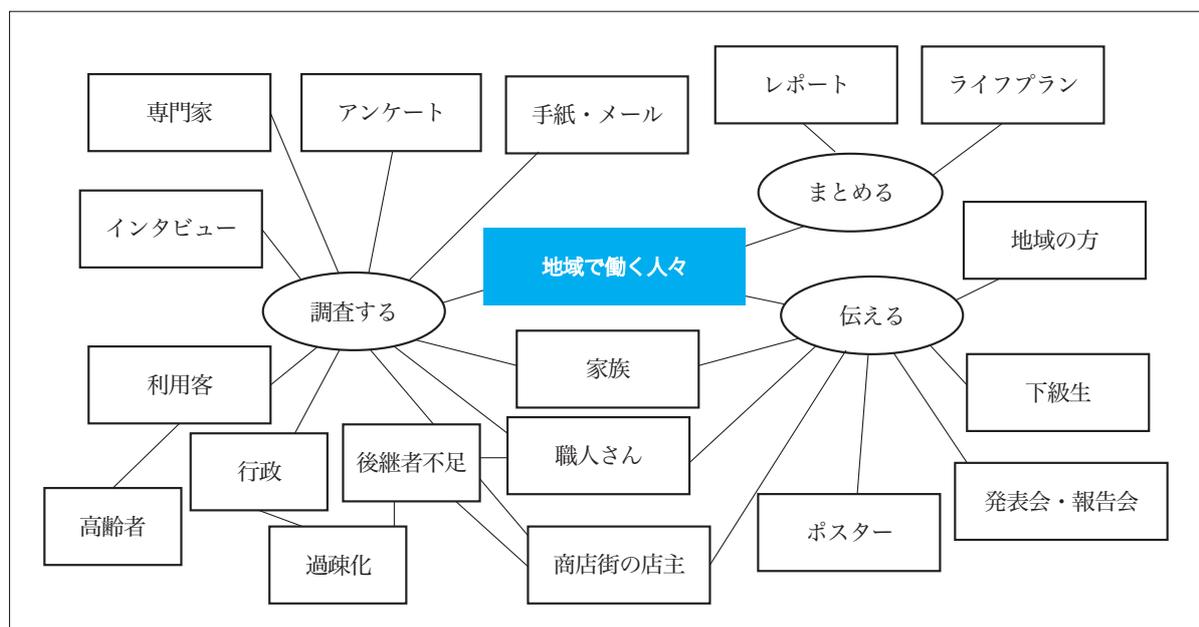
生徒が地域の人々との関わりを深め合う姿を思い描くことで、単元の中心的な活動を明確にする。

ふさわしい単元名を考える

何をさせたいのか、何を学んでほしいのかといった、教師の願いが生徒に伝わるような単元名を考える。

教材がふさわしいかをウェビングで確かめる

中心の教材を「地域で働く人々」としたとき、教材としての広がりがあるか、どのような対象や活動が考えられるかを予測する。



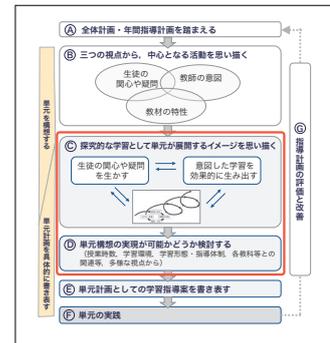
3. 探究的な学習として単元が展開するイメージを思い描く

これまでに考えた単元構想を具体化する際に、学習過程を探究的にするよう、単元の計画を考えた。

「未来の自分に近づこう」

「働くって何だろう?」では、専門家の講話を聞いたり、校外学習を行ったりして、働く意義を考える活動を中心にしていこう。

「単元計画作成の手順チャート」のC・D



課題の設定では

「職場体験に行こう!」の発表会で浮かび上がった疑問や、指摘されて見えてきた新たな課題から出発しよう。

課題の広がりや予想されるから、それぞれの課題に応じた「講座」を開設して、課題の質を高められるようにしよう。

自分の課題の内容に近い「講座」を選べるように、生徒の課題を事前に整理して、開設する講座を決めよう。

生徒の関心や疑問に対応可能な「講座」を開設し、自分の課題がどの講座に属するか考えさせる。こうすることで、課題の質が高まり、教師が意図した学習を効果的に生み出せる。

情報の収集では

課題の解決に見通しを持つことができるように、調査項目をきちんと決め、情報収集の都度、整理できるようにしよう。

専門家の方から話を聞いたり、地域の方にインタビューをしたりして情報収集できるように校外学習の時間を計画しよう。

校外学習の時間をどのように使うか、収集したい情報は何か、見通しを持って計画できるようにしよう。

強い関心のある職場や職業に関わる方と事前に連絡をとり、協力を依頼する。

整理・分析では

収集した情報を、情報の質や明らかにしたい課題に応じて適切な方法で整理・分析できるようにしよう。

わかったことを課題に照らして、比較、分類、関連付けすることによって、分析しながら考察できるようにしよう。

整理・分析しながら、さらに必要な情報があったら、メールや電話で質問して、情報を追加できるようにしよう。

収集した情報を、KJ法的手法やウェビング等を用いて、比較したり、分類したり、関連付けたりして情報を整理・分析する。

まとめ・表現では

生徒一人一人の成果や課題について、発表会の機会を設定して、相互理解できるようにしよう。その中で、新たな課題を見いだせるようにしよう。

講座ごとの探究で学んだことを、自分の将来の職業生活を描いたライフプランの構想につなげたいね。また、地域の職場体験や専門家の方のこともとても参考になったので、ぜひ、まとめたものを届けたいよね。

相手意識や目的意識を明確にし、まとめたり、表現したりする。このように、情報を再構成することで、新たな課題を自覚し、次なる課題へと進む。

「私のライフプラン」では、働くことの意義や価値について捉え直ししながら、生徒が自分の将来について具体的に思い描くことができるような活動を中心にしていこう。

4. 単元計画を具体的に書き表す

単元の構想で描いたイメージを, 様々な条件を考慮して具体化する。

総合的な学習の時間 単元計画

1. 単元名「未来の自分に近づこう」(36時間扱い)

2. 単元目標

地域の職場や仕事, 専門家の方々との関わりを通して, 地域の方々の仕事に対する姿勢や願いを理解し, 働くことの意味や価値について自分の将来と結び付けて考えるとともに, 自分のよさに気づき, 探究活動に進んで取り組むことができるようにする。

3. 単元設定の理由

(1) 生徒の実態から

生徒たちは, 職場体験学習を通して, 様々な仕事に対して興味や関心, 疑問が湧いている。また, 働く体験を通して, 社会性や職業観・勤労観について意識が芽生えはじめ, 社会に出て生活することを考え始めている。

そこで, こうした興味・関心や疑問から課題を設定し, 地域の方々から学ぶことを通して, 自己の生き方につなげたいと考え, 本単元を設定した。

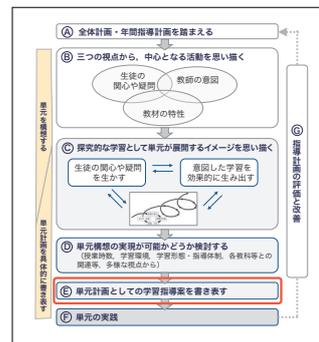
(2) 単元で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	<ul style="list-style-type: none"> 働くことの意味や価値について, 地域の方の思いや願いから, 自己の成長との関わりで見いだすことができることに気付く。 目的や対象に応じた調査活動を実施するために, 事前準備をし, 情報を適切な手続きによって, 収集できる。 地域の方の仕事に対する姿勢や願いを理解することは, 未来の自分の職業生活を構想するために, 解決すべき課題を探究的に学習してきたことの成果であることに気付く。
思考力, 表現力等 判断力	<ul style="list-style-type: none"> 地域の方の仕事に対する姿勢や願いを, 自分の考えと比較したり, 思いを共有したりしながら, 自己の課題解決へと見通しをもつことができる。 課題の解決に必要な情報を, 手段を選択して多様に収集し, 種類や項目に応じて蓄積することができる。 課題解決に向けて, 観点に合わせて情報を整理・分類し, 考察することができる。 地域の職場や専門家の方々など, 相手意識や目的意識に応じて, わかりやすく表現することができる。
人学 間性 等 に向 かう 力	<ul style="list-style-type: none"> 地域の職場や仕事, 専門家の方々との関わりを通し, 自己のよさに気づき, 探究活動に進んで取り組む。 自分と違う他の意見や考えを受け取って, 他の違う意見や考えのよさを生かしながら, 協働して学び合おうとする。 地域の職場や仕事, 専門家の方々との関わりの中で, 自己にできることを見付けようとする。

(3) 教材

探究課題は「地域で働く人々の仕事に対する姿勢や願い」であり, これを一人一人の疑問や関心とつなげて, 個人課題を設定さ

「単元計画作成の手順チャート」
の⑤



せる。地域の方々との関わり合いを通して、働くことの意義や価値についての理解が一層深まることが期待できる。そして、自分の将来についての「ライフプラン」を構想することが、自己実現のために今すべきことを考えたり、地域や社会の一員として自分にできることを考えたりすることにつながる。

4. 単元の評価規準

評価の観点		
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①働くことの意味や価値について、地域の方の思いや願いから、自己の成長との関わりで見いだすことができることに気付いている。	①地域の方の仕事に対する姿勢や願いを、自分の考えと比較したり、思いを共有したりしながら、自分の課題解決への見通しをもっている。	①地域の職場や仕事、専門家の方々との関わりを通し、自分のよさに気付き、探究活動に進んで取り組もうとしている。
②目的や対象に応じた調査活動を実施するために、事前準備をし、情報を適切な手続きによって、収集している。	②課題の解決に必要な情報を、適切な手段を選択して収集し、種類や項目に応じて蓄積している。	②自分と違う他の意見や考えを受け取って、他の違う意見や考えのよさを生かしながら、協働して学び合おうとしている。
③地域の方の仕事に対する姿勢や願いを理解することは、未来の自分の職業生活を構想するために、解決すべき課題を探究的に学習してきたことによる成果であることに気付いている。	③課題解決に向けて、観点到に合わせて情報を分類・整理し、考察している。 ④地域の職場や専門家の方々など、対応するとき、相手意識や目的意識に応じて、わかりやすく表現している。	③地域の職場や仕事、専門家の方々との関わりの中で、自分にできることを見付けようとしている。

単元で育成を目指す資質・能力を踏まえて記述する。

5. 指導と評価の計画（36時間）

小単元名 (時数)	ねらい・学習活動	知	思	態	指導のポイント等
働くって何だろう？ (16)	・働くことの意味について考えるための個人課題を設定する。		①		・職場体験で抱いた疑問や芽生えた興味・関心を全体で共有して、個人課題を考えるきっかけとする。
	・課題を解決するために、複数の専門家の講話を聞く。 ・自分の課題を解決するために必要な情報は何かをまとめる。		②		・専門家の方々の様々な生き方を聞くことによって、その方の職業観や勤労観に着目させ、仕事を通したやりがいやいきがいについて理解できるように指導する。
	・校外学習で情報を収集する。 ・課題を解決するために、収集した情報を整理・分析する。	②		②	・校外学習で計画的に情報を収集できるように、事前に課題の解決に必要な情報を考えさせたり、適切な情報を収集する手段を選択させたりする。
	・発表会で、課題の解決を通して考えたことや感じたことを発表する。 ・発表について意見交換をする。 ・発表に対する指摘や疑問点を整理し、今後の活動の見直しをもつ。			④	・考えや体験したときの気持ちなどを適切な言葉で表現するように指導する。 ・考えを発表したり、やり取りしたりすることによって、自分の職業観が芽生えてくるように指導する。
私のライフプラン (20)	・自己の生き方を考えるために、知りたいことや疑問を整理し、個人課題を考える。			①	・講話を聞いた専門家の方々のプロ意識、職業生活、こだわりなどに着目させ、人生設計に係る課題へと導く。
	・課題の解決に向けて、職場体験で出会った方や専門家、家族や地域の方などとやり取りする。 ・回答への質問を基に、気付いたことや考えたことをまとめる。	①		③	・課題の解決のための適切な情報の収集ができるように指導する。
	・「私のライフプラン」を設計する。 ・これまでに関わった地域の方々へ自分の学んだことをまとめて届ける。		③		③ ・働くことの意味や価値の理解と、自分の将来とのつながりが意識できるように指導する。 ・地域の方々との関わりを深められるように配慮する。

生徒の思いや意識の流れを予想して記述し、生徒が自分の探究活動を進めるイメージをもって学習活動のまとまりを示す。

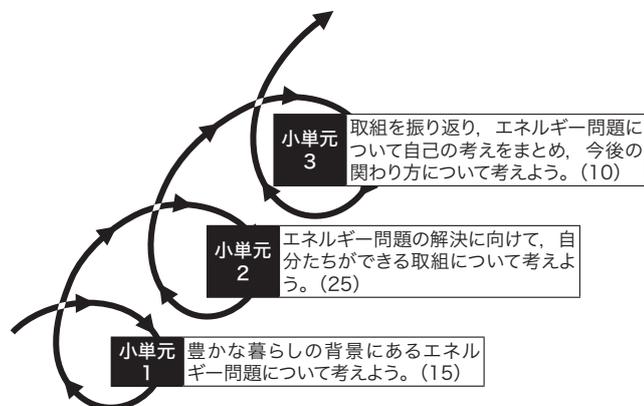
「単元の評価規準」の指導計画への位置付けについては、総括的な評価を行うためにも、生徒の姿となって表れやすい場面、全ての生徒を見取りやすい場面を選定する。

事例① 単元名：第2学年「未来の人も豊かな暮らしをするために～エネルギー問題について考え、自然環境との共生を目指す～」(50時間扱い)

単元の概要

本単元は、豊かな自然に囲まれた地域で行われた実践である。身近な自然としての里山が宅地として開発される中、生徒は前年度に、目の前に広がる自然環境の調査と保全に積極的に取り組む学習活動を経験しているが、現在の自分たちの暮らしが、自然環境を開発した上で成り立っていることには十分に気付いておらず、表面的な理解に留まっていた。

こうした背景から、本単元は、開発の恩恵を受けて現在の豊かな暮らしが成り立っていることにも目を向け、自然との共生の在り方について考えることができる生徒を育てていくことを目指し、「エネルギー問題と、限りある資源を未来の世代に残すための取組」という探究課題を踏まえて構想した単元である。



単元の目標

様々な発電方法を調査したり電力消費量を減らすための活動に取り組んだりすることを通して、自分たちの暮らしは環境に負荷を与えたり、限りある資源の消費の上で成り立っていることを理解するとともに、電力消費量を抑えるための実現可能な方法を探し求め、未来の豊かな暮らしを守るために行動できるようにする。

単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>①エネルギー問題について、資源には限りがあることや発電方法のバランスが重要であること、生活や暮らしとのつながりが大切であることなどを理解している。</p> <p>②地域への節電の呼びかけを相手や場面に応じた適切さで実施している。</p> <p>③エネルギー問題と自分の生活との関係について探究し続けてきたことによって、自らの行為が未来社会に深く関わっていることに気付いている。</p>	<p>①電気エネルギーを生み出すための発電について、何をどのように調べるか見通しをもって活動計画書を作成している。</p> <p>②多様な発電方法について、その仕組みや特徴に関する情報を、幅広く効率的に収集している。</p> <p>③自分でできる節電方法について、それぞれのメリット・デメリットを明らかにした上で、取り組むことの優先順位を決めている。</p> <p>④エネルギー問題の解決方法について、結論に対する根拠を明らかにして、自分の考えを主張している。</p>	<p>①エネルギー問題について、調べたことの中から伝えたいことを明確にして相手に伝えようとしている。</p> <p>②太陽光発電が増えることの是非について、異なる意見のよさや他者の考えの価値を受け入れ参考にしようとしている。</p> <p>③アンケートの結果から、これからの社会を視野に入れ、節電の取組を地域に継続的に働きかけようとしている。</p>

指導と評価の計画

小単元名(時数)	ねらい・学習活動	知	思	態	評価方法
1 豊かな暮らしの背景にあるエネルギー問題について考えよう。(15)	・エネルギーに関する問題を出し合い、解決に向けた今後の活動への見通しをもつ。		①		・発言 ・計画書
	・電気に焦点を絞り、様々な発電方法の仕組みや特徴について調べる。		②		・ワークシート
	・社会見学を通して、化石エネルギーや再生可能エネルギーを利用した発電の意義について考え、学んだことを新聞にまとめる。			①	・新聞
2 エネルギー問題の解決に向けて、自分たちができる取組について考えよう。(25)	・太陽光発電施設の見学や、太陽光発電の設置業者へのインタビューを行い、太陽光発電のメリット・デメリットを議論する。 ・太陽光発電や再生可能エネルギーについて、身近な地域や実際の現場での調査を行い、情報を収集する。			②	・振り返りカード
	・エネルギーの自給自足に取り組む人の話を聞き、自分たちができる効果的な節電方法について考える。(私の節電ベスト3)		③		・「私の節電ベスト3」シート
	・節電に対する意識を地域に広げ、多くの人に節電に取り組んでもらうために、地域が一斉に消灯する活動を企画し実行する。	②			・節電企画シート
	・活動に対する地域アンケートを行い、集計結果を基に、活動の有効性を見つめ直す。			③	・活動報告書
3 取組を振り返り、エネルギー問題について自己の考えをまとめ、今後の関わり方について考えよう。(10)	・海外の電力事情(フランス・ドイツなど)を比べ、発電方法や電力生産の方向性について、自分の考えを主張文(結論と理由)としてまとめる。		④		・主張文
	・作成した主張文を使って、「これからの社会における発電や電力生産」についてのパネルディスカッションを行う。	①			・発言 ・主張文への追記
	・単元を通して学んだ記録(振り返りカード、私の節電ベスト3、主張文など)を振り返り、自己の成長や学習したことを基にして、「10年後の私」宛に手紙を書く。	③			・手紙

※評価計画の作成の意図や実際の評価については、『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【中学校 総合的な学習の時間】』を参照する。

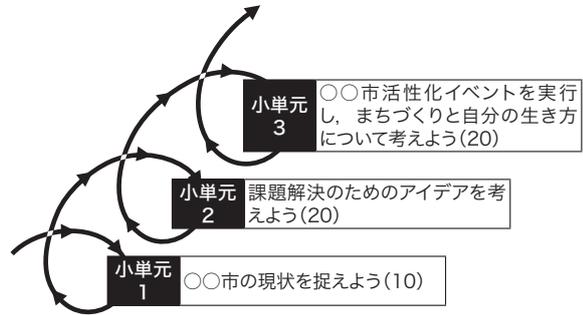
事例② 単元名：第3学年「みんなでつくる持続可能で魅力的なふるさと〇〇市」 (50時間扱い)

単元の概要

本単元は、全体計画に定めた探究課題「〇〇市のよさと課題、その解決に取り組む人々と創意工夫」を踏まえて構想した単元である。

〇〇市のまちづくりの現状を、経済・意思決定・人権尊重等の視点から捉えたり、そこから見えてきた課題を解決するために、自分たちにできることを考えたりすることが、SDGsの「11 住み続けられるまちづくりを」の目標につながることを意識した。

〇〇市がまちづくり基本条例を定め、市民総参加のまちづくりを推進していることと、〇〇市がもつよさを見いだし、抱える課題の解決策を多様な他者と協働しながら中学生の視点で発信する活動を通して、持続可能なまちづくりの在り方を考え、〇〇市に誇りをもち進んで地域に参画しようとする態度を育てることをねらったものである。



単元の目標

〇〇市のよさや課題について考えたり、〇〇市の活性化に向けて取り組む人々と協働してイベントを企画・開催したりすることを通して、〇〇市のよさや課題と自分たちの生活との関わりを理解し、持続可能な〇〇市の在り方と自分の将来を結び付けて考えるとともに、学んだことを活かしながら〇〇市の活性化のために自分にできることを考え行動しようとするようにする。

単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>①〇〇市には、そのよさを発信したり継承したりする人々や組織があり、それぞれが連携して取組を進めていることを理解している。</p> <p>②〇〇市の現状を捉えるために、アンケートやインタビューによる調査を相手や目的に応じた適切さで実施している。</p> <p>③〇〇市のよさや課題と持続可能な〇〇市の在り方についての理解は、〇〇市の魅力等の発信に取り組む人々と協働してきたことや〇〇市の課題解決のために探究的に学習してきたことの成果であると感じている。</p>	<p>①〇〇市の活性化について、〇〇市の実態や他地域との比較から課題を設定し、その解決に向けて計画を立てている。</p> <p>②〇〇市を活性化するための課題解決に必要な情報について、目的や意図に応じて手段を選択して収集したり、情報の種類に応じて蓄積したりしている。</p> <p>③〇〇市の活性化に向けた活動を進めるために、目的に応じて整理したり、他地域や過去の〇〇市の実態と比較したりするなどして分析し、具体的な取組を考えている。</p> <p>④持続可能な〇〇市にするための自分の考えを、表現する目的や相手に応じて内容を構成するとともに適切な方法を選択し、論理的にまとめ表現している。</p>	<p>①〇〇市のよさを活かした活性化の在り方に関心を持ち、〇〇市の現状を捉えたり未来予想をしたりするとともに、互いのよさを活かし自分の意思で目標をもって課題解決に向けた探究活動に取り組もうとしている。</p> <p>②〇〇市のよさを生かした活性化を進めるため、まちづくりに関わる人々等と協働して探究活動に取り組もうとしている。</p> <p>③持続可能で魅力的な〇〇市を実現するため、〇〇市のよさを認識し継承したり、人々と関わったりすることの重要性に気付くとともに、進んで〇〇市の行事等に参加しようとしている。</p>

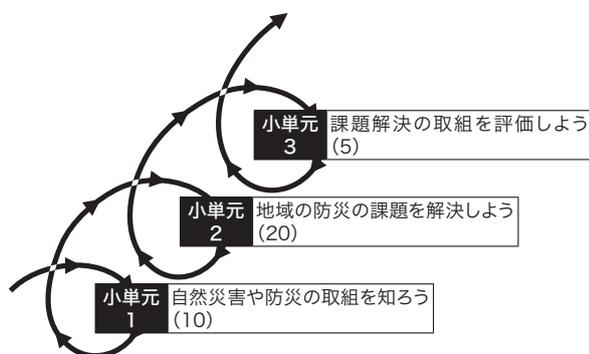
指導と評価の計画

小単元名(時数)	ねらい・学習活動	知	思	態	評価方法
1 ○○市の現状を捉えよう(10)	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分にとって豊かな○○市」とはどのような状態か、自分なりの考えをもつ。 ・○○市のよさと課題についてイメージマップで広げ共有する。 ・まちづくりの取組を経済・意思決定・人権尊重等の視点から見つめ、よさや課題について知っていること、自分が考えたことを出し合い、情報収集につなげる。 ・○○市の現状を捉えるため、住民、事業所、移住者等の人々へ幅広くインタビューし録画するなどして情報収集する。 	②			<ul style="list-style-type: none"> ・イメージマップ ・インタビュー内容 ・調査シート
	<ul style="list-style-type: none"> ・調査結果を「まちのよさ」「課題」等に分類したり、まちづくりの主体に応じて整理したりする。 ・○○市のよさを伸ばしたり、解決したりする課題を焦点化して共有し、課題ごとにチームをつくる。 ・チームごとに1年間を見通した活動カレンダーをつくる。 			③	<ul style="list-style-type: none"> ・行動観察 ・アイデアノート
2 課題解決のためのアイデアを考えよう(20)	<ul style="list-style-type: none"> ・小単元1で明らかになった○○市のよさのPR方法や、課題の解決策についてのアイデアを考える。 			①	<ul style="list-style-type: none"> ・行動観察 ・アイデアノート
	<ul style="list-style-type: none"> ・まちづくり、行政関係者、住民等からアイデア実現のための情報を収集したり、PR方法を検証したりする。 	①	②		<ul style="list-style-type: none"> ・行動観察 ・アイデアノート
	<ul style="list-style-type: none"> ・他地域の取組等とも比較しながら、実現可能性、経費、自分たちでできるか等の視点で取組内容を整理する。 			②	<ul style="list-style-type: none"> ・行動観察 ・アイデアノート
	<ul style="list-style-type: none"> ・伝えたい内容と方法を検証し、行政関係者、保護者、自治会等の方に向けてアイデアを発表し、その内容やイベント開催についてアンケートを実施する。 			④	<ul style="list-style-type: none"> ・発表構成シート ・プレゼン
3 ○○市活性化イベントを実行し、まちづくりと自分の生き方について考えよう(20)	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートの内容を分析し、○○市の活性化につながるイベントの計画を立てる。 			①	<ul style="list-style-type: none"> ・アイデアノート
	<ul style="list-style-type: none"> ・他の○○市のイベント等に関する情報を収集し、自分たちの考えに生かせそうなものを選択する。 			③	<ul style="list-style-type: none"> ・アイデアノート
	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちのアイデアをまとめ、まちづくり・行政関係者・市民等にイベント開催の意図を伝えるとともに、「○○市活性化イベント」を実行する。 ・取組を振り返り、これまでに取り組んだこととこれからの自己の生き方を関連付けてレポートを書く。 	③			<ul style="list-style-type: none"> ・行動観察 ・レポート

事例③ 単元名：第3学年「地域の安全を守ろう」(35時間扱い)

単元の概要

本単元は「防災のための安全な町づくりとその取組」を探究課題とした単元である。地震や津波，豪雨といった自然災害から地域を守るために，ポスターやチラシ，防災マップなどに加え，防災のためのアプリ開発やWebサイトでの公開を教科等を横断しながら実践することで，防災の在り方について考え，行動できるようにするとともに，身近な課題を解決するための意識をもつことができる生徒の育成を目指す。



単元の目標

地域に起こり得る災害とその防災のための取組について調べ，地域の防災課題の解決に向けて専門家と協働しながら活動することを通じて，地域の防災に取り組む人々の取組や思いが相互に連携していることについて理解するとともに，災害時の行動の仕方や防災の在り方について自分たちの生活との関わりで考え，地域の課題を積極的に解決しようと行動できるようにする。

単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①自然災害や防災について知り，地域の防災に取り組む人々の取組や思いが相互に連携していることや，それと自分たちの生活との関わりについて理解している。 ②質問紙調査などによって収集した情報を，図や文章，アプリなどにまとめている。 ③地域の防災課題の解決に向けた取組を通して，防災に対する意識や課題解決に対する意識が変化してきたことを理解している。	①地域に起こり得る災害や地域の課題から課題をつくり，解決に向けた取組を計画することができる。 ②解決に必要な情報を，手段を選択して収集することができる。 ③必要な情報を取捨選択したり，複数の情報を比較したり関係付けたりしながら解決に向けて考えることができる。 ④相手や目的に応じて，自分の考えをまとめ，適切な方法で表現することができる。	①自分自身の生活を見つめ直し，自然災害や防災に関心をもって課題解決に取り組もうとしている。 ②体験したことや自分と違う考えを生かしながら，協働して課題解決に取り組もうとする。 ③課題解決の状況を振り返り，あきらめずに地域が抱える防災課題の解決に向けて取り組もうとする。

指導と評価の計画

小単元名(時数)	ねらい・学習活動(関連する教科等)	知	思	態	評価方法
1 自然災害や防災の取組について知る(10)	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな自然災害や防災の取組や工夫について調べる。 <ul style="list-style-type: none"> —自然の恵みと自然災害(理科) —自然災害や防災(社会科) ・既存の防災の取組の課題を整理し、まとめる。 	①			<ul style="list-style-type: none"> ・ノート ・発言
2 地域の防災の課題を解決しよう(20)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの地域に起こり得る災害や、地域の防災の取組について調べる。 			①	<ul style="list-style-type: none"> ・ノート ・ワークシート
	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の人の防災に対する意識調査から課題を見付ける。 <ul style="list-style-type: none"> —データの収集・分析(数学科) 			②	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート
	<ul style="list-style-type: none"> ・意識調査の結果から解決すべき課題を見付け、プロジェクトを立ち上げ、専門家のアドバイスを受けながら取り組む。 <ul style="list-style-type: none"> —チラシのデザイン(美術科) —防災マップの作成(社会科) —Webサイトの作成、防災アプリの開発(技術・家庭科) 	②	③	②	<ul style="list-style-type: none"> ・成果物 ・観察
	<ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトの取組を他学年や地域の人々に伝える。 			④	③
3 課題解決の取組を評価しよう(5)	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートによる評価・改善をする。 <ul style="list-style-type: none"> —データの収集・分析(数学科) ・防災と自分たちの生活との関わりや、プロジェクトの取組について振り返り、新たな課題を見付ける。 	③	①		<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート ・発言

STEAM教育との関連

AIやIoTなどの急速な技術の進展により社会が激しく変化し、多様な課題が生じている今日においては、各教科等の学びを基盤としつつ、様々な情報を活用しながらそれを統合し、課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結びつけていく資質・能力の育成が求められている。このような資質・能力の育成に資すると期待されるのがSTEAM教育である。

本単元は防災に関する課題解決に向けたプロジェクトの取組を通して、各教科での学習を実社会での課題解決に生かしていくことを計画した単元である。理科や社会科と関連付けて、自然災害や防災の取組についての学習を行う。そして、防災のために作成された既存の制作物等について、各教科等の視点から分析を行う。チラシや防災マップは美術科や社会科の視点から、Webサイトや防災アプリは技術・家庭科、プログラミングの視点から分析することで、その作成に当たって、何に留意され、どのような工夫がなされているのかについて理解し、防災に取り組む人々の思いに触れる。また、地域の防災の課題を見付ける際には、地域の人の防災に対する意識調査を実施し、その結果の分析の際には数学科のデータ活用の領域での学びを生かす。実際に課題を決めて、解決のための取組を行う際には、小単元1での学びを基に、課題解決に向けたプロジェクトを立ち上げる。その際には、専門家との連携や、プロジェクトごとの情報収集などを行わせることが必要になる。成果物の評価の際には、再度アンケート調査を行い、その結果を数学科での学びを活用して、分析することが考えられる。

各教科等の学びを実際の問題解決に活用する場面を設定することで、各教科等の学びを深めるとともに、探究をより高度なものにすることが可能になる。また、現代的な諸課題に対応していくための資質・能力が育成されることも期待できる。そのためにも、各教科等の学習を通じて身に付けた資質・能力が統合的に活用されるように、教育課程全体を見渡して単元を構想することが大切である。

第5章 総合的な学習の時間の評価

総合的な学習の時間では、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開するよう、各学校において目標や内容を定めて実施することが求められている。各学校により、生徒に育てようとする資質・能力も異なることから、それらを踏まえ、評価の観点や評価規準を設定し、評価活動を適切に進めていく必要がある。この評価活動には、生徒の学習状況の評価はもとより、各学校の指導計画や教師の学習指導の評価も含むものである。

第1節 生徒の学習状況の評価

1. 学習評価の基本的な考え方

生徒の学習状況の評価は、この時間の目標について、どの程度実現しているのかという状況を把握することによって、適切な学習活動に改善するためのものである。また、その結果を外部に説明するためのものである。それには、各学校において定める内容に示す資質・能力が適切に育まれているのかを、生徒の学習状況から丁寧に見取ることが求められる。

学習状況の評価は、教師にとっては、生徒にどのような資質・能力が身に付いたのかを明確にし、生徒の学習活動を改善するためにどのような指導・支援を行えばよいかを映し出してくれる。生徒にとっても、自分の学習状況を把握し、自己を見つめ直すきっかけになり、その後の学習や発達を促す働きをする。評価が変われば授業が変わり、それにより生徒が育つ。一人一人の生徒の伸びや成長につながる評価を行うことが欠かせない。

総合的な学習の時間における生徒の学習状況の評価を適切に実施するには、信頼される評価方法であること、多面的な評価方法であること、学習状況の過程を評価する方法であること、の三点が重要である。

第一に、信頼される評価とするためには、およそどの教師も同じように判断できる評価が求められる。例えば、あらかじめ指導する教師間において、評価の観点や評価規準を確認しておき、これに基づいて生徒の学習状況の評価することなどが考えられる。この場合には、評価の観点を、1単位時間で全て評価しようとするのではなく、年間や、単元などの内容や時間のまとまりを見通して、一定の時間数の中において評価を行うように心がける必要がある。

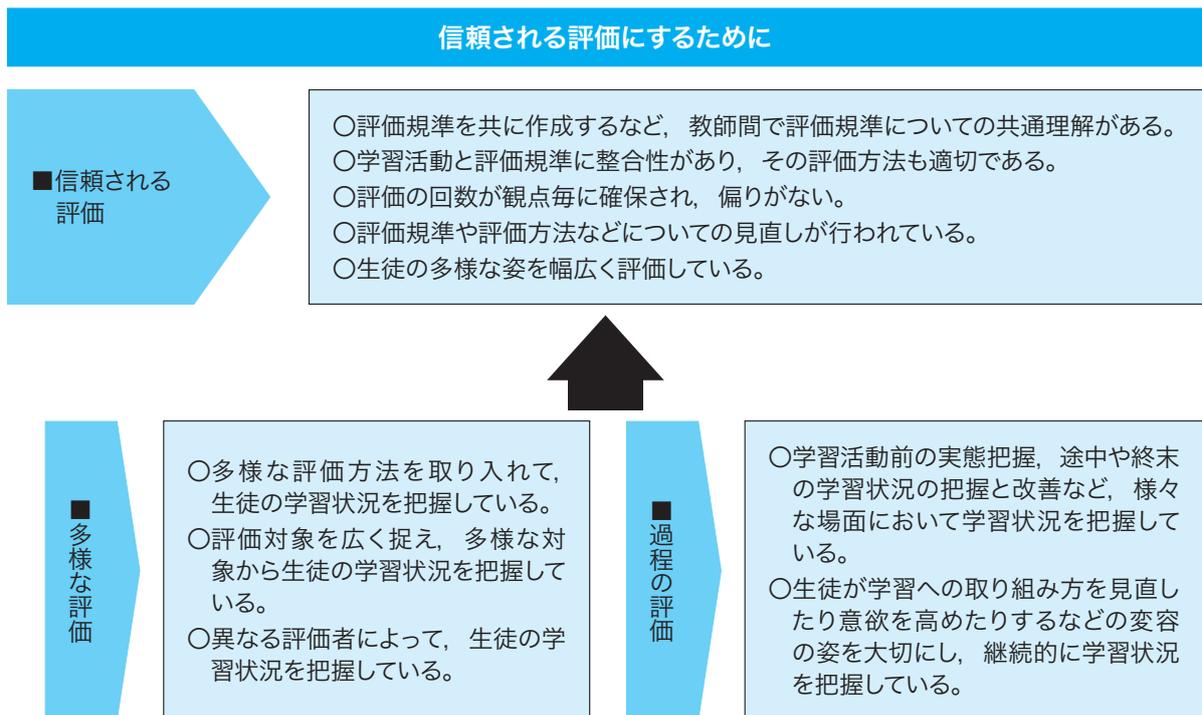
第二に、生徒の学習状況を多面的に捉えるために、多様な評価方法や評価者による評価を適切に組み合わせることが重要である。多様な評価方法としては、例えば次のようなものが考えられる。いずれの方法も、生徒が総合的な学習の時間を通して資質・能力を身に付けることができているかどうかを見取ることが目的である。成果物の出来映えのみをもって総合的な学習の時間の評価とすることは

適切ではなく、その成果物から、生徒がどのように探究の過程を通して学んだかを見取ることが大事である。

- ・発表やプレゼンテーションなどの表現による評価
- ・話し合い、学習や活動の状況などの観察による評価
- ・レポート、ワークシート、ノート、作文、論文、絵などの制作物による評価
- ・学習活動の過程や成果などの記録や作品を計画的に集積したポートフォリオを活用した評価
- ・評価カードや学習記録などによる生徒の自己評価や相互評価
- ・教師や地域の人々等による他者評価 など

第三に、特に総合的な学習の時間においては、生徒の内に育まれているよい点や進歩の状況などを積極的に評価することが欠かせない。それは、生徒の中で特に進歩したこと、意欲的に取り組んだこと、努力や工夫が見られたこと、ものの見方や考え方が変わったこと、自己の生き方につなげて考えようとしたことなどを、生徒の学習の姿や作品、制作物などから見取り、汲み取ることである。また、それを通して生徒自身が自分のよい点や進歩の状況などに気づき、自らの可能性や成長を実感できるようにすることも重視したい。

これら三点の関係性を整理すると、下図のようになる。評価の信頼性を高めるためにも、生徒にどのような資質・能力が育まれているのか、生徒は何を学び取っているのかを、多様な評価と過程の評価を意識して行い、それを指導に役立てることが重要である。なお、総合的な学習の時間では、単元が多様な学習活動で構成されることが多い。学習活動やそこで学ぶ内容に応じ、どの場面で、誰がどのように評価するのかを考えておく必要がある。



2. 全体計画に示した「学習の評価」の具体化

総合的な学習の時間では、その全体計画に「学習の評価」の欄を設け、そこに示した評価の方針や手立てに基づき、評価を行うことが考えられる（68頁参照）。

この「学習の評価」の欄には、学習状況の改善を図るのに有効な評価の考え方や評価方法、指導計画・学習指導の評価に関する方針、評価活動を充実させる手立て等を簡潔に記述する。各学校の実態や課題を吟味して、この欄に掲げる項目を検討することが大切である。例えば、生徒の学習状況の評価に関しては、以下のような記述が考えられる。

- ポートフォリオを活用した評価の充実
 - 観点別学習状況を把握するための評価規準の設定
 - 個人内評価の重視
- など

3. 評価の観点の設定

今回の学習指導要領改訂では、各教科等の目標や内容を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の三つの柱で再整理しているが、このことは総合的な学習の時間においても同様である。

学習指導要領に定める目標を踏まえて各学校が目標や内容を設定するという総合的な学習の時間の特質から、各学校が評価の観点を設定するという枠組みが維持されているが、資質・能力の三つの柱で再整理した新学習指導要領の下での指導と評価の一体化を推進するためにも、これらの資質・能力に関わる「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の三観点を踏まえ、評価の観点を設定することが求められる。

なお、指導要録については、これまでどおり、実施した「学習活動」、「評価の観点」、「評価」の三つの欄で構成し、その生徒のよさや成長の様子など顕著な事項を文章で記述することが考えられる。

4. 学習状況の評価の手順

(1) 内容のまとめりごとの評価規準を作成する

総合的な学習の時間の「内容のまとめり」は、一つ一つの探究課題とその探究課題に応じて定めた具体的な資質・能力と考えることができる。目標の実現に向けて、生徒が「何について学ぶか」を表したものが探究課題であり、各探究課題との関わりを通して、具体的に「どのようなことができるようになるか」を明らかにしたものが具体的な資質・能力という関係になる。

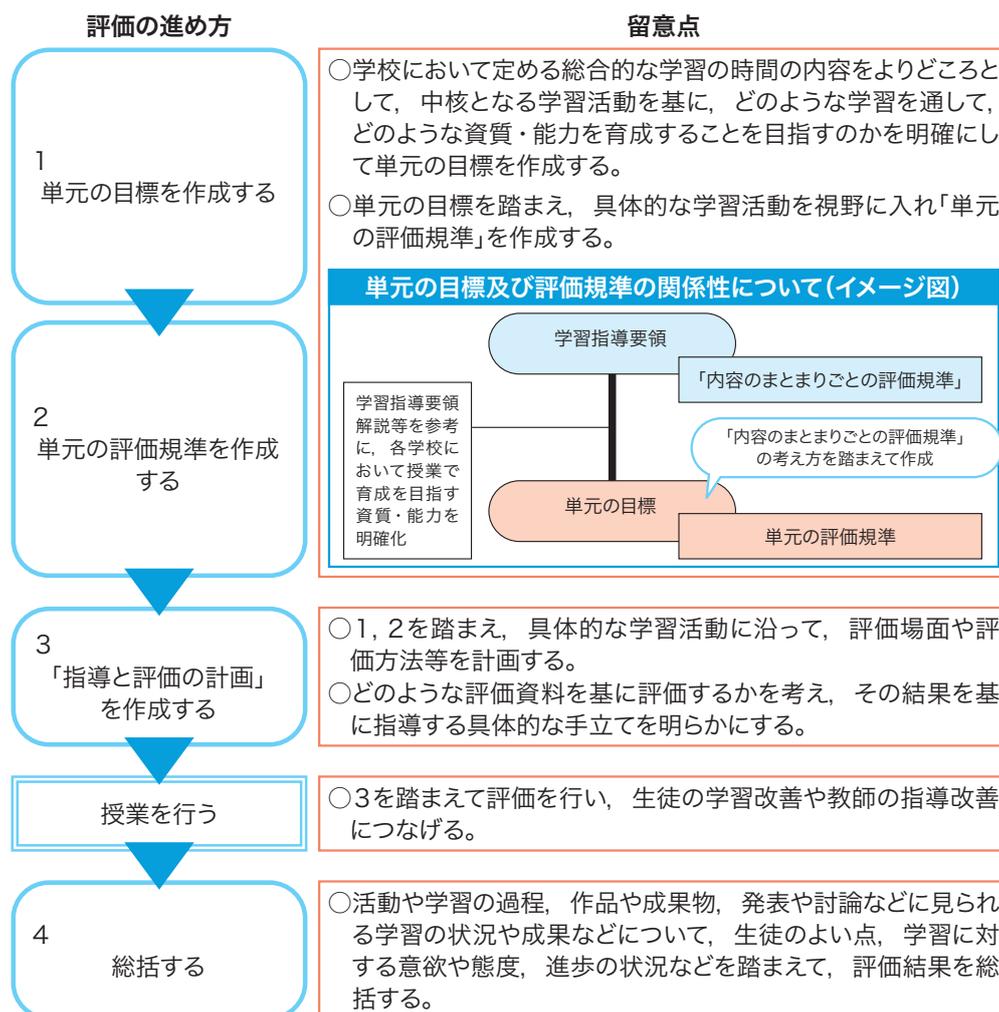
「内容のまとめりごとの評価規準」を作成する際の基本的な手順は以下のとおりである。詳細は、『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【中学校 総合的な学習の時間】』（<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryoku.html>）を参照されたい。

- ①各学校において定めた目標（第2の1）と「評価の観点及びその趣旨」を確認する。
- ②各学校において定めた内容の記述（「内容のまとめり」として探究課題ごとに作成した「探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力」）が、観点ごとにどのように整理されているかを確認する。
- ③【観点ごとのポイント】を踏まえ、「内容のまとめりごとの評価規準」を作成する。

なお、【観点ごとのポイント】については、『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【中学校 総合的な学習の時間】』35頁を参照されたい。

（2）単元ごとの評価を行う

単元における観点別学習状況の評価を実施するに当たり、まずは年間の指導と評価の計画を確認することが重要である。その上で、学習指導要領の目標や内容、「内容のまとめりごとの評価規準」の考え方等を踏まえ、以下のように進めることが考えられる。なお、複数の単元にわたって評価を行う場合など、以下の方法によらない事例もあることに留意する必要がある。詳細は、『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【中学校 総合的な学習の時間】』を参照されたい。



5. 多様な評価の方法

異なる方法や様々な評価者による多様な評価方法を組み合わせるとともに、評価を学習活動の終末だけでなく、事前や途中で位置付けて実施することも心がけたい。学習過程全般を通して、生徒の学習状況を把握し、指導に役立てることが大切である。

観察による評価

発表や話し合い・討論の様子、学習や活動の状況などを学習活動の過程を通じて観察に基づき評価する方法である。生徒の行動や発言、表情や動作、エピソードなどを評価資料とするには、観察記録簿（観察票やチェックリスト等）を用い、情報を蓄積しておくことが大切である。

【効果】

- ・記述シートや完成した作品では汲み取れない学習状況を見取ることができる。
- ・過程での評価に適している。
- ・即座に指導に生かすことができる。

【留意点】

教師自身が生徒の活動の様子を見取る目を磨くとともに、評価を行う際の視点を明確にしたり、生徒の行動を総合的に理解し、その状況を観点に照らして分析したりするなどの工夫が求められる。

制作物による評価

レポート・論文、ワークシート、ノート、作文及びプレゼンテーション資料、作品及びポスター製作物（結果）並びにその制作過程を通して評価する方法である。

【効果】

- ・制作物に寄せた生徒の興味・関心、目の付けどころ、発想や気付きなど、こだわりや学びの過程を評価することができる。
- ・生徒一人一人のよさや可能性、努力の様子などを個人内評価として生かせる。

【留意点】

制作の過程での学習の様子を見取ったり、結果を累積したりして、複数の情報から進歩の状況を的確に把握できるよう工夫し、評価に客観性をもたせるようにする。

ポートフォリオによる評価

学習活動の過程や成果などの記録や作品を生徒が主体的・計画的に集積したポートフォリオを基にした評価方法のことである。活動計画表や自己評価の記録、取材メモや感想、教師や友達、保護者や地域の人のコメント、写真や報告書などを資料として集積する。

【効果】

- ・継続的に資料をファイルに蓄積することから、問題解決や探究の過程を詳しく把握することができる。
- ・振り返りの機会を設ければ、生徒が思いや考えを整理したり、解決の見通しをもったりすることができる。
- ・保護者や進学先等への説明、第三者評価のための資料にも活用できる。

【留意点】

ただの集積物にならないよう、適宜資料の並べ替えや取捨選択をするなどの整理をさせ、自己の学習を見通し、振り返る機会を設けるようにする。

パフォーマンス評価

一定の課題の中で身に付けた力を用いて活動することを通して、その力がどのように発揮されるかを評価する方法のことである。課題解決の場面において、身に付けた力を複合的に活用する姿を見取る評価ともいえる。

【効果】

- ・ウェビング、成果をまとめたレポートやポスター、発表やインタビュー及びプレゼンテーション資料などを通して、身に付いた力を実際に発揮している姿を総合的に見取ることができる。
- ・生徒が自分で導き出した考え方、作り出した作品や解決の姿などから、個性や独創性を評価し、認めることができる。

【留意点】

身に付けた力を発揮し学習活動に取り組む生徒の姿について、「おおむね満足できる」状況を具体的に記述し、生徒と共有しておく必要がある。

自己評価や相互評価

自己評価とは、評価カードや学習記録などから、生徒が自らの学習の状況を振り返ることによる評価である。相互評価とは、生徒が互いの学習状況を評価し合うものである。

【効果】

- ・できるようになったことを明確につかみ、自己の高まりや成長といった変容を実感し、学習意欲の向上に結び付けることができる。
- ・自己評価能力や他人の評価を受けとめる力の育成にもつながる。

【留意点】

自己評価では、生徒によっては自分に厳しすぎたり甘すぎたりするなど、偏ったものになりやすい。そのため、互いの評価を確認し合う相互評価を組み入れ、自己評価することが考えられる。自己評価カードや振り返りカードに記述するだけでなく、授業中の発言やノートから自己の学習状況を確認し、その後の学習の見通しを自分で考えられるようにする。また、相互評価を取り入れることにより、今まで気付かなかった自分のよさや問題点に着目するようにする。

第三者評価（他者評価）

保護者や地域の人々、有識者、活動の相手等による評価のことである。

【効果】

- ・生徒の学習の様子が多面的に映し出され、教師が気付かなかった点を補うことができる。
- ・生徒への励ましが期待できる。
- ・自分たちの取組が認められ、成就感や自己肯定感の獲得につながる。
- ・自己評価の結果を第三者評価と照らし合わせ、客観的に捉えるなどのために用いることもできる。

【留意点】

評価者に対して、学習活動の趣旨やねらいなどを事前に伝え、十分な理解を得ておく必要がある。地域の人々や保護者等に対しては、どの機会にどのような方法で評価してもらうか、年間を見通した評価計画を立てておくことが大切である。

個人内評価

観点別学習状況の評価や評定には示しきれない生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況について評価するものである。

【効果】

- ・生徒が学習したことの意義や価値を実感できるようになる。
- ・個人内の特性や差異に注目することで、生徒一人一人のよい点や可能性を捉えることができる。
- ・個人の過去の学習状況と比較して、現在の学習状況进行评估することで、生徒一人一人の進歩の状況を捉えることができる。

【留意点】

個人内評価の対象となるものについては、生徒が学習したことの意義や価値を実感できるよう、日々の教育活動の中で生徒に伝えることが重要である。特に、「学びに向かう力、人間性等」のうち「感性や思いやり」など生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況などを積極的に評価し生徒に伝えることが重要である。

教師一人一人が、生徒の学習状況を的確に捉えるためには、評価の解釈や方法等を統一するとともに、評価規準や評価資料を検討して妥当性を高めること（モデレーション）などにより、学習評価に関する教師の力量形成のための研修を行っていく必要がある。

第2節 教育課程の評価

1. 教育課程の評価の基本的な考え方

教育課程の評価については、生徒や学校、地域の実態を踏まえて総合的な学習の時間の指導計画を作成し、計画的・組織的な指導に努めるとともに、目標及び内容、具体的な学習活動や指導方法、学校全体の指導体制、評価の在り方、学年間・学校段階間の連携等について、学校として自己点検・自己評価を行うことが大切である。そのことにより、各学校の総合的な学習の時間を不断に検証し、改善を図っていくことにつながる。そして、その結果を次年度の全体計画や年間指導計画、具体的な学習活動に反映させるなど、計画、実施、評価、改善というカリキュラム・マネジメントのサイクルを着実に行うことが重要である。

2. 教育課程の評価項目・指標等の検討

教育課程の評価に当たり、具体的にどのような評価項目・指標等を設定するかは各学校が判断すべきことではあるが、文部科学省が平成28年3月に改訂した「学校評価ガイドライン」には、その設定について検討する際の視点となる例が次のとおり示されている。これらの項目を参考にして、評価項目・指標等を検討することが考えられる。

- 学校の教育課程の編成・実施の考え方についての教職員間の共通理解の状況
- 児童生徒の学力・体力の状況を把握し、それを踏まえた取組の状況
- 児童生徒の学習について観点別学習状況の評価や評定などの状況
- 学校図書館の計画的利用や、読書活動の推進の取組状況
- 体験活動、学校行事などの管理・実施体制の状況
- 部活動など教育課程外の活動の管理・実施体制の状況
- 必要な教科等の指導体制の整備、授業時数の配当の状況
- 学習指導要領や各教育委員会が定める基準にのっとり、児童生徒の発達段階に即した指導の状況
- 教育課程の編成・実施の管理の状況
(例：教育課程の実施に必要な、各教科等の年間の指導計画や週案などが適切に作成されているかどうか)
 - ・児童生徒の実態を踏まえた、個別指導やグループ別指導、習熟度に応じた指導、補充的な学習や発展的な学習など、個に応じた指導の計画状況
 - ・幼小連携、小中連携、中高連携、高大連携など学校間の円滑な接続に関する工夫の状況
 - ・(データ等) 学力調査等の結果
 - ・(データ等) 運動・体力調査の結果
 - ・(データ等) 児童生徒の学習についての観点別学習状況の評価・評定の結果

これらについては、生徒の学習状況の評価の結果や学習活動のエピソード、教師による実践の反省や記録、外部人材や保護者へのアンケートなど、多様な評価情報を基に、日常的に改善に生かすことが考えられる。年間指導計画の中に評価の実施時期を適切に位置付け、評価情報の公開にも耐えうる、できるだけ客観的な評価となるよう、多様な評価方法を用いて組織的・継続的に取組を進めることが重要である。

3. 教育課程の改善と外部への説明

教育課程について評価が行われた後、それが改善に生かされなければ、評価の本来の意義は発揮されない。改善の方法としては、次のような手順が考えられる。

- ①評価の資料を収集し、検討すること
- ②整理した問題点を検討し、原因と結果を明らかにすること
- ③改善案をつくり、実施すること

教育課程の改善に当たっては、校長を中心としつつ、教科や学年を越えて学校全体で取り組んでいくことができるよう、学校の組織や経営の体制整備を図る必要がある。各学校の地域の実情や生徒の姿と指導内容を見比べ、関連付けながら、効果的な年間指導計画や単元計画の在り方や授業時間や週時程の在り方等について、校内研修等を通じて研究を重ねていくことも重要である。

このような取組を通して、各学校には多くの情報やデータ、意見などが蓄積される。これらについては、個人情報に配慮した上で、WEBページや学校通信を活用して公開したり、保護者や地域住民に直接説明したりすることも考えられる。その際、公表することが目的ではないことに留意し、何をどのように公表するかを整理しておく必要がある。公表する内容として、主に次のものが考えられる。

- 評価結果とその根拠
- 今後の取組を進めるのに必要な条件
- 教育課程の改善後の生徒の姿や活動の様子

また、積極的に授業を公開し、総合的な学習の時間で探究的に学ぶ生徒の様子を直に見てもらうことで理解を広げることも大切にしたい。このような保護者や外部への公開や説明は、総合的な学習の時間への理解を促進させ、その後の総合的な学習の時間の充実のために協力してもらうことにもつながる。

第6章

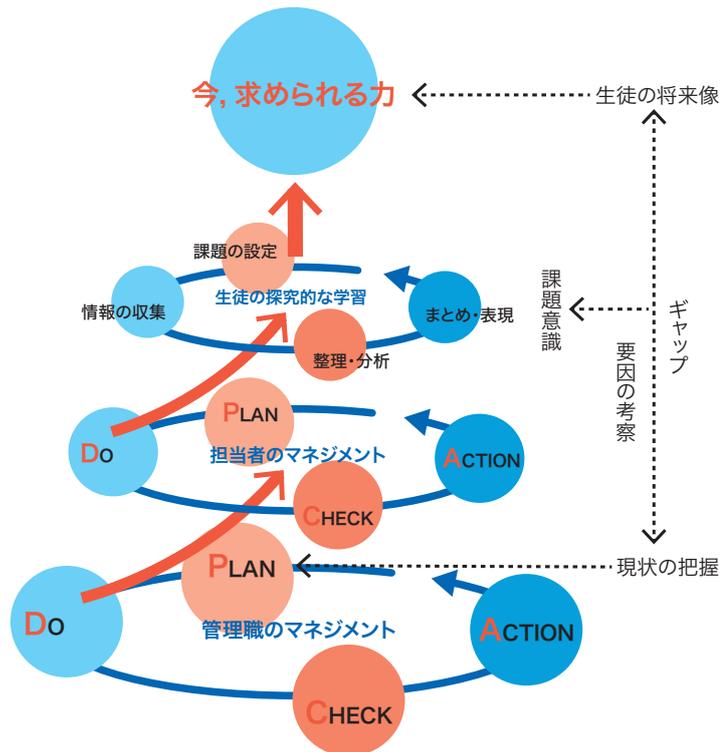
総合的な学習の時間を支えるための体制づくり

第1節 体制整備の視点と校長のリーダーシップ

1. 求められる校長のリーダーシップ

各学校においては、育成を目指す資質・能力を明らかにし、教科等横断的な視点をもって教育課程を編成・実施する中で、地域の人的・物的資源を活用するなどして実社会・実生活と生徒が関わることを通じ、変化の激しい社会を生きるために必要な資質・能力を育むことが求められている。校長は、資質・能力の育成に向けて、生徒が実社会・実生活と接点をもちつつ、多様な人々とつながりを持ちながら学ぶことのできる教育課程の編成と実施を以下のようなサイクルで行うことが求められる。

- ①地域や学校、生徒の実態等の現状を把握する。
- ②育成を目指す生徒の姿等を目標として設定する。
- ③目標と現状のギャップを分析し、目標の達成を促す要因や阻害する要因を考察する。
- ④目標の達成度を測る具体性のある評価指標を決める。
- ⑤適切なカリキュラムを編成し、それを支える体制を整備する。
- ⑥指導計画に沿って実践する。
- ⑦成果・効果进行评估・省察してカリキュラムを改善する。



その際、校長のリーダーシップの下、全教職員が学級、学年の枠を越えた、研究実践や意見交換等を実施しながら、適切な指導計画を作成することが重要となる。また、指導計画を作成する際も、実施する際も学校の外部との連携が必要となり、ここにも校長のリーダーシップが必要となる。

2. 体制整備の4つの視点

総合的な学習の時間は、生徒が実社会・実生活に向き合い関わり合うことを通じて、自らの人生を切り拓いていくために必要な資質・能力を育成し、人生や社会をよりよく変えていくことに向かう特質を有する。教育目標の実現に当たって総合的な学習の時間が重要な役割を果たすことから、その教育的意義や教育課程における位置付けなどを踏まえながら、校長は、自校のビジョンを全教職員に説明し、総合的な学習の時間の目標及び内容、学習活動等について決定することが肝要である。また、全教職員は、自校のビジョンに基づき総合的な学習の時間の目標が達成できるように、協力して全体計画及び各学年の年間指導計画、単元計画などを作成し、互いの特性や専門性を発揮し合って、生徒が質の高い豊かな学習活動に取り組めるようにすることが求められる。そのために、校長は、以下に示す四つの視点を考慮した校内の体制づくりに力を尽くす必要がある。

体制整備のための四つの視点

<p>校内組織の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒の多様な学習活動や学習形態への対応 <ul style="list-style-type: none"> ・全教職員が一体となり協力できる校務分掌 ・教職員の特性や専門性を生かした役割分担 ○ 教職員間の連携促進 <ul style="list-style-type: none"> ・総合的な学習の時間推進担当（コーディネーター）に対する指導と支援 ・校内推進委員会の充実 	<p>授業時数の確保と弾力的な運用</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 年間授業時数の確保 ○ 目的に応じた単位時間等の弾力化 <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の実態、指導内容のまとめ、学習活動等を考慮して、効果的な単位時間・時間割を設定 ○ 1年間を見通した授業時数の運用 <ul style="list-style-type: none"> ・各学校の創意工夫による年間指導計画等の作成 ・活動の特質に応じ長期休業期間の効果的な活用
<p>学習環境の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 学習空間の確保 <ul style="list-style-type: none"> ・多様な学習形態に対応し、掲示等による生徒の学習への関心等を喚起できる学習空間の確保 ○ 学校図書館の整備 <ul style="list-style-type: none"> ・学校図書館の学習・情報センターとしての機能の充実 ○ 情報環境の整備 <ul style="list-style-type: none"> ・ICT環境の充実と教師のICT活用指導力の向上 	<p>外部との連携の構築</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 地域の教育資源の積極的活用 <ul style="list-style-type: none"> ・日常的な連携による協力的システムの構築 ・地域連携を推進する組織の設定と教師の配置 ・地域資源リストの充実と活用 ○ 総合的な学習の時間の成果の伝達 <ul style="list-style-type: none"> ・成果発表の場と機会の設定 ・学校と家庭・地域との信頼関係の構築 ○ 地域の活性化に向けた生徒による地域貢献

校長のリーダーシップの下に進める校内組織の整備・活性化



学校の教育目標を踏まえた総合的な学習の時間の意義を校内外と共有する

第2節 組織整備の実践事例

今回の学習指導要領改訂により、総合的な学習の時間の目標や内容が各学校の教育目標を踏まえて設定されることとなり、教科等横断的なカリキュラム・マネジメントの軸となることが明確になった。各学校においては、全教職員が自校の教育目標の実現に当たって総合的な学習の時間が重要な役割を果たすことを理解した上で、校長の方針に基づき、総合的な学習の時間の目標を達成できるように、協力して全体計画及び各学年の年間指導計画、単元計画などを作成するとともに、校内推進体制の充実を図る必要がある。

本節では、生徒に対する指導体制と実践を支える運営体制の二つの観点から、総合的な学習の時間の校内推進体制の在り方について実践事例を紹介する。

1. 指導体制と運営体制の整備

(1) 生徒に対する指導体制

総合的な学習の時間では、探究的な学習の幅が広がったり学習活動が多様化したりすることや、生徒の追究が次々と進化したりすることから、学級担任だけでは対応できない場合も想定しておく必要がある。こうした場合、中学校の強みである教科の専門性を生かして担当したり、チーム・ティーチングで指導する体制を整えたり、学級枠を外して指導を分担したりする工夫が考えられる。また、生徒の追究内容によっては、養護教諭、栄養教諭、司書教諭等の専門性を生かした指導体制を整えることも考えられる。

地域によっては近隣の中学校と連携して総合的な学習の時間の進め方を相談したり、同じ市内の中学校で共通の探究課題を設定して同一歩調で進められる体制を整えたりすることも考えられる。この場合は、校長のリーダーシップのもと近隣の中学校の校長同士が連携を図り、各学校の総合的な学習の時間コーディネーターが相談できる場を設定できるように配慮することが重要となる。

事例① 学年教師が学級枠を外した学習集団を分担して指導した例

《A中学校の概要》

●生徒数533人 ●学級数18学級 ●教師数35人 ●学区域の特色 都市部住宅地

A中学校は、1学年5学級編成の中規模校で、3年生は個人テーマを設定しゼミ形式で探究に取り組みました。5人の学級担任が学級枠を外して、生徒の興味・関心により設定した5つのテーマに基づきゼミを開設し、1年間ゼミ形式で探究を進めました。総合的な学習の時間コーディネーターを含め学年の教師が連携して、探究の進め方の検討をしたり、進捗状況について情報共有をしたりしながら指導体制を整えました。ゼミ担当は、得意分野を担当したりティーム・ティーチングで行ったり生徒の学習状況に応じて学年の教師で臨機応変に対応できる体制で取り組みました。

生徒の学習活動	学年教師の指導に関わる動き
<u>1年間の見通しの概要説明（各学級）</u> ●個人テーマを設定して取り組むこと、1年間の出口となる成果発表会に向けての探究のプロセスの見通しをつかむ。 ●自分が探究したい個人テーマを絞り込む。	<u>学年会議（総合的な学習の時間コーディネーター参加）</u> ●個人テーマの設定の仕方の確認や、学習活動の見通しをもつ。 ●個人テーマを基にゼミを編成し教師の担当を割り振る。
<u>ゼミに分かれゼミテーマを検討する</u> 自然科学ゼミ 文化芸術ゼミ 町おこしゼミ 健康福祉ゼミ 環境問題ゼミ ●ゼミテーマについて1年間追究することができる課題であるかについて、ゼミの中で検討する	<u>ゼミテーマを明らかにする働きかけ</u> ●ゼミテーマを例にして、仮説や1年間の追究の見通しを検討する中で、教師が生徒にどのように助言するとよいのかを学び合う。
<u>ゼミに分かれ情報の収集の実施</u> ●校外や特別教室に分かれて情報の収集を行う。	<u>学年会議</u> ●調査場所の確認、引率分担を行い生徒が安全に活動できるよう配慮する。
<u>調査して明らかになったことを基に中間報告会</u> ●明らかになったことの確認と情報交流を行う。 ●わかりやすい伝え方を考える。	<u>相手意識を大切にした指導</u> ●ゼミ担当が指導。伝えるべきこと、さらに調査が必要なことを明確にさせる。
<u>情報の収集と整理・分析を重ね発表の準備</u> ●不十分な点について情報の収集を行う。 ●情報を整理して、結論や解決策を検討する。	<u>学年会議</u> ●進捗状況を調整。各ゼミの生徒の探究の様子を情報交換する。
<u>成果発表会</u> ●1年間の探究の成果を保護者、地域、他学年に発表する。 ●1年間の探究の取組について振り返りを行う。	<u>発表会の運営</u> ●機材、会場等準備の分担をする。

事例② ○○市内の全中学校が連携して指導した例

《○○市 中学校の概要》

- 学校数8校（生徒数：100人以下4校，101人～200人2校，201人～300人2校）
- 学区域の特色 人口減少が進む農村地域

○○市には8校の中学校があり、そのうちの半数が全校生徒100人を下回る学校です。○○市では、ふるさと○○市について学ぶ○○学に全中学校で取り組んでいます。3年生のゴールとして、○○市教育フォーラムにて各中学校の第3学年が総合的な学習の時間に探究してきた○○市の未来について語り合う場を位置付けています。

そのゴールに向かって、○○市内中学校の第3学年では共通の探究課題を設定して、探究を進め、学校規模によりプロジェクトチームや学級を母体として取り組んでいます。

4月当初には、第3学年の学級担任や所属の教師がオンライン会議で年間のスケジュールの確認や探究の

進め方についての相談会を行っています。こうすることで、小規模校の中学校においても質問や相談をしながら進めることができる体制をとっています。

以前は、夏季休業日を活用して第3学年所属の教師が集まり進捗状況を確認し教育フォーラムに向けての相談を行っていましたが、コロナ禍においてオンライン会議が普及したことにより上記の表のように月に1回程度相談会をもつことができるようになりました。この会は、毎月第2月曜日の放課後などで行うようにしており、参加できない場合は会を録画したものを視聴できるようにしています。

また、必要に応じて○○市内の学校で使用している共有ファイルや掲示板を活用して、学習プリント等を閲覧できるようにし、各学校での総合的な学習の時間の指導の参考になるよう工夫しています。このような取組は、学年会で相談して取り組むことが難しい小規模校のサポートにとどまらず、市内全体の総合的な学習の時間における探究の質を高めていくことにつながっています。

○○市内中学校の教育フォーラムに向けた相談会	
4月	<ul style="list-style-type: none"> ■年間のスケジュール調整 ■1年間の探究の進め方の確認
5月～7月	<ul style="list-style-type: none"> ■進捗状況の確認 ・情報の収集の仕方や、現地調査について情報共有をする。 ■中間報告会の運営・準備の確認
9月	<ul style="list-style-type: none"> ■中間報告会 ・今後の探究を進めていくポイントを共有できるようにする。
10月～12月	<ul style="list-style-type: none"> ■修正点・進捗状況の確認 ・効果的なプレゼンの仕方、データ分析について教師間で交流する。
1月	<ul style="list-style-type: none"> ■教育フォーラムで発表 ・各中学校から、未来の○○市について提案し、質疑・応答する。
2月	<ul style="list-style-type: none"> ■各学校での発表 ・地域の方、保護者、他学年の生徒に対して発表する。

事例③ 教師の特性や専門性を生かして生徒の興味・関心を広げる実践例

《B中学校の概要》

●生徒数498人 ●学級数17学級 ●教師数33人 ●学区域の特色 都市部住宅地

B中学校では、生徒の興味・関心を広げることができるよう集中講座を開設しています。この集中講座は、教師が自身の特性や専門性を生かした分野において講座を開設したり、外部講師を招聘したりしています。この集中講座は、7月の第1週目の午後からの5,6時間目の2時間を3日間、合計6時間開催されています。教師は、次の4つの講座の種類の中から1つずつ講座を開設します。

【講座の種類】

A：「学び方」講座（講師は教師のみ）

「学習の手引き」を活用した「学び方」を学ぶ講座を仕組む。

B：「講義形式」の講座（教師または外部講師）

大学の講義のようなイメージで、講師または教師の講義を聴く講座を仕組む。

C：「体験・活動」の講座（教師または外部講師。2時間続きの講座になる場合もある。）

実体験や活動、実習をベースとした講座を仕組む。

D：「生き方を学ぶ」講座（教師または外部講師）

様々な職業に携わる方から、その生き方や職業について学んだり、自己の生き方を考えたりするための講座を仕組む。

生徒は、3日間で自分の興味・関心のある中から選択することができます。生徒にとっては4月から総合的な学習の時間に取り組んできたことを、さらに深めることができます。

この集中講座が7月に位置付いているのは、夏季休業日に向けて総合的な学習の時間に取り組んできたことをさらに深められるようにするねらいがあります。また、この集中講座がきっかけとなり、夏季休業日に行う自由研究のテーマとして取り組めるようにもしています。

この集中講座は、総合的な学習の時間で生徒が楽しみにしている活動であることがアンケート結果にあらわれています。この結果を踏まえ、生徒のニーズなども反映しながら集中講座の内容を毎年ブラッシュアップして教師は講座を開設しています。

この集中講座は総合的な学習の時間について教師自身が学ぶ場ともなっています。

集中講座開催までの流れ

1 教師から講座開設の希望を募る

- 4つの種類の中から1つずつ講座を開設する。
- 外部講師を招聘するか検討する。

2 集中講座時間割をコーディネーターが作成する

- 4つの種類をバランスよく作成する。
- 外部講師との調整を行う。

3 生徒に講座受講の希望をとる

- 生徒は第1～3希望を決めて、提出する。
- 4つの種類を1つずつは受講する。

4 コーディネーターが生徒の希望を調整する

- 生徒の希望を優先できるように調整する。
- 会場や機器の調整を行う。

5 生徒に受講決定を伝える

- 受講場所や持ち物等について確認を行う。
- 受講する際の心構えについて指導する。

事例④ 全教師が第1～3学年の縦割りグループ活動を協力して指導した例

《C中学校の概要》

●生徒数320人 ●学級数9学級 ●教師数25人 ●学区の特色 中都市部

C中学校では、各学年の生徒2～3名ずつの異学年による縦割りグループを編成し、3年間を通して下級生は上級生の探究活動の様子を見ながら経験を積みながら学んでいきます。上級生はグループの探究活動の中心として活動し、探究のスキルだけでなく、リーダーシップやコミュニケーション力等も身に付けていきます。

第1学年の生徒たちは、入学後間もなく探究ガイダンスにおいて総合的な学習の時間の趣旨や内容についての説明を受けます。その後、第2学年や第3学年から、それぞれのグループの探究計画や探究内容についてのプレゼンを受け、自分の興味・関心に基づいて入りたい縦割りグループを決定します。そして、新たに編成された縦割りグループにおいて、1年間の探究テーマ、探究方法について検討します。

探究特別講座では、探究スキルを学ぶための講座を複数開設し、それぞれの生徒が必要と考える講座を選択し、受講します。講座の内容は、生徒の探究の様子やテーマなどを踏まえ、毎年検討しています。

探究活動の成果については、中間発表会、探究成果発表会、そして最終論文（3年生は卒業論文）で発表します。他の縦割りグループと意見交換をすることで、今後の探究活動の参考にしたり、自分たちの取組の足りないところを見つめ直したりすることができます。

縦割りグループの指導は全教師が担当しています。それぞれの教師の専門性に応じて、「環境」、「教育・保育」、「データサイエンス」、「スポーツ科学」、「多文化共生」等の大まかなテーマが決まっており、そのテーマに基づき、生徒と教師が共に探究テーマや探究方法を考えていきます。

縦割りグループ活動による学習の大まかな流れ			
時期	学年	第1学年	第2学年・第3学年
4月		探究ガイダンス	探究テーマ・探究方法の練り直し
		新入生への探究計画・探究内容についてのプレゼン	
5月		縦割りグループ編成会議	
		縦割りグループ決定	
		探究テーマ・探究方法の練り直し	
6～9月		縦割りグループでの探究活動	
		中間発表会	
		夏季休業日での個別の探究活動	
		探究特別講座	
10～12月		縦割りグループでの探究活動	
		探究成果発表会	
1月～3月		最終論文・卒業論文執筆	

(2) 実践を支える運営体制

学校は組織体として運営されており、教師や校内組織がそれぞれに連携して教育活動を営んでいる。特に総合的な学習の時間では、探究的な学習の広がりや深まりによって、複数の教師による指導や校外の支援者との協力的な指導が必要になる。そのため、指導方法や指導内容などをめぐり、指導する教師が気軽に相談できる仕組みを校内組織に位置付けていくことも大切になる。さらに、指導に必要な施設・設備の調整や予算配分、予算執行の役割も校内に必要である。

校長は、自校の実態に応じて既存の組織を生かすことに加え、新たな発想で、実践を支える運営体制を整備し、生徒の学習活動を学校全体で支える仕組みを校内に整える必要がある。

事例① 小規模校D中学校の運営組織の例

《D中学校の概要》

●生徒数72人 ●学級数3学級 ●教師数15人 ●学区域の特色 へき地

全学年1学級の小規模校D中学校は、教職員数も少ないことから、教師が複数の校務分掌を担当しなければならない実態がありました。

総合的な学習の時間の担当者を1名置いていましたが、学級担任がそれぞれの思いで活動を設定し、指導しており、学校として育成を目指す資質・能力につながっていかないという課題が見られました。

今年度、全教師が教科等の専門性を発揮できる指導体制づくりを進めるとともに、学校の全体計画に即して指導を行うことにもなりました。このことにより、教師同士が活動や指導について相談し合う場面が増え、全教師が学年、学級の壁を越えて、情報交換・実践交流が行われるようになりました。

●D中学校の総合的な学習の時間についての分掌内容

教職員	校務分掌	総合的な学習の時間についての分掌内容
a 教頭		運営体制の整備、校外の支援者、支援団体との渉外
b 主幹教諭	教務主任 ICT 担当	各種計画の作成と評価、時間割の調整、指導の分担と調整、情報機器等の整備及び配当
c 教諭	生徒指導主任	学習活動時の安全確保、小学校との連携の推進
d 教諭	1 学年担任 総合担当	校内の連絡・調整、研修、相談 ★総合的な学習の時間コーディネーター
e 教諭	2 学年担任 研究主任	学年内の連絡・調整、研修、相談 研究計画の立案、校内研究実施
f 教諭	3 学年担任	学年内の連絡・調整、研修、相談
g 教諭	進路指導主任 司書教諭	職業や自己の将来に関する学習に関わること、高等学校との連携の推進、必要な図書整備、生徒の図書館活用支援
h 教諭	養護教諭 保健主任	学習活動時の健康管理・健康教育に関わること、食育に関わること

事例② E義務教育学校の運営組織の例

《E義務教育学校の概要》
 ●児童生徒数108人（前期課程73人，後期課程35人） ●学級数10学級 ●教師数28人
 ●学区域の特色：中山間地域の〇〇村にある小学校と中学校を統合して開校

開校前の小学校と中学校とでは、各学年により総合的な学習の時間の年間指導計画や単元計画が作られ学習活動が推進されていました。しかし、全体計画との整合性を意識しないで学習が行われたり、異学年（児童生徒・教師）との交流がほとんど計画されていなかったりする課題がみられました。

そこで、義務教育学校の開校を機に教育課程の中核に総合的な学習の時間を位置付け、〇〇村の自然・歴史・伝統・文化・産業・暮らし・行財政に関わる学びを通して、〇〇村の未来を担う「ひとりだち」の力を育てる取組をスタートさせました。また、表にあるように村民憲章との関連も意識付けることで、〇〇村の担い手の育成を目指した取組となっています。

組織としては、義務教育の9年間で4-2-3のブロック指導体制とし、ブロックで総合的な学習の時間の7つの学習項目を担当します。同表中の◎が示してあるブロックが中心となり9年間の系統を考えてカリキュラム開発を進めています。このカリキュラムを計画、実施、評価、改善していくために「総合的な学習の時間推進委員会」を立ち上げました。この委員会の構成員は以下のとおりです。

【総合的な学習の時間推進委員会のメンバー】
 (学校) ○副校長 ○教務主任 ○ブロック長 ○総合的な学習の時間コーディネーター
 ○研究主任
 (地域) ○地域コーディネーター（学年ごとに学校運営協議会が選定した地域の方）
 ○ふるさとアドバイザー（様々な授業・活動を支援してくださる地域の方）

外部との連携をしていくために、地域コーディネーター、ふるさとアドバイザーにも参加してもらい月に1回程度開催し協働的な取組を行っています。地域コーディネーターを学年ごとに選出したことで、総合的な学習の時間のニーズに合った外部講師の依頼がスムーズに行われるようになりました。

E義務教育学校の各学年の探究課題と村民憲章との関連

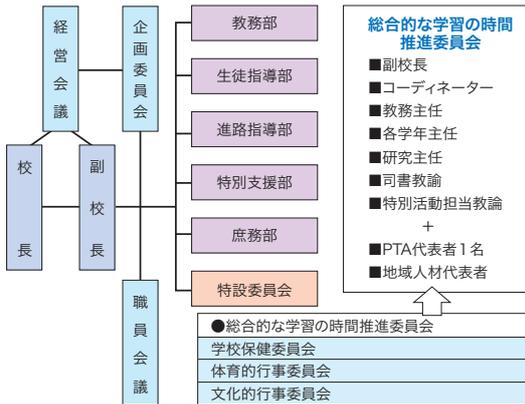
ブロック	学年	探究課題	関連する村民憲章の条文	学習項目						
				自然	歴史	伝統	文化	産業	暮らし	行財政
高ブロック (総合的発達力育成期)	9年	いつまでも住み続けたい村づくり	動き出そう！ 〇〇人として	●	●	●	●	◎	●	◎
	8年	いつまでも住み続けたい村づくり	たがいに力を合わせ住みよい村をつくりましますⅡ	●	●	●	●	◎	●	◎
	7年	〇〇村の現在の担い手	たがいに力を合わせ住みよい村をつくりましますⅠ	●	●	●	●	◎	●	◎
中ブロック (多面的思考育成期)	6年	〇〇村の暮らしを守る仕組み	純粋な心を失わず感謝の生活をします		◎	◎	◎			●
	5年	〇〇村の伝統行事や芸能をつなぐ	豊かな文化をたっぴ伝統をいかしますⅡ		◎	◎	◎			●
低ブロック (主体性育成期)	4年	〇〇村の伝統的建造物	豊かな文化をたっぴ伝統をいかしますⅠ		●	●	●			◎
	3年	〇〇村の自然とともに生きる	きびしい自然に負けずたくましく生きます	◎	●	●	●			◎
	2年	〇〇村の自然をつなぐ	美しい風土を誇り自然を守りますⅡ	◎	●					◎
	1年	〇〇村の豊かな自然	美しい風土を誇り自然を守りますⅠ	◎						

◎ 強く関連する学習項目
 ● 関連する学習項目

事例③ 大規模校F中学校の運営組織の例

《F中学校の概要》

●生徒数842人 ●学級数27学級 ●教師数53人 ●学区域の特色 住宅と商店に囲まれた旧市街地



大規模校のF校では、各学年により総合的な学習の時間の年間指導計画や単元計画が作られ学習活動が推進されていました。

学年を超えて全体計画との整合を図りつつ、総合的な学習の時間をより共同的に行うためコーディネーターと各学年担当者等が月に1度、情報交換・協議を行う「総合的な学習の時間推進委員会」という委員会組織を立ち上げました。

F中学校「総合的な学習の時間推進委員会」における会議内容

- 総合的な学習の時間の全体計画の作成(改善)
- 各学年の年間指導計画・単元計画の作成(改善)
- 教師の指導体制の検討
- 情報交換による共通理解
- 「通信・広報」の編集
- 校内研修の企画
- 学習活動に合わせた時間割の工夫
- 各学年の活動場所の調整
- 特別活動担当との調整
- 保護者説明会の企画
- 関係機関との調整
- 施設・人材リストの作成、利用の手引きの作成
- カリキュラム・マネジメントの三つの側面から総合的な学習の時間の実施状況の評価
- 評価結果による改善策の検討
- 総合的な学習の時間の評価規準の設定
- 評価法(ポートフォリオ、パフォーマンス、自己・相互評価)等の検討
- 地域素材の教材化、地域内の施設の積極的な活用、適切な体験活動、多様な学習形態の工夫など
- 学校間(近隣小・中学校、姉妹校)の交流の検討
- 校種間(小学校、高等学校)の連携の検討

F中学校「総合的な学習の時間コーディネーター」の具体的な職務内容

【指導計画の作成】 ●全体計画作成の中心となる ●学年の年間・単元指導計画作成を支援する	・地域や地域人材の実態・特性を知るため地域巡りや地域の人との交流等を積極的に行う。 ・自校の教育課程・校長の経営方針を熟知するよう努力する。 ・生徒・教師・保護者等の思いや願いを理解するよう努力する。 ・総合的な学習の時間についての理解を一層深めるために関連する研究会、研修会等に主体的に参加し自己啓発に努める。
【教職員の協働の促進と意欲の向上】 ●校内推進組織を運営する ●情報交換を活性化させる ●校内研究との関連を図る	・定期的な情報交換会を企画・実施する。 ・学年を超えて協働して実施する学習を提案、実施する。 ・各学年の授業の情報を収集し、その取組のよいところを随時、職員会議等で積極的に伝える。また、「通信・広報」に記載し発行する。 ・若手教師の指導について直接指導助言を行う(OJTの実施)。 ・校内研究等を先導する。また、先進事例等を集め随時報告する。
【保護者、地域、他校、異校種との連携の推進】 ●連絡会を開催する ●授業公開を実施する ●「通信」を発行する	・玄関横に保護者・地域向けの掲示板を設置し、写真等による学習状況の報告や協力要請の呼びかけを提示する。また、オンラインでも参加できるようにするため、オンライン会議システムの準備・運営などを行う。 ・教師がPTA・地域行事、学校公開に出席するよう働きかける。 ・近隣校の総合的な学習の時間の内容等を自校で定期的に報告する。 ・近隣中学校との共同校内研究会を開催する。近隣校の総合的な学習の時間に関わる合同研修会に参加する。
【指導計画・内容等の評価と改善】 ●活動の成果を検証する ●校内内外の評価を実施する	・全児童生徒のポートフォリオ評価等を実施する。 ・国・自治体実施の学力調査・意識調査との関連を分析し、成果と課題を考察し全教師に紹介する。 ・年2回、指導計画等についての自己評価を実施し改善に結び付ける。

2. 校内研修等の充実

総合的な学習の時間を充実させ、その目標達成に向けた鍵を握るのは指導する教師の指導計画の作成と運用の能力、授業での指導力や評価力などである。地域や学校、生徒の実態に応じて特色ある学習活動を生み出していく想像力も必要となる。授業研究では、生徒の学習に取り組む姿を通して教師の指導について評価し指導力の向上を図ることが必要である。また、総合的な学習の時間の授業を公開し互いに学び合えるようにしておくことも大切である。さらに、総合的な学習の時間の全体計画、年間指導計画、単元計画、実践記録、生徒の作品や作文等の写し、映像記録、参考文献等を整理・保存し、いつでも活用できるようにしておくことも、研修の推進にとって有効である。このようにして取り組む校内研修は、教師間の協働性を高める上でも重要である。

総合的な学習の時間は、教師がチームを組んで指導に当たることにより、生徒の多様な学習活動に対応できることから、教職員全体の指導力向上を図る必要もある。加えて、各学校の教育目標の実現や目指す資質・能力の育成について教科等横断的な視点からカリキュラムをデザインする力も求められている。今後の校内研修においては、校長のリーダーシップの下、学習指導の改善に加え、教育課程全体を俯瞰して捉え、教育課程の改善を図ることをねらいとした総合的な学習の時間の研修を積極的に取り入れることが必要である。特に、今回の学習指導要領改訂により、総合的な学習の時間の目標は各学校の教育目標を踏まえて設定することとされ、教科等横断的なカリキュラム・マネジメントの軸となることが明らかとなったことから、学校全体で行う教職員研修計画の中に総合的な学習の時間のための研修を位置付け、確実に実施することが極めて重要である。

●研修内容（例）

- ・総合的な学習の時間の目標及び内容、育成を目指す資質・能力について
- ・総合的な学習の時間の教育課程における位置付け、各教科・道徳科・特別活動との関連
- ・全体計画、年間指導計画、単元計画の作成及び評価について
- ・教材開発の在り方や地域素材の生かし方、外部との連携について
- ・学習活動の安全確保について
- ・ICTの活用について など

●研修方法（例）

（校内）

- ・グループ研修：指導計画作成や教材作りの演習、探究課題に基づくワークショップ など
- ・全校研修：視察報告会、講師を招いての講義 など

（校外）

- ・実地体験研修：生徒の体験活動の臨地研修とその評価 など
- ・教材収集研修：地域における教育資源となるものの観察や調査 など

なお、校長は校外で行われる研修会や研究会に積極的に職員を派遣し、その成果を自校の実践に役立てることが大切である。また、近隣の学校同士で実践交流を行い互いに学び合う機会を設けることも実践力の向上に役立つ。

事例 小学校と中学校が定期的に協働で行うワークショップ型研修の例

《G小学校の概要》

- 児童数357人，教師数22人
- 学級数 各学年2学級，計14学級

《H中学校の概要》

- 生徒数295人，教師数26人
- 学級数 各学年3学級，計9学級

- 学校・学区の特色：小中一貫教育校，政令指定都市，古くからの商業地（商店街）と周辺の住宅地からなる学区
- 探究課題：「町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人々や組織」

H中学校は，大都市の商業地域にある中規模校です。近年，自治体から近隣G小学校との小中一貫教育の指定を受けましたが，なかなか小・中学校を共通の理念で貫いた教育課程編成が進まず，苦心していました。また，教師間の交流等も停滞していました。

そのような中，H中学校の校長は，小中一貫教育の重点的な目標を「9年間の連続性のある学力向上策の展開」に加え，「市民性の育成に向けた地域に関わる学習の推進」とすることをG小学校の校長に提案しました。協議の結果，「市民性の育成」については，総合的な学習の時間を中心に，社会科，道徳科，特別活動を関連させることとなりました。

そして，両校の校長は，中学校と小学校の教師間の交流の活性化を期待して，研究主任や総合的な学習の時間コーディネーターに，交流のしやすさや必然性から，「総合的な学習の時間の単元づくり」を内容とした小・中学校全教師参加によるワークショップ型研修の実現に向けた調整等を行うように指示しました。研修会の経過と研修の内容については以下のとおりです。

研修会の準備から実施までの経過と研修の内容

時期	会議	協議，検討内容・研修内容
4月	第1回合同研修会 (全体会) 会場：H中学校	<ul style="list-style-type: none"> ●H中学校研究主任から「市民性の捉え方」，育てたい児童・生徒像，推進組織，研修計画等を説明。 ●総合的な学習の時間についての学習指導要領の理解を深める。 ●自己紹介後，ワークショップのグループづくりを行う。 ・9グループを編成する(1グループ5人又は6人) ・全てのグループは，所属学年，校種，経験等の偏りがないように編成する。 ・各グループに必ずまとめ役となる研究推進委員が入る。
8月	第2回合同研修会 「地域素材発掘 ワークショップ」 会場：G小学校	<ul style="list-style-type: none"> ●ワークショップの進行は外部講師(大学教授)を招聘する。 ●グループごとにワークショップを行う。 ●各グループは，地域マップを広げ，「市民性」を育むための地域素材について話し合うとともに，その素材をどの学年の何の学習活動で活用できるか，具体的な単元計画を作成し，プレゼンにまとめる。 ●資料完成後，全グループが集まり，報告を行う。 ●研修会終了後，研究推進委員が集まり，この日のワークショップの振り返りと次回の内容について協議を行う。

10月	第3回合同研修会 「授業研究ワークショップ①」 会場：H中学校	●「地域素材発掘ワークショップ」で発表された学習活動についての研究授業を実施する。 ●研究授業終了後、各グループに分かれ、この日の研究授業の単元・学習活動をさらによくするための改善方法・内容について話し合う。 ●研修会終了後、研究推進委員が集まり、この日のワークショップの振り返りと次回の内容について協議を行う。
2月	第4回合同研修会 「授業研究ワークショップ②」 会場：G小学校	●「授業研究ワークショップ①」と同じ進め方で実施する。



コラム 総合的な学習の時間を進める中で教師が育つ
—OJTの中で高められる教師としての専門性—

総合的な学習の時間を充実させるためには、指導計画を策定し、運用する力が必要となります。また、実践に伴って次々と生まれる諸課題を解決する力や地域人材等と調整する力も必要となります。

このことから、日常において総合的な学習の時間の改善努力を行うこと自体がOJTであり、教師としての専門性が磨かれます。ある自治体では、若手の教師を対象とした総合的な学習の時間のカリキュラムづくりや、新任校長を対象とした総合的な学習の時間を中核とするカリキュラム・マネジメントについての研修を位置付け、さらなる専門性の向上を図っています。

計画・準備段階で高められる専門性

- ・指導計画を作成する力、授業（学習活動）を構想する力
- ・学習指導要領及び学習指導要領解説についての理解
- ・生徒、地域等について、分析する力、実態把握する力
- ・自校教師、他校教師や地域人材との交渉力、調整力 等

学習実施段階で高められる専門性

- ・生徒の興味を引き出し、個に応じた指導をする力
- ・話し合い活動など集団による学習を支援・統制する力
- ・学習状況を的確に把握し、授業を進める力、評価する力
- ・生徒の思いや願いを理解する力
- ・他教師、外部人材と協力して指導する力 等

事後評価段階で高められる専門性

- ・評価規準に照らして生徒の達成状況を評価できる力
- ・指導計画等の課題を見出す力、活動の成果を見出す力
- ・指導計画、授業（学習活動）を改善する力 等

OJT (On The Job Training)とは、日常的な職務を通して、必要な知識、技能、意欲等を意図的、計画的、継続的に高めていく取組(人材育成)

第3節 授業時数の確保と弾力的な運用の実践例

総合的な学習の時間の年間授業時数は、目標及び内容、育成を目指す資質・能力を指導するのに実質的に必要な時間であり、年間70単位時間（第1学年は50単位時間）を確保することは前提条件として考慮されなければならない。また、総合的な学習の時間においては探究的な学習を基本とする特質を踏まえ、目標及び内容を考慮し教育効果を高める観点に立って70分で授業を行ったり、特定の期間に授業を行ったりするなど、授業時間を弾力的に扱ったり、週当たり授業時数の配当に工夫を加えたりするなど柔軟な運用が求められる。さらに、総合的な学習の時間の授業時数を確実に確保し柔軟に運用していくには、地域の行事や学校行事、季節や植生の変化などに目を向けながら、年間指導計画及び単元計画に授業時数を適正に配当しておくことが第一に必要となる。体験活動を重視する総合的な学習の時間は、ややもすると授業時数が不必要に増大していくことがあることから、短期的かつ長期的な見直しをもった計画づくりと、適切な時数管理が肝要となる。授業時数の管理については、実施しながら日常的に適切かどうかを見直していくものの、学期末などの大きな節目に実施時数を積算し学習活動の進展の状況と照らし合わせ、学習活動の見直しも必要である。

事例① 固定時間割を工夫して運用した事例

《I 中学校の概要》

●生徒数751人 ●学級数24学級 ●教師数57人 ●学区の特色 都市部住宅地

I 中学校の第1学年は、総合的な学習の時間の年間指導時間数が50時間です。年間を35週と考えると週当たりの総合的な学習の時間の時間数は、1時間が20週と2時間が15週になります。一方、音楽科と美術科の年間指導時間数は45時間であるため、週当たり1時間が25週と2時間が10週となります。そこで、総合的な学習の時間と音楽科と美術科とを組み合わせた次のA～Cの時間割を考えました。

A…総合的な学習の時間(2時間)・音楽科(1時間)・美術科(1時間)の組み合わせを15週

B…総合的な学習の時間(1時間)・音楽科(2時間)・美術科(1時間)の組み合わせを10週

C…総合的な学習の時間(1時間)・音楽科(1時間)・美術科(2時間)の組み合わせを10週

第1学年では、探究課題を「身の回りの高齢者とその暮らしを支援する仕組みや人々」として取り組んでいます。その出口では、高齢者の方が喜んでいただけるよう、学級によっては、高齢者施設を訪問して合唱を披露したり、美術作品を作成して届けたりしています。そのため、学級担任と音楽科、美術科の教科担任と指導内容について連携を図り、横断的なカリキュラムデザインを行っています。このカリキュラムを踏まえて、時間割は上記のAパターンでスタートして、その後各学級の進捗に合わせてBからC、CからBと選んで行えるような体制をとっています。

このように、総合的な学習の時間の取組に応じて弾力的に時間割を組み替えるような体制を、教務主任と学年が連携を図りながら進めています。

事例② 1年間を見通した弾力的な授業時数の運用例

《J中学校の概要》

●生徒数531人 ●学級数17学級 ●教師数38人 ●学区域の特色 商店街と住宅地

大都市、下町地域に位置する全8学級の中規模校のJ中学校は、「地域を見つめ、地域の未来を考える」を全体テーマとした総合的な学習の時間「地域未来」を設定し、精力的に地域についての調査活動、地域貢献に関わる体験学習等を実施しています。

各学年の年間指導計画においては、地域行事等との関わりにより、地域での体験学習の実施時期、探究的な学習の実施時間等が大きく異なっています。

第1学年は、職場体験のために3学期に30時間が設定されています。第2学年は、7月に実施される地域の伝統行事に運営ボランティアとして参画することから、1学期の授業時数を多く設定しています。

そして、第3学年は「ふるさと再生計画」(70時間)に取り組んでいます。中学生になると、地域との関わりは小学校の時よりも少なくなります。そのような中、本単元は、自分の「ふるさと」を大切に思い、未来を担う一市民としての自覚を深めさせることを大きなねらいとして、第1、2学年での探究的な学習等を通して把握した地域の課題をもとに論文作成と地域貢献学習を進めていきます。3年間の総合的な学習の時間をまとめた論文「私のふるさと創造計画」の同級生・下級生への報告会と4日間の地域貢献活動を行うために、3学期に授業時数を多く設定しています。

	第1学年		第2学年		第3学年	
全体テーマ「地域を見つめ、地域の未来を考える」						
単元名	「地域の今を学ぶ一街の様子と人々の生活」		「ふるさと再発見—伝統文化を中心に—」		「ふるさと再生—今、自分ができること—」	
1学期	●学年ガイダンス	2	●学年ガイダンス	2	●学年ガイダンス	2
	●地域調査活動 ※地域人材とともに地域を調べる学習活動と課題設定	8	●地域の伝統行事についての調査活動 ●運営ボランティア参加 (2h×6日=12h)	28	●日本の伝統文化研究 ●論文「私のふるさと創造計画」執筆のための情報収集	12
夏季休業	個人探究		個人探究		●論文テーマに基づく情報収集と論文指導	8
2学期	●グループ別探究 ※同じ課題を探究する生徒がグループを組み行う ●職業についての調査	10	●地域の伝統行事について学んだことの発表会 ※保護者、地域の方を招いての報告会の実施	22	●「私のふるさと創造計画」論文作成に向けた情報収集と執筆	18
3学期	●仕事探究 ●職場体験 (6h×3日=18h) ●仕事探究の発表	30	●日本各地の伝統文化についての探究講座	18	●地域貢献活動準備 ●地域貢献活動(20h) ●論文報告会準備 ●論文報告会	30

3学期の地域貢献活動は、卒業を間近に控えた1日4時間、5日間で設定しました。地域貢献活動の内容は、論文のテーマに基づき、一人一人の生徒が主体的に選択しました。実施に当たっては、総合的な学習の時間コーディネーターが意欲的に行政、町内会等と調整を図りました。論文報告会は、「第一部：後輩たちに対する論文発表」「第二部：お世話になった方々への論文発表」「第三部：学区内の小学6年生への発表」という三部構成で実施しました。

文部科学省は、平成31年3月29日付けで「休業日等における総合的な学習の時間の学校外の学習活動の取扱いについて」通知を行った。通知では、「基本的な考え方」として次のように述べている。

各学校が定める総合的な学習の時間の年間指導計画や単元計画等に、「休業日等における総合的な学習の時間の学校外学習活動」の位置付けを、総合的な学習の時間の探究的な学習の過程を踏まえて明確にする場合には、各学校の判断によって、「休業日等における総合的な学習の時間の学校外学習活動」を、総合的な学習の時間の各学年における年間授業時数のうちの4分の1程度まで実施することができること。

総合的な学習の時間において実施される学校の外部での学習活動については、一般的に平日の授業において実際される場合が多く、また、学習活動を実施する時間の確保や活動先の都合等により、学習活動を実施する時期や時間帯、内容等が限定的となりがちである。そうしたことを考慮して学習機会を確保することを考えた場合には、必ずしも課業期間中だけではなく、土日や長期休業中等を含めて、総合的な学習の時間における学びを充実させることを考えていくことが重要である。通知は、このような趣旨から発出されている。

総合的な学習の時間の学びの質を高めるためには、「休業中等における総合的な学習の時間の学校外学習活動」の指導計画上の位置付けを明確にした上で、例えば、生徒の課題設定や収集した情報の整理・分析などが適切になされるよう教師が事前・事後指導を通して指導にしっかりと関わることが重要である。「休業日等における総合的な学習の時間の学校外学習活動」の実施割合に一定の制限を設けているのは、こうした趣旨による。

各学校においては、通知の趣旨を踏まえ、より一層弾力的に授業時数を運用し、実社会や実生活とのつながりがある実践的な学習活動を展開することが期待される。

第4節 学習環境の整備の実践事例

総合的な学習の時間に生徒が意欲的に取り組み、そこでの学習を深めていくには、学習環境の整備が欠かせない。総合的な学習の時間では、多様な学習活動が行われるため、生徒の資質・能力が十分に発揮されるような学習環境を整えなければならない。

1. 学習空間の確保

総合的な学習の時間では、探究的な学習の過程で、学級内はもちろん、学年内、さらには異学年間での学習活動などが展開されることがある。また、ものづくりや発表のための準備など、多様な学習活動が行われる。

こうした学習活動を行う際、教室以外にも学習活動を行う空間が確保されていると、スムーズに展開しやすい。例えば、オープンスペースなどの多目的に活用できる空間にミーティングテーブルを設置したり移動黒板を用意したりするなど、多様な学習形態に対応できる空間を確保する工夫が考えられる。校内に余裕教室がある場合などは、学習目的に応じて有効に活用することが望まれる。

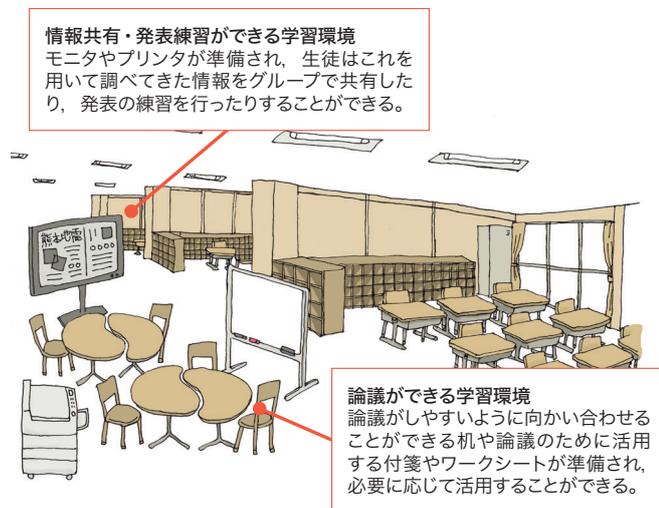
このような学習空間には、総合的な学習の時間の学習活動の流れ図や活動の記録写真などを掲示したり生徒の作品を展示したりすることで、生徒の学習への関心や意欲を高めることができる。また、総合的な学習の時間に活用する教材や資料、実物や模型などを配置し、いつでも生徒が活用できるように用意しておくこと、生徒の学習活動に必要な道具や材料などを準備しておくことも考えられる。

事例① オープンスペースを活用した学習環境の例

K中学校には、教室前に自由に使えるオープンスペースがあります。この空間をICT端末を前提とした生徒の活動を支援するための場所として整備することにしました。

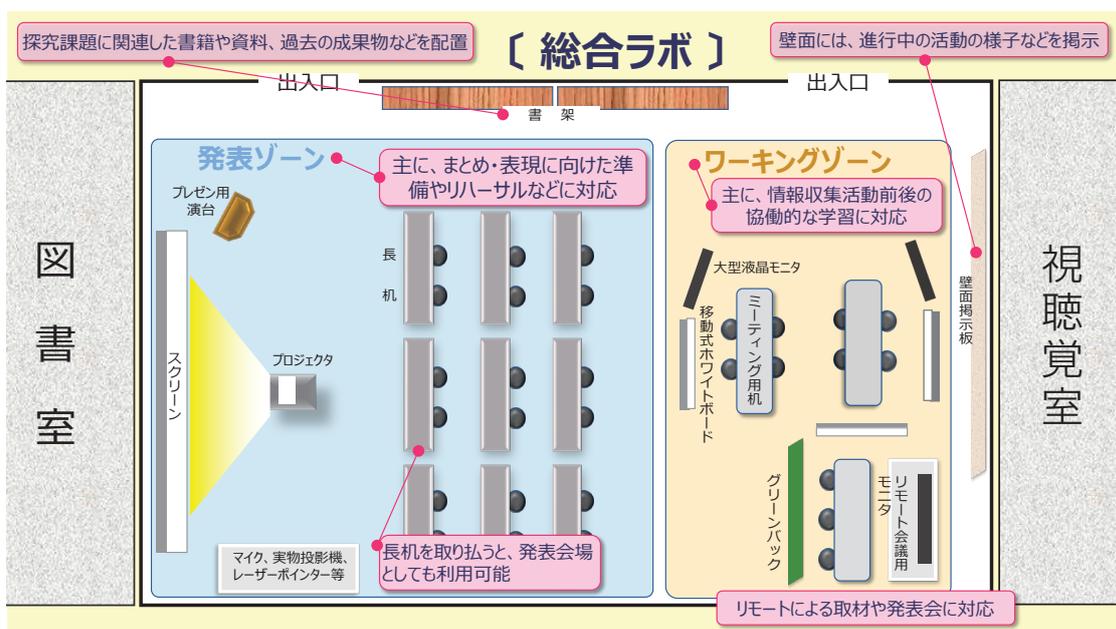
探究的な学習においては、それぞれの生徒が多様な活動を同時進行で行うことが想定されます。情報の収集をしたい生徒、集めた情報をグループで整理し議論をしたい生徒、発表資料等を作ったり発表練習をしたりしたい生徒など、それぞれの生徒が活動を円滑に進めることができる空間として、オープンスペースをデザインすることにしました。

オープンスペースには、グループで議論しやすいような机やホワイトボード、付箋や模造紙等の道具や、提示用の液晶モニターやプリンタ等が準備されており、生徒はこれらの道具や機材を必要に応じて自由に活用することができます。



事例② 総合的学習の時間に使用することを主目的として余裕教室を整備した例

L中学校は、各学年1学級の小規模校です。学級数減による空き教室が生じたこと、校舎の一部改修が行われたのをきっかけに、図書室と視聴覚室の間に総合的な学習の時間で主に使用することを想定した「総合ラボ」を整備することとなりました。この総合ラボの整備は、校内組織の一つである「総合的な学習の時間推進委員会」が自校の総合的な学習の時間の学習内容等を考えデザインしました。



2. 教室内の学習環境の整備

教室には、総合的な学習の時間の学習活動の経過や写真などを掲示したり、総合的な学習の時間の学習履歴や成果を展示したりすることが考えられる。そうすることで、実際に行ってきた学習活動の一つ一つが共有され、総合的な学習の時間での取組への関心が高まる。このことは、生徒の学習への関心や意欲を高めるだけでなく、学習を対象化して振り返り、自らの学びを意味付けたり価値付けたりして、次への学びへと向かうことにもつながる。

また、学習履歴をポートフォリオとして蓄積したファイルや関係する書籍や資料などを活用しやすいように配置することも大切である。テレビモニタやプロジェクタなどで拡大して資料を確認したり、ICT端末を使って情報を収集したりすることができるような学習環境を整備することも考えられる。教室内の学習環境については、生徒の探究的な学びが促進される学びの場となるよう整備することが大切である。

事例 普通教室における総合的な学習の時間を支援するための学習環境の例

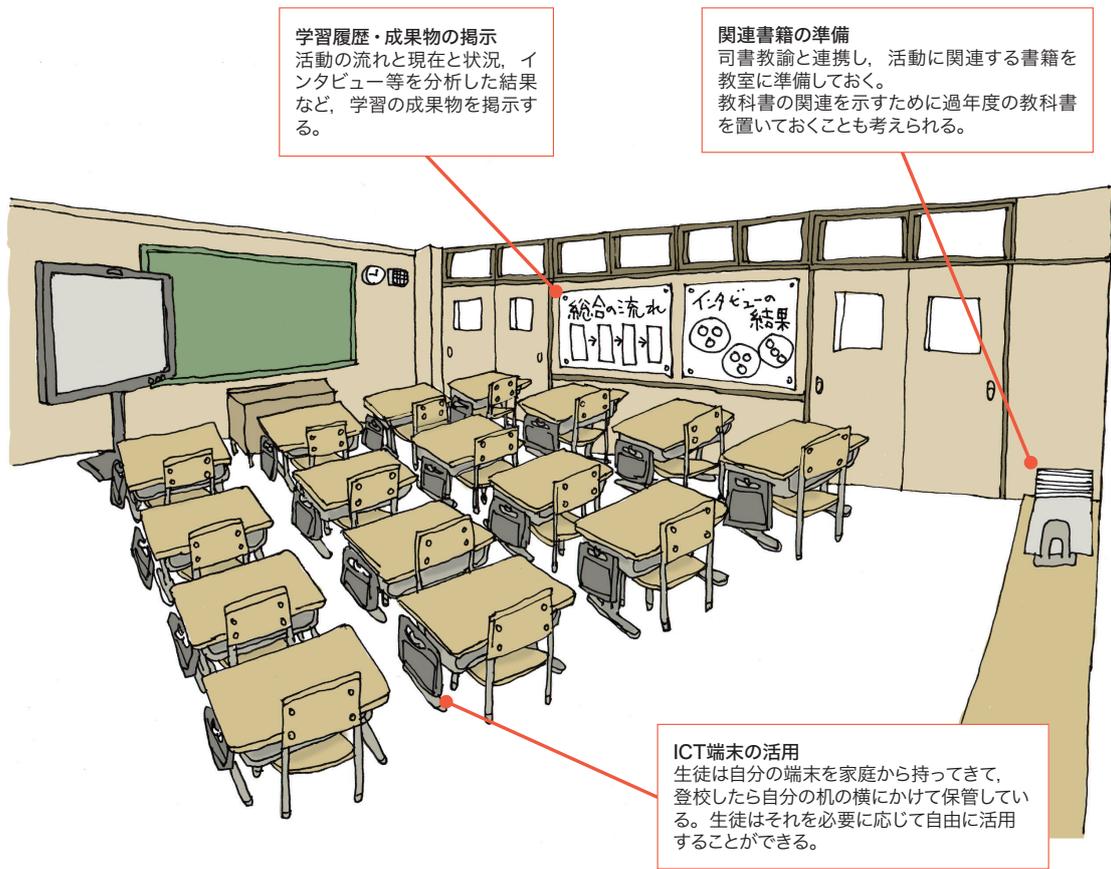
M中学校では、生徒のICT端末、各教室には、無線LAN環境や大型提示装置が整備されている環境が十分に機能するために、普通教室で総合的な学習の時間を支援するための学習環境をデザインしました。

M中学校が整備した総合的な学習の時間を支援するための学習環境のポイントは大きく二つです。

一つ目は、課題に関連した情報を教室に掲示することで、必要な情報に簡単にアクセスできるようにすることです。具体的には、教室の側面に総合的な学習の時間の目標や学習計画、今、取り組んでいることや、インタビューから得られた情報を付箋でまとめたものを模造紙に貼って掲示しました。これにより、生徒が総合的な学習の時間の目標を意識しながら見通しをもって活動したり、これまでの活動を振り返ったりしやすくしています。また、司書教諭と連携して、探究課題に関連する書籍や他教科等の教科書を教室の後ろに置くことで、生徒が探究的な学習を進める中で必要な情報を確認できるようにしています。

二つ目は、一人一台の端末を生徒の活動に応じて自由に活用できるように、生徒が常に手元に置いておくようにしていることです。このM中学校ではICT端末を家庭に持ち帰ることを推奨しています。生徒は家庭で調べてきたことなどを基に、総合的な学習の時間に取り組みます。総合的な学習の時間では、自分の端末を必要に応じて自由に活用することができます。

このように、普通教室を総合的な学習の時間を支援するための学習環境としてデザインすることで、生徒の探究的な学習を支援することが大切です。



学習履歴・成果物の掲示
活動の流れと現在と状況、インタビュー等を分析した結果など、学習の成果物を掲示する。

関連書籍の準備
司書教諭と連携し、活動に関連する書籍を教室に準備しておく。教科書の関連を示すために過年度の教科書を置いておくことも考えられる。

ICT端末の活用
生徒は自分の端末を家庭から持ってきて、登校したら自分の机の横にかけて保管している。生徒はそれを必要に応じて自由に活用することができる。

3. 学校図書館の整備

学習の中で疑問が生じたとき、身近なところで必要な情報を収集し活用できる環境を整えておくことは、探究的な学習に主体的に取り組んだり、学習意欲を高めたりする上で大切な条件である。その意味からも学校図書館は、生徒の想像力を培い、学習に対する興味・関心等呼び起こし、豊かな心や人間性、教養、創造力等を育む自由な読書活動や読書指導の場である「読書センター」や、生徒の自発的・主体的・協働的な学習活動を支援したり、授業の内容を豊かにしてその理解を深めたりする「学習センター」、さらには、生徒や教職員の情報ニーズに対応したり、生徒の情報の収集・選択・活用能力を育成したりする「情報センター」としての機能を担う中核的な施設である。

そのため、学校図書館には、総合的な学習の時間で取り上げるテーマや生徒の追究する課題に対応して、関係図書を豊富に整備する必要がある。学校図書館だけでは蔵書に限りがあるため、自治体の中には、公立図書館が便宜を図り、学校での学習状況に応じた図書の拡充を行っているところや、学校が求める図書を定期的に配送するシステムを採っているところもある。地域と一体となって学習・情報センターとしての機能を高めたい。

学校図書館では、生徒が必要な図書を見つけやすいように日頃から図書を整理したり、コンピュータで蔵書管理したりすることも有効である。図書館担当は、学校図書館の物的環境の整備を担うだけでなく、参考図書の活用に関わって生徒の相談に乗ったり必要な情報提供をしたりするなど、生徒の学習を支援する上での重要な役割が期待される。教師は全体計画及び年間指導計画に学校図書館の活用を位置付け、授業で活用する際にも図書館担当と十分打合せを行っておく必要がある。加えて、こうした学校図書館の環境を、生徒が自ら活用できるようにしたい。そのためには、どこに行けばどのような資料が入手できるのか、どのような観点から必要な情報を探すのかといったことができるようになる必要がある。

一方、総合的な学習の時間において生徒が作成した発表資料や作文集などを、学校図書館等で蓄積し閲覧できるようにしておくことも、生徒が学習の見通しをもつ上で参考になるだけでなく、優れた実践を学校のよき伝統や校風の一つにしていく上で有効である。

事例 学習・情報センターとしての学校図書館整備の例

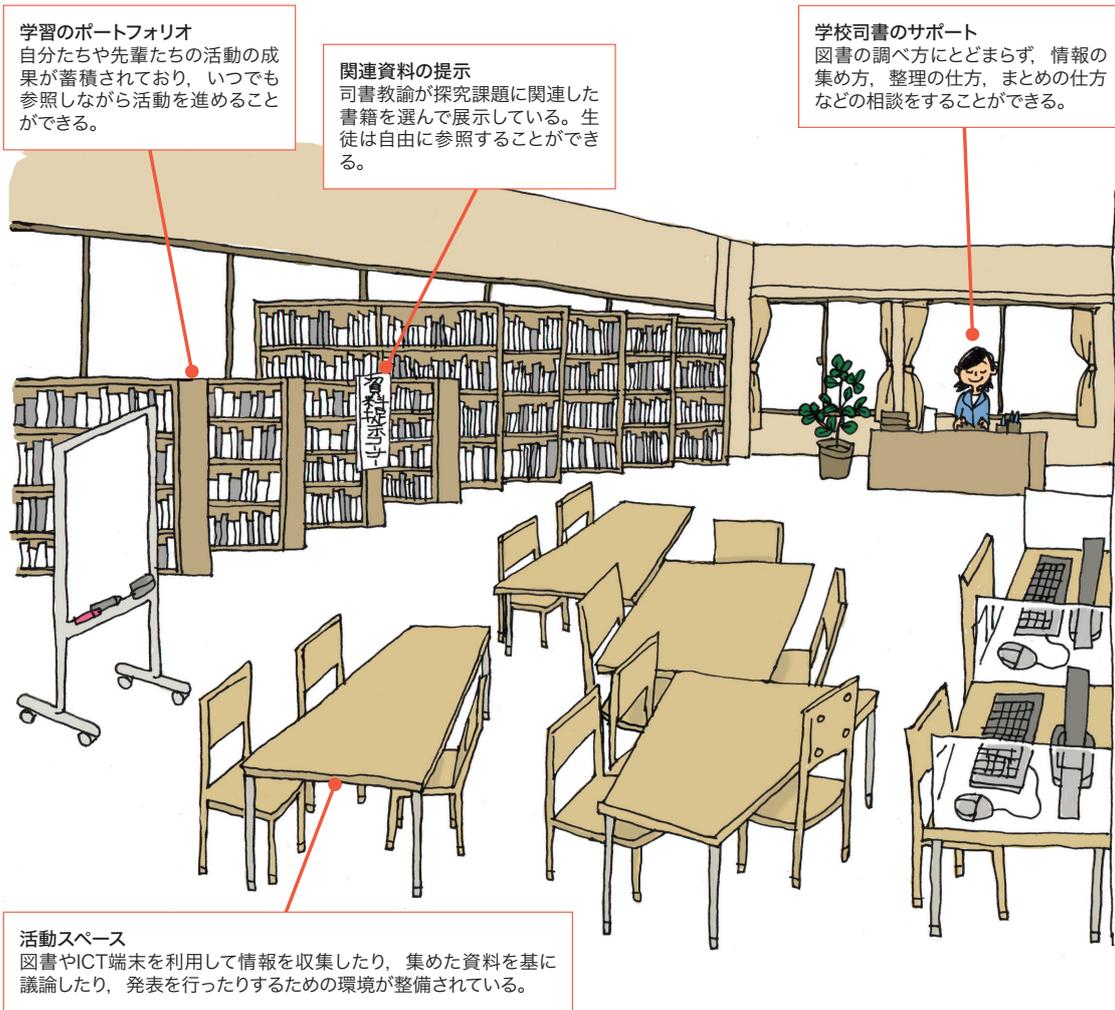
N中学校では、総合的な学習の時間を支援する「学習・情報センター」として、学校図書館を整備することにしました。

①生徒の主体的な学習活動を支援すること、②司書教諭と連携し、情報の探し方・資料の使い方などの情報活用能力を育むための指導を行うこと、③生徒が学習に使用する資料やこれまでの学習の成果物を蓄積し、活用することが可能になるように学習環境を整備しました。

活動スペースには、グループで活動するための机やコンピュータ、ホワイトボード、プロジェクタ等を置き、図書やコンピュータを利用して情報を収集したり、集めた資料を基に議論したり、発表を行ったりするための環境が整備されています。また、探究課題に関連した書籍や統計資料を集めたコーナーのほか、先輩たちの活動の成果が蓄積されているコーナーも準備し、生徒がいつでもこれらの情報を参照しながら活動を進めることができます。

また、図書館に学校司書を配置しており、生徒は情報収集の方法や整理・分析の方法、活動の内容等について、いつでも相談することができます。

生徒がこれらのスペースを自由に活用できるように、学級担任は学校司書に総合的な学習の時間の指導計画等について情報共有をしています。



第5節 外部との連携の構築の実践事例

総合的な学習の時間では、地域の素材や地域の学習環境を積極的に活用することが期待されている。それは、総合的な学習の時間では、実社会や実生活の事象や現代社会の課題を取り上げるからである。また、この時間では、多様で幅広い学習活動が行われることも期待されている。それは、生徒一人一人の興味・関心に応じた学習活動を実現しようとするからである。

そのためにも、外部の協力が欠かせない。具体的には、例えば、以下のような外部人材等との協力が考えられる。

- ・保護者や地域の方々
- ・専門家をはじめとした外部の方々
- ・地域学校協働活動推進等のコーディネーター
- ・社会教育施設や社会教育関係団体等の関係者
- ・社会教育主事をはじめとした教育委員会、首長部局等の行政関係者
- ・企業や特定非営利活動法人等の関係者
- ・小学校や高等学校、幼稚園等の関係者 等

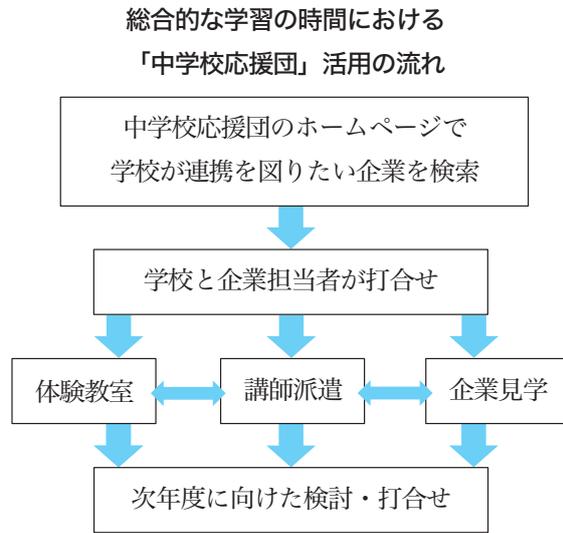
外部との連携に当たっては、管理職や総合的な学習の時間コーディネーター等の担当者が中心になると考えられるが、人事異動によってそれまで築き上げてきた結び付きが薄れてしまうことがないようにしなければならない。そのためには、校内に外部連携を効率的・継続的に行うための体制の整備が必要である。ここでは、体制や外部連携を適切に行うために必要な体制を整備する上での留意点を示す。

外部連携のための5つの留意点	
日常的な関わり	・協力的な体制を構築するためには、日頃から外部人材などと適切に関わろうとする姿勢をもつことが大切である。
担当者や組織の設置	・コミュニティ・スクール(学校運営協議会制度)の活用や、地域学校協働活動との連携を視野に、校務分掌上に地域連携部などを設置したり、外部と連携するための窓口となる担当者を置いたりする。
教育資源のリスト	・総合的な学習の時間に協力可能な人材や施設などに関するリスト(人材・施設バンク)を作成しておく。 ・教育委員会や地域などが作成している外部の人材データベース等を活用することも考えられる。
適切な打合せの実施	・外部に対して適切な対応を心掛けるとともに、育成を目指す資質・能力を明確にして共有し、教師と連携先との役割分担を事前に確認するなど、十分な打合せを行う。教師は学習活動を構成する責任者としての役割を果たすことが求められる。
学習成果の発信	・学校公開日や学習発表会などの機会を生かし、積極的に保護者や地域の方々に対し学習の成果を発表する。学習の成果は生徒の活動だけではなく、連携・協力の成果でもあり、総合的な学習の時間を生徒の成長だけでなく、地域や外部人材、施設、企業等にとっても実りあるものとするができる。

事例① 有志企業による中学校応援団（民間企業団体）活用の例

〇〇市では、子供の健全な育成には地域社会が一体となる必要があるという考えの下、地元の有志企業が中学校を支援することを目的として結束し、「〇〇市の企業人による中学校応援団」が設立されました。各企業がそれぞれの強みを生かし、職業や社会について子供の興味・関心を高めながら、自分たちの将来像や地域社会の未来について考えることができるように、学校と連携を図っています。

これにより、子供はプロフェッショナルの専門的な知見に、体験しながら触れることができるとともに、窓口の一本化による教師の負担軽減、企業のCSR活動の推進など、互恵的な関係を築くことにつながっています。

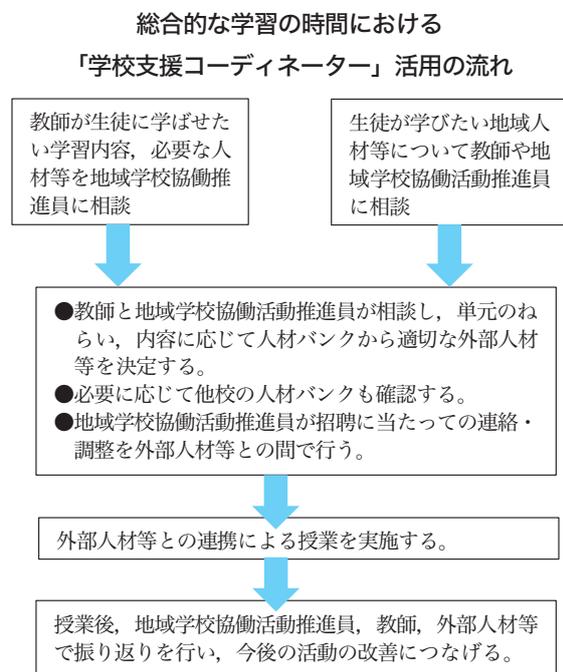


事例② 学校支援本部による地域人材バンクの例

大都市にある〇中学校は、学校運営協議会を設置し、コミュニティ・スクールの取組を進めています。保護者、地域の方々により学校の教育活動全般を支援する組織「学校支援本部」が設置されました。

学校運営協議会には、学校と地域が連携した活動を推進する地域学校協働活動推進員も参加しています。地域学校協働活動推進員は校長の学校運営の方針に基づいて、総合的な学習の時間における地域での学びや生徒の体験活動を支援する取組をコーディネートする役割を担います。具体的には、学校の教育を支える人材の募集、リスト化（人材バンク化）、研修、派遣事務等です。

このことにより、教師、生徒は、総合的な学習の時間等に必要の人材等を地域学校協働活動推進員に相談することで効率的に活動できるようになりました。学校運営協議会を設置し、コミュニティ・スクールの取組を進めている学校は年々増加し、域内の多くの学校でネットワーク化されています。そして、人材バンク間の相互紹介もなされています。



事例③ 総合的な学習の時間が地域コミュニティを再生した事例

大都市部のP中学校は、新興住宅地に位置する学校としては珍しく1.8ヘクタールの学校林をもつ小規模校です。70年ほど前に学校林が地域住民の力で造林されて以来、その学校林は、体験学習の場として活用されてきました。珍しい動植物が生息することから、理科の授業における観察や秋に生徒と保護者等により収穫される栗の実を販売するなどの取組が当時よりなされていました。

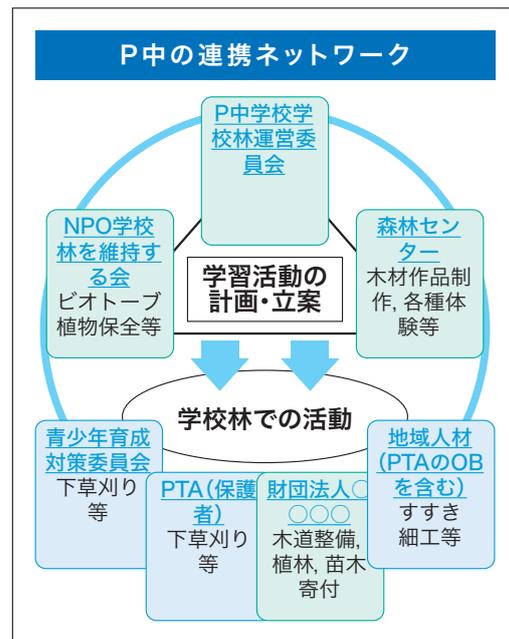
P中学校は総合的な学習の時間が本格的に開始された頃から、この学校林と学校周辺の自然環境を学習の場とする環境教育を総合的な学習の時間の中心に据えてきました。その後、総合的な学習の時間に関わる校内研究が進められる中、この学校林は「豊かな心を育む場」、「問題解決能力を育む場」、「環境問題を考え、行動を始める場」、「地域コミュニティづくりを進める場」として、その存在意義が明確にされ、総合的な学習の時間で意図的・計画的に活用されるようになっていきます。

学校林の維持・管理については、古くからの住民や卒業生等の支援により支えられてきましたが、近年、新興住宅地として発展する中で、新しい住民は、学校の教育活動ばかりでなく、地域における行事等への参加についても、消極的な面が見られるようになってきました。

しかし、総合的な学習の時間において、生徒による学校林での活動が充実するにつれて、生徒たちのために、学校林を保護していく活動を地域全体で活性化させていこうという声が保護者OBを中心に強くなり、古くからの住民、新しい住民が手を携えて、学校林の「自然保護」、「下草刈り」、「樹木剪定」を行うようになってきました。当時の校長は、「学校林での学校、保護者、地域住民による連携は、学校を媒体とした町づくりにつながる。」という意識を教師にも伝え、総合的な学習の時間に関わる校内研究を推進しました。教師は、研究主任を中心に、地域貢献を視野に入れた研究を行いました。

現在、青少年育成団体と総合的な学習の時間コーディネーターを中心に、毎年2回の生徒、教師、保護者、地域住民による学校林の下草刈りが実施されるようになっていきます。また、学校林保護を主な活動内容とするNPOが設立され、学校林の自然の維持・管理のための活動が行われています。このNPOは必要に応じて総合的な学習の時間の講師として授業に参加するほか、地域住民を対象とした「自然観察会」を定期的に行うようになっていきます。その他、学区域内にある小学校、幼稚園、保育園、福祉施設などが季節の自然等を味わうためにこの学校林を訪れるようになりました。学校林の案内やそこでの体験学習等の講師をP中学校の生徒が担うこともありました。

今、学校林は、生徒たちの総合的な学習の時間のメインフィールドであると同時に、その学習を支援するNPOや青少年育成団体等を核とする地域コミュニティ再生の場となっています。P中学校での総合的な学習の時間が、町づくりに果たした役割は大変大きいと言えます。



STEAM教育等の教科等横断的な学習の推進による資質・能力の育成

○AIやIoTなどの急速な技術の進展により社会が激しく変化し、多様な課題が生じている今日においては、これまでの文系・理系といった枠にとらわれず、各教科等の学びを基盤としつつ、様々な情報を活用しながらそれを統合し、課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結びつけていく資質・能力の育成が求められている。

○教育再生実行会議第11次提言において、幅広い分野で新しい価値を提供できる人材を養成することができるよう、新学習指導要領において充実されたプログラミングやデータサイエンスに関する教育、統計教育に加え、STEAM教育の推進が提言された。高等学校改革を取り上げた本提言において、STEAM教育は「各教科での学習を実社会での問題発見・解決にいかしていくための教科横断的な教育」とされている。

○このSTEAM教育については、国際的に見ても、各国で定義が様々であり、STEM (Science, Technology, Engineering, Mathematics) に加わったAの範囲をデザインや感性などと狭く捉えるものや、芸術、文化、生活、経済、法律、政治、倫理等を含めた広い範囲で定義するものもある。

STEAM教育の目的には、人材育成の側面と、STEAMを構成する各分野が複雑に関係する現代社会に生きる市民の育成の側面がある。各教科等の知識・技能等を活用することを通じた問題解決を行うものであることから、課題の選択や進め方によっては生徒の強力な学ぶ動機付けにもなる。一方で、STEAM教育を推進する上では、多様な生徒の実態を踏まえる必要がある。科学技術分野に特化した人材育成の側面のみに着目してSTEAM教育を推進すると、例えば、学習に困難を抱える生徒が在籍する学校においては実施することが難しい場合も考えられ、学校間の格差を拡大する可能性が懸念される。教科等横断的な学習を充実することは学習意欲に課題のある生徒たちにこそ非常に重要であり、生徒の能力や関心に応じたSTEAM教育を推進する必要がある。

このためSTEAMの各分野が複雑に関係する現代社会に生きる市民として必要となる資質・能力の育成を志向するSTEAM教育の側面に着目し、STEAMのAの範囲を芸術、文化のみならず、生活、経済、法律、政治、倫理等を含めた広い範囲 (Liberal Arts) で定義し、推進することが重要である。

○新学習指導要領においては、学習の基盤となる資質・能力や、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を育成するため、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図ることとされている。

STEAM教育の特性を生かし、実社会につながる課題の解決等を通じた問題発見・解決能力の育成や、レポートや論文、プレゼンテーション等の形式で課題を分析し、論理立てて主張をまとめること等を通じた言語能力の育成、情報手段の基本的な操作の習得、プログラミング的思考、情報モラル等に関する資質・能力等も含む情報活用能力の育成等の学習の基盤となる資質・能力の育成、

芸術的な感性も生かし心豊かな生活や社会的な価値を創り出す創造性などの現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成について、文理の枠を超えて教科等横断的な視点に立って進めることが重要であり、その実現のためにはカリキュラム・マネジメントを充実する必要がある。

○STEAM教育は、「社会に開かれた教育課程」の理念の下、産業界等と連携し、各教科等での学習を実社会での問題発見・解決に生かしていく高度な内容となるものであることから、高等学校における教科等横断的な学習の中で重点的に取り組むべきものであるが、その土台として、幼児期からのものづくり体験や科学的な体験の充実、小学校、中学校での各教科等や総合的な学習の時間における教科等横断的な学習や探究的な学習、プログラミング教育などの充実にも努めることも重要である。さらに、小学校、中学校においても、児童生徒の学習の状況によっては教科等横断的な学習の中でSTEAM教育に取り組むことも考えられる。その際、発達の段階に応じて、児童生徒の興味・関心等を生かし、教師が一人一人に応じた学習活動を課すことで、児童生徒自身が主体的に学習テーマや探究方法等を設定することが重要である。

○高等学校においては、新学習指導要領に新たに位置付けられた「総合的な探究の時間」や「理数探究」が、

- ・実生活、実社会における複雑な文脈の中に存在する事象などを対象として教科等横断的な課題を設定する点
- ・課題の解決に際して、各教科等で学んだことを統合的に働かせながら、探究のプロセスを展開する点

などSTEAM教育がねらいとするところと多くの共通点があり、各高等学校において、これらの科目等を中心としてSTEAM教育に取り組むことが期待される。

また、必修科目として地理歴史科・公民科や数学科、理科、情報科の基礎的な内容等を幅広く位置付けた新学習指導要領の下、教科等横断的な視点で教育課程を編成し、その実施状況を評価して改善を図るとともに、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制の確保を進め、地域や高等教育機関、行政機関、民間企業等と連携・協働しつつ、各高等学校において生徒や地域の実態にあった探究学習を充実することが重要である。

その際には、これまでのスーパーサイエンスハイスクール（SSH）などでの教育実践の成果を生かしていくことが考えられる。

さらに、教員養成や教員研修の在り方も併せて検討していくことが重要である。

○STEAM教育の推進に当たっては、探究学習の過程を重視し、その過程で生じた疑問や思考の過程などを生徒に記録させ、自己の成長の過程を認識できるようにするとともに、社会に開かれた教育課程の観点から、STEAM教育に関わる学校内外の関係者による多様な視点を生かし、生徒の良い点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるよう努めることが重要である。

○また、実社会での問題発見・解決に生かしていく視点から生徒が自らテーマを設定し、学習を進めるためには、生徒が地域や産業界、大学などと多様な接点を持ち、社会的な課題や現在行われている取組などについて学ぶことが必要である。生徒が多様な機会を得ることができるよう、社会全体で取組を進めることが求められる。

このため、国においては産業界や大学等とも連携し、STEAM教育に資する教育コンテンツの整備を進めるとともに、事例の収集や周知などの取組を進める必要がある。

○STEAM教育等の教科等横断的な学習の前提として、小学校、中学校、高等学校などの各教科等の学習も重要であることは言うまでもない。各学校において、習得・活用・探究という学びの過程を重視しながら、各教科等において育成を目指す資質・能力を確実に育むとともに、それを横断する学びとしてのSTEAM教育を行い、更にその成果を各教科に還元するという往還が重要である。

(参 考)

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）(中教審第228号)

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm

今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開

中学校編作成協力者一覧（五十音順）

（職名は令和4年3月現在）

内田裕斗	愛知県岡崎市立羽根小学校教諭
鎌田明美	徳島県勝浦町立勝浦中学校教諭
後藤竜太	大分県教育庁義務教育課指導主事
指原健太郎	大分県大分市立碩田学園教諭
泰山 裕	鳴門教育大学大学院学校教育研究科准教授
西野雄一郎	愛知教育大学講師
松村央子	北九州市教育委員会学校経営・教育指導課指導主事
三島晃陽	岐阜県郡上市立郡南中学校校長

なお、文部科学省においては、次の者が本書の編集に当たった。

常盤木祐一	初等中等教育局教育課程課長
能見駿一郎	初等中等教育局教育課程課学校教育官
齋藤博伸	初等中等教育局教育課程課教科調査官
加藤 智	初等中等教育局教育課程課教科調査官
鈴木健一郎	初等中等教育局教育課程課教育課程第一係長
友永有司	初等中等教育局教育課程課教育課程第一係専門職
宮崎友秀	初等中等教育局教育課程課教育課程第一係

